



Christian Literature  
Society

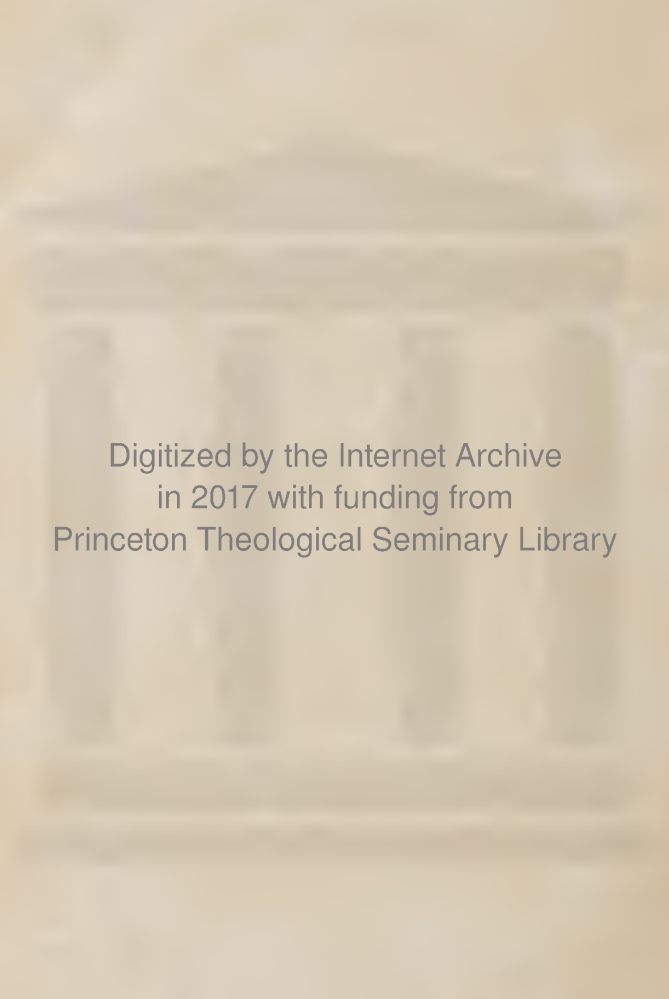
教 文 館

GINZA, TOKYO, JAPAN.

創 世 記 時 代

定 價 金 貳 圓

出 版 部

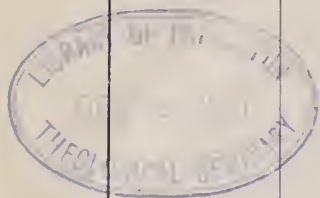


Digitized by the Internet Archive  
in 2017 with funding from  
Princeton Theological Seminary Library





Charles Alexander Logan  
Devotional Commentary. Genesis



# 創世記時代

— 創世記の内容 —

シー・エイ・ローガン著

東京 教文館發行

教文館の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本館は日本に在る基督教ミツシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本館の會員及び維持者は必ずしも本館に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

## 序

想ひ出すのも嬉しいことである。私はローガン先生のこの創世記の講義を聽いて十五歳の春、始めて人間らしい氣持ちになつたのであつた。

此の書物に私が序文を書くなど云ふ事は、全く柄にも似合はないことである。どうかした間違ひか——恐らく私がローガン先生より、日本に於て、より多く知られて居ると云ふ爲であらう——ローガン先生は私に序文を書く様に云つて來られた。先生の命令だから私は喜んで、序文らしいものを書くことにする。

然しそれは自ら先生と私の關係に返つて來る。私が中學校の三年生の第三學期のことであつた。亞米利加から初めて來られたローガン先生は、私達の爲にイエス傳の講義を、徳島市通町の日本基督教會で一週間に一回づつ、英語の練習の爲に開いて下さることになつた。これがそも——私が西洋人から、英語の發音を聽いた最初の時であり、また基督教らしい話を聽いた始

めての時であつた。それまでに私はローガン先生の夫人の弟に當られる、マヤス先生夫婦の顔を見たことはあるが、話を聞いたことは一度も無かつた。

ローガン先生はステパノを思はず様な、美しい柔和な輝く顔の持主であつた。第一私はローガン先生の顔が好きであつた。ローガン先生は私達に、青インキで書いた蒔菫版刷のイエス傳の梗概を、講義のある度毎に二三頁づつ渡された。その丁寧な準備が私の心を搏へた。先生は美しい發音の持ち主で、銀鈴を振る様に、自分の書いて來られた講義の梗概を讀んで行かれた。私が數年來、聖書研究の梗概を何時も謄寫版にして渡して居るのは、私がローガン先生の蒔菫版から受けた最初の強い刺戟を、その儘眞似をして居るのである。

然し不幸にして、ローガン先生の聖書の講義は二三回で中絶してしまつた。そしてマヤス先生が、その後を繼がれる事になつた。(このマヤス先生には、言葉に盡くされぬ大恩を私は受けたのであつた。)

その後ローガン先生は再度火曜日の晩に、創世記の講義を中學生や一般の希望者の爲に開いて下さる事となつた。私は中學校の英語の時間より、毎火曜日の晩のローガン先生の創世記の

時間で、英語を勉強する時間が多かつた。

其の當時は、私の知識慾が最も盛な時であつたから、私は一晚をローガン先生の宅に費すことを、随分惜しく思つたが、唯ローガン先生が好きだつたものだから足繁く通つた。

實際を云へば、その當時私は世界で最も寂しい青年であつたので、親切にして呉れる人を捜して居た。無償で英語を習つた上に、面白い天地創造の話を聴かしてくれ、童話に出て来るお爺さんの様に親切なローガン先生に自然と引付けられたのであつた。

私はちつとも嘘を云つて居らない。私は今でも、ローガン先生は世界の中で最も聖い最も幸福な美しい人だと思つてゐる。私は基督教の教理を聴かなくつても、ローガン先生のやうな人を見て、基督教の何を意味するかと云ふことをすぐに感受した。

ローガン先生は聖者である。世の中の人はあまりにローガン先生を知らない。然し私は知つて居る。ローガン先生は矢張り開拓的精神に燃えたシャムのチャドソンや、支那のテラーなどと同じ列に置かるべき宣教師である。然しもの評かな先生が、境遇が異ひ、言葉の違ふ日本では、思ひ切つた傳道が出来なかつたのは當然である様に思ふ。

ローガン先生は私の故郷、阿波の國の爲に殆ど一生を棒に振つてしまはれた。有難いことである。今年の二月であつた。私が、突然叔父が急病であると云ふ事を聞いて阿波に歸つたことがあつた。私は阿波に歸ることは厭である。然しローガン先生の處を尋ねることは最も好きである。それは慈愛の父が自分の息子を待つて居る様に、ローガン先生は何時も私を歓迎してくれるからである。

私に愛といふものが何であるかを教へた二家族がある。ローガン先生の一家族がその一つでマヤス先生の一家族が他の一つである。

私は今、昂奮して居る。實際私に基督教を教へたのは聖書ばかりではない。この二家族の愛が、私の血脈を充分キリストに結び付ける事になつたのである。

私は一九二五年一月ワシントンの全米外國傳道大會で、斯う云ふ言で私の演説を初めた。

『私は外國傳道ミツシヨンの捕虜である』

さう云つた意味は、私がローガン先生の一家族とマヤス先生の一家族から受けた愛の教訓に依つて、私が基督教に導かれたと云ふことを意味したのであつた。

私は知つて居る。今でも私が凡ての戦ひに疲れて行き場を失つた時に、私を迎へて呉れるのは此の二家族であると云ふことを。此等の二家族は私を子供の様に育て、呉れた。十七歳の春から私は全くこの二家族の子供になつた。殊にマヤス博士夫人は私を呼ぶに、「子供々々」と云ふ代名詞で呼ばれた。私が肺病の時に私はマヤス先生から金を貰つて肺病院に這入つた。一年間の保養は全くマヤス先生のお蔭で渥美半島で保養したのであつた。他の人が肺病だと云つて厭がる時に、マヤス先生だけは私が月壹圓で借りてゐた漁師の家に来て、疊のない處で三晩も一緒に寝て呉れた。マヤス先生は私が十七の時から二十の時まで私個人の家教師であり、父であり、友達であり、叔父であつた。そしてローガン先生は、その姉さんの夫である關係で私の叔父さんであつた。私が小さい時から傳道心に燃えたのは、是等の尊き先生達の感化であつた。思想的に云つても、マヤス先生は随分私の爲に骨を折つて下さつたが、ローガン先生は歳の若い私を、良く信仰的に導いて下さつた。私はよくローガン先生夫婦の自轉車に乗つて、ローガン先生の後から阿波の田舎の傳道について行つた。その時の光景は今も私には忘れられない嬉しい光景である。ローガン先生は今も幻を見ながら、阿波の國の教化の爲に祈つて居られ

る。私が自分の故郷の爲にしないで、態々海を渡つて來られたローガン先生が、それをして居られることを有難く思ふ。此間私が徳島に歸つた時に、ローガン先生は此處ことを云つて居られた。

「阿波の國には人口五千以上の小都會が、二十八ヶ所あります。私はその小都會の一つに教會が建つ様に神様に祈つて居ります」と云つたローガン先生は膝を屈めて祈を初められた。

神の人を見た者は幸である。私はローガン先生に於て極美しい、そして靜かな神の使を見た。私にもしもどんな生活が幸福かと問ふ人があつたなら、ローガン先生の様な生活が一番幸

福だと答へるであらう。ローガン先生は全靈全生全身を、日本の爲に捧げて呉れた人である。

私はローガン先生の様になりたい。然し阿波の國は優雅な、アブラハムの様な美しい人を迎へて居ながら、ローガン先生が眞實に偉い人だと云ふ事を知らずに居る。先生は語學の天才で、日本語は私の言葉より遙に美しい。私はローガン先生の説教を良く覺えて居る。詩の様な詞が次から次へ出て來る。先生は日本に來られる前、米國ケンタツキー州の師範學校の校長をして居られた。宣教師の間では、東洋に於て善く知られて居るので、修養會の講演者として、よく



支那邊まで講演に行かれる。ローガン先生は經驗の持主である、米國の生んだ最も善いもの、持主である。ピュリタンの血は、彼の胸の中にそのまま保存せられて居る。私はローガン先生の本があまりに遅く出たことを不思議に思ふ。この美しい書物が、この美しい心の持主によつて、公開されると云ふことは、何といふ幸福なことであらう。考古學的に創世記を教へて呉れる人は澤山あるであらう。然し魂の祕録として、世界一の美しい詩として、教へて呉れる人はさう多くはない。私は此處に最もよき講解者を、阿波の聖者ローガン先生に於て發見したことを喜びとする。

賀 川 豊 彦



# 目次

## 第一章……………一

一、天地創造の聖業……………一

二、眞の宗教……………二

三、創造の課程……………三

## 第二章……………七

一、安息日の起り……………七

二、人……………八

三、人の住所……………一〇

四、人の機會……………一一

五、人の支配……………一二

目次

目次

六、人の妻……………一三

七、人の婚約……………一四

第三章……………一五

一、試練……………一五

二、罪……………一七

三、罪の結果……………一八

四、神罪の源を探り給ふ……………一九

五、蛇への宣告……………二〇

六、女への宣告……………二一

七、男への宣告……………二二

第四章……………二二

眞の宗教と偽の宗教……………二三

第五章……………二六

物質の文明……………二六

第六章……………二九

一、信仰の人……………三〇

二、長壽の人……………三一

三、不死の人……………三三

第七章……………三四

一、洪水の來りし所以……………三五

二、神の憂ひ……………三六

三、ノア即ち慰め……………三七

四、世の改革……………三八

五、救ひの道……………三九

第八章……………四〇

一、新世界……………四一

目次

二、新食物……………四三

三、新規則……………四四

四、新契約……………四五

第九章……………四六

一、全地の一の言語……………四七

二、洪水後の帝國建造……………四八

三、國語及び國民……………五〇

第十章……………五一

一、アブラム召を受く……………五二

二、アブラムとの契約……………五三

三、アブラムとは誰か……………五四

第十、一章……………五六

一、壇を築く人……………五六

二、壇を離れたる人	五七
三、壇に立ち歸る途	六〇

第十二章……………六三

己か神か	六四
------	----

一、親族間の争闘	六五
----------	----

二、平和の談判	六六
---------	----

三、信仰の特質	六八
---------	----

第十三章……………六九

一、軍人としてのアブラハム	六九
---------------	----

二、メルキセテク	七一
----------	----

三、十分の一の献金	七三
-----------	----

第十四章……………七五

顯現の神	七五
------	----

一、千櫓となり給ふ神	七六
二、子を與へ給ふ神	七七
三、信仰を義とし給ふ神	七八
四、契約をなし給ふ神	八〇
五、國民の將來を示し給ふ神	八一
第十五章	八二
一、一夫一婦主義	八二
二、一夫多妻の失敗	八三
三、被壓制者への福音	八六
第十六章	八九
神の六回目の顯現	八九
一、神の新しき聖名	九〇
二、アブラムの新しき名	九〇



三、新しき契約の表象……………九一

四、新しき妃……………九二

五、新しき子……………九三

### 第十七章……………九四

神の友……………九四

一、旅人の款待……………九五

二、款待の報……………九六

三、神の友なるアブラハム……………九六

四、仲保の位置……………九九

### 第十八章……………一〇一

ソドムの滅亡……………一〇二

一、ソドムの罪惡……………一〇二

二、燃柴……………一〇四

三、ソドムの最後 ..... 一〇五  
四、ロトの妻を憶へ ..... 一〇七

第十九章 ..... 一〇八

外國に滞在するアブラハム ..... 一〇八

一、アブラハムの不信仰と偽り ..... 一〇八

二、他人の妻 ..... 一一〇

三、酌量すべき事情 ..... 一一一

四、救はるゝ道 ..... 一一二

第二十章 ..... 一一三

信仰の最上試験 ..... 一一三

一、イサクの誕生 ..... 一一三

二、信仰の試練 ..... 一一五

三、神の愛 ..... 一一七

第二十一章……………一一八

配遇を選ぶ方法……………一一八

一、根本主義……………一二〇

二、祈りと導き……………一二一

三、娘の承諾……………一二三

四、新郎の愛……………一二三

第二十二章……………一二四

家督權を輕視せるエサウ……………一二四

一、家督權の賣買……………一二六

二、家督權を賣りし理由……………一二七

三、エサウの將來……………一二九

第二十三章……………一三一

和合無き家庭……………一三一

一、イサクの老衰	一三三
二、嚙天下の家庭	一三四
三、ヤコブの狡猾	一三六
四、エサウの悔み	一三七
第二十四章	一三八
ヤコブの夢	一三八
第二十五章	一四四
一、ヤコブのローマンス	一四五
二、ラバンの悪辣手段	一四六
三、子を産む競争	一四九
四、ヤコブの狡猾なる返禮	一五一
第二十六章	一五三
ヤコブの歸國	一五三

一、エホバの導き	一五四
二、無斷の出立	一五五
三、平和の條約	一五七

第二十七章……………一五八

ヤコブの改心……………一五九

一、神の二營……………一五九

二、困つた通信……………一六〇

三、半身でものを救ひ……………一六〇

四、祈り……………一六一

五、宥めの贈物……………一六三

六、角力をさり給ふ神……………一六四

七、依頼るものは強し……………一六五

第二十八章……………一六六

一、平和の問題……………一六六

二、純潔の問題……………一六八

三、神の約束……………一七〇

第二十九章……………一七一

ヨセフの傳記……………一七一

一、父の愛子……………一七二

二、兄の嫉妬……………一七三

三、賣られゆくヨセフ……………一七六

第三十章……………一七八

奴隸なるヨセフ……………一七八

一、苦の中の幸……………一七八

二、誘惑の中の勇氣……………一七九

三、罵詈雑言の中の沈黙……………一八〇

四、四人の中の主人……………一八二

第三十一章……………一八三

獄より位へ……………一八三

一、酒人の夢……………一八四

二、膳夫の夢……………一八六

三、バロの夢……………一八七

第三十二章……………一九〇

家宰なるヨセフ……………一九〇

一、ヨセフの妻……………一九〇

二、萬國の救主……………一九二

三、夢の成就……………一九三

第三十三章……………一九五

良心の覺醒……………一九五

目次

一、良心の聲	一九七
二、記憶の聲	一九八
三、分別の聲	一九九
四、忠告の聲	一九九
五、ヨセフの心情	二〇〇
六、預言的意義	二〇一
<b>第三十四章</b>	<b>二〇二</b>
一、第一の探針	二〇二
二、第二の探針	二〇三
三、第三の探針	二〇五
<b>第三十五章</b>	<b>二〇七</b>
ヨセフ傳の妙境	二〇七
一、總理大臣の正體	二〇八



二、和平の言葉	二〇九
三、イスラエル人の救ひ	二一一

### 第二十六章

カナン人エジプトに入る	二一二
一、神の導き	二一二
二、ヨセフとその父	二一三
三、パロ王とヤコブの會見	二一四
四、ヤコブの最後の願ひ	二一五

### 第二十七章

祖先ヤコブの臨終と預言	二一六
一、ルベン	二一八
二、シメオン	二一九
三、レビ	二二〇

## 目次

四、ユダ	二二〇
五、ゼブルン	二二二
六、イツサカル	二二三
七、ダン	二二三
八、ガド	二二四
九、アセル	二二四
十、ナフタリ	二二五
十一、ヨセフ	二二五
十二、ベニヤミン	二二六
第三十八章	二二八
一、ヤコブの葬儀	二二八
二、ヨセフの赦し	二三〇
三、ヨセフの柩	二三二

# 第一 第一章

## 参照 創世記第一章

### 一、天地創造の聖業

『元始に神天地を創造たまへり』

今私共が舊約聖書の最初の頁を開いて見るならば、其の巻頭が以上の句を以て書き始められてあるのを見出すであります。これは議論ではありません、また疑問を挟むべき問題でもありません、たゞ一つの偉大なる事實を啓示されてゐるのであつて、換言すれば天地萬物の起源の説明に外ならないのであります。

神は創世記の主眼、中心でありまして、其の第一章の中だけでも神といふ字が三十回以上も記されてあります。神は即ち此の章に於ける重なる動詞の主格であり、またあらゆる動作の働

原に在し、創めより働き給ふのであります。「我が父は働き給ふ」と主イエスは人々に教示せられました。獨りの活ける眞の神は全智全能にして愛に富みその獨りの聖子の榮えをあらはさんが爲めに天地萬物を造り、これを保ち、而してすべてそれらの上に聖旨を成遂げたまふのであります。これは基督教の思想、信仰の根本となるべき點であります。

## 二、眞の宗教

聖書は一神教の歴史であります。透明清淨なる河水が溪谷より流れ出で、ゆたかに平野を潤す如く、唯一の造主なる活ける神を信する宗教、即ち一神教は、神を源泉として流出し、やがて萬民をうるほし、活かしめるところの宗教であります。

神を知る事は宗教の眞髓でありますが、此の世の中には二種の宗教があります。一つは人間の方から神を考へて造り出したところの宗教、即ち眞の神を知らずして自ら神を創造し、様々の形の上にこれをあらはして祀らんとする宗教で、これは取りも直さず人間の手によつて造られたる神を拜する偶像教であります。他の一つはこれに反し、神の方から啓示せられるまゝに造

物主なる唯一の神を禮拜する宗教であります。キリスト教は神を造主と仰ぎ、唯一の君主、諸々の王の王、主の主、永遠の生命を保ち給ひ、無限の榮光の中に住まはれ、未だ人の見ず、また見る事能はざる全能者であると教へます。それ故キリスト教は天啓教であります。我々人間之眼に見る事の出来ない、限りある人心の想像の及ばざる、活ける眞の神より主イエス、キリストは遣はされ給うたのでありまして、而して主は御自身が親しく神について觀、また神より聽きたまひしところをそのまま私共に傳へられたのであります。

天啓教によらずして神を知る事は出来ません、キリストに依らずしては何人も父なる神の御許へ到ることは出来ないであります。永遠の生命は、唯一なる眞の神とそのつかはし給ひしイエス、キリストを知る事によつてのみ與へられるのであります。

### 三、創造の課程

元始に神が天地を創造り給ひました。然らば神は如何にして萬物を創造せられたかといふ疑問がこゝに起ります。進化によつてか、何か他の特別の方法によつてであるか、果して如何な

る手段によつて神は萬物をつくられたのでありませうか。

聖書を研究するに當りこゝに一の注意すべき事柄があります。聖書といふ書物は化學や物理學の教科書とは異つて、人々に神を知らしめるところの宗教書である事を忘れてはなりません。それ故にその創造の方法、即ち神の天地萬物を創造し給うた課程は、科學の立場からこゝに示されてはないのであります。これは科學者の研究に待つべき問題であります。ダウキンの時代よりこの方、科學者は多く進化論を熱心に主張して居りますが、然し、神は果して萬物を進化せしめ給うたのであるか、或は又他の方法によつて創造せられたか、それは兎に角更に研究を要すべき問題であります。たゞ信仰ある人々にとつての最も重要な一點は、神が創造者に在すといふ事實であります。進化論が唯論說に止まらず、證明ある事實となつた際には神は即ち進化者であることを信すべきでありませう。たゞ單に進化論といふ論說に惑はされて、その偉大なる進化者を知らずに居るといふことは、情ない次第と言はねばなりません。

神は宇宙を創造せられました、而してその創造に就て創世記第一章中の三ヶ所に注意すべきであります。

『神天地を創造たまへり』(一〇一)

これは總ての物質の現象を示して居ります。單に物を形造るといふ事ではなく、すべての物質現象の備へが成されたといふ意義であります。神は萬物の造主に在すのであります。

『神諸の生物を其類に従ひて創造りたまへり』(一〇廿一)

これは即ち生命の創造であります。此の時に至るまで活ける者とはたゞ獨り、即ち生命の源なる神のみであつて、魚の命も、鳥の命も、其の他の諸動物の生命も、皆その活ける神の御手によつて創造せられたものであります。近來生命といふことが盛んに研究せられ、醫學者は智慧を盡してその研究に没頭して居ります。生命は何物にも代へ難い大切なものでありますから、その研究は實際價値ある研究に相違ありません。然し生命の研究であるからと云つて、たゞ單に食物、飲物、着物等の事のみを考究し、その生命を創造し給ふ神に就て考へないといふ事は、非常な矛盾といはなければなりません。永遠の生命は獨りの神を知る事によつてのみ獲得することが出来るのであります。

『神其像の如くに人を創造たまへり』(一〇廿七)

こゝに人類の創造が指示せられてをります。單に人間を形造る事ではなく、人を創造することでもあります。人は新しい創造であります、今まであつたものを造り直したとか、或は何物かど進化したとかいふ事でなくして、人類は神の新しい創造であることを科學者も亦知らねばなりません。進化論を論説として研究するのはよい事ではありますが、私共は人が猿から進化して出来たものとは信ぜられません。人は神の像であります、萬物の靈長たる人間の價値はこゝにあるのであります。私の祖先が猿であつた事を私は信じません、私の祖先も、私も、等しく神に象られ、神によつて新たに創造せられた人間であり、隨つて私共人類は神を知り、神と親しく交はることの出来るものである事を確信する次第であります。



## 第二 第二章

参照 創世記第二章

### 一、安息日の起り

『第七日に神其造りたる工を竣たまへり即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまへり 神七日を祝して之を神聖めたまへり』(二〇二、二三)

これは安息日の起源でありまして、私共はよく此の句の意義を解すべきであります。神はその業を終へて七日に休み、七日を祝してこれを聖とし給うたのであります。これによつて私共は安息日といふものゝ意義、性質を知る事が出来ます。安息日は業務を終へて休むべき日、肉體も精神も安息を得べき日、神の祝福を求むべき日、即ち神の潔め給うた聖日であつて神を禮拜すべき日であります。開闢より二千五百年の終りに於て、神がモーセに律法を授け給うた

時に、安息日を守るべき事について、『安息日を憶えてこれを聖潔すべし 六日の間勞きで汝の一切の業を爲べし 七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲べからず』(出廿〇八—十)と戒められました、これは十誡の中の一つであります。

キリストの時代に於ける偽善的な宗教家等は、聖日の眞の意義を取り違へて、聖日には慈善的行爲をも避けて爲すべからずとなし、病を癒す事をさへ禁じてこれを認めず、却て安息日のために人を煩はせるやうな結果となつて居りました。キリストはこれを誡めて、人は安息日のために造られたのではなく、安息日が人の爲めにつくられたのであると教へられました。安息日に善事を行ふことは當然神の嘉し給ふところ、神の聖旨にかなふところであります。

## 二、人

『エホバ神士の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ』(二〇七)

人とは何でありますか。前章の研究によれば人は神の像に似せて創造されたものであります、即ち人は道德的宗教的動物で、神と交はることの出来る靈性を賦與せられて居るものであ

ります。此處に掲げた第七節の言葉によつて、私共は人といふものゝ性質をも了解することができます。人の身體は物質的のもの、土の塵で造られたものであると同時に、人の靈性は神の吹入れ給うた息でありまして、こゝに聖書の心理學の出發點があるのであります。

新約聖書に據れば人は三つの要素より成立つて居ります。即ち身體と精神と靈魂とであります。身體は精神の衣であり、精神は靈魂の衣であります。パウロはテサロニケの信者達を祝福して「願はくは平安の神みづから汝らを全く潔くし汝らの靈と心と體とを全く守りて我らの主イエス、キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん事を」〔撒前五〇廿三〕と言ひました。肉體に五感が與へられて事物を感觸し、精神に知情意が備へられて人格的の働きをなし、靈魂に神の生命が賦與せられて神を知り、神と交はり、神に仕へて靈的の働きをなし得るやう創造されたものが即ち人であります。イエス、キリストが「なんぢ心を盡し精神を盡し思を盡して主なる汝の神を愛すべしこれは大にして第一の誠命なり」〔太廿二〇卅七、卅八〕と教へ給ひし聖言の意義を深く味ふべきであります。

## 三、人の住所

『エホバ神エデンの東の方に園を設て其造りし人を其處に置たまへり』(二〇八)

人類の原始時代なるエデンの園は、何處の如何なる場所にあつたかを調べてみますと、聖書に示されてある通り、エデンの園からは四つの河が流れ出てゐましたから、それは河の源で高い所にあつたに相違ありません。而してエデンといふ名は『平』といふ意味であるといふ説もあります。其の國に鑛物があつたところから考へて見ても、エデンの園は高い平地であり、ユフラテ河とチグリス河との源で、多分今のアルメニアの中であつたことと思はれます。多くの人類學者の等しく認めて居るところは、人類の原始地はアジアの内地の高い平野であるといふことであります。今日全世界に住む人々は、皆一つの血を享けて來たものであつて、原始に於ては即ちこのエデンより出でたのであります。

## 四、人の機會

エデンの園の中には『生命の樹』がありました。エホバは人に凡ての樹の實を食ふ事を許されたのであります。即ち人には『生命の樹』の實を食うて、限りなく生き得る機會が與へられてゐたのであります。而して何の不足もなく、苦勞もせず、永遠限りなく生き得るためには只一つの條件がありました、それは即ち神に従ふ事であつたのであります。神はこの時その造り給ひし人を試みんがために、なほ他に一本の木、即ち『善惡を知るの樹』を生ぜしめられました。神はこの木によつて人を試みられ、人が善に赴くか惡に往くか此の木によつて知られるといふ意味から、それは『善惡を知るの樹』と名づけられたのであります。而して神はその創造り給ひし人アダムに向つて、

『汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり』(二〇七)

と告げられました。

死は不自然であります。死ぬる事は神の聖旨ではありません、凡ての人が健かに、苦しむ事なく、永遠に生命を完うすることが神の聖意なのであります。然し人類は奴隸ではなく、始めより自由を與へられて居たのであります、神はその自由にまかせて人が自ら選ぶところを試

みられたのでありました。私共にも亦限りなき生命を獲得し得る機会が與へられて居ります。われらの始祖は服従によつてそれを得られる筈でありましたが、私共は信仰によつてこれを恵まれる筈であります。イエス、キリストを信する者は限りなき生命を與へられ、永遠に生き得るのであります、これは即ちキリストの福音であります。

### 五、人の支配

神は其の像に似せて創造られた人を萬物の靈長として立てられました。而して總ての獸と總ての空の鳥とを造られて後、アダムがそれらを何と名付けるかを見んと彼の所へ率ゐてゆかれたのであります(二〇一九)。我等の祖先は決して現代の人間よりも劣つたものであつたではありません、彼等は神の像であり、智慧にみち、凡てのものに名を付けてこれを支配する權を神より與へられてゐたのであります。

### 六、人の妻

『エホバ神言たまひけるは人獨なるは善らず我彼に適ふ助者を彼のために造らんと』(二〇十八)

妻は夫の眞の助力者である筈で、決して夫の婢でも財産でもありません、また姑の下婢であるべきでもありません。眞の意味に於ける夫の伴侶であり、又子供の母たるべきであります。『是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其處を填塞きたまへり エホバ神アダムより取たる肋骨を以て女を造り之をアダムの所に携きたりたまへり』(二〇廿一、廿二)

右は非常に興味ある、又意味深い言葉であると思ひます。或る古い解釋者は次の様に言ひました『妻は夫よりも勝れるやうにと頭の骨では造られなかつた、又夫に踏み付けられるやうにと足の骨でもつくられなかつたが、妻は夫と同等である様に、そのよき友であるやうにと肋骨で造られたのである。心臓の脇から取られた肋骨であるから、妻は夫の愛すべきもの、保護すべきものである事を意味してゐる』と。

夫には夫の立場があり、妻には妻としての長所があり、而して二人は眞に最上の友である筈



であります。神がアダムの爲め一人の女を造り、これを彼の許に連れ來り給うた時、アダムは『此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ』(二〇二三)

と言ひました。即ちアダムは神よりこの一人の女性を與へられ、全く満足してこれを迎へたのであります。現時何れの國を見渡しても男女の數は大抵同數であります。一人の男性に對して一人の女性を創造り給ふ事は、昔も今もかはりなき神の尊き聖旨なのでありませうか。

## 七、人の婚約

『是故に人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一體となるべし』(二〇廿四)

結婚は夫妻自身の聖く尊き結合でありまして、決して財産の都合とか、その他の便宜による間に合せの結合ではありません。再言すれば婚姻は個人と個人との神聖なる結合であつて、家と家との財産關係などは縁遠い問題であるべきであります。故に嫁するといふ事は姑の下婢としての生活に入る事ではありません。嫁の日常生活に關してまで姑が彼是制限を與へるなどの事實は、全くあり得べからざることでありませう。『父母を離れて』とあるのはこれが神の



思召である事を示して居ります、夫は唯に妻のため、妻はたゞに夫のためにあるのであつて、夫婦は神聖なる一體であります、それ故に神の合せ給へるこの神聖なる婚姻關係は、人によつて左右せられる事は出来ない筈であります。

### 第三章

參照||創世記第三章

#### 一、試練

『エホバ神の造りたまひし野の生物の中に蛇最も狡猾し蛇婦に言ひけるは神眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言たまひしや 婦蛇に言けるは我等園の樹の果を食ふことを得 然ど園の中央に在樹の果實をば神汝等之を食ふべからず又之に捫るべからず恐は汝等死んと言給へり 蛇婦に言けるは汝等必らず死る事あらじ』(三〇一—四)

こゝにいふ蛇は普通の匍蛇ではありませんでした、神の宣告を受けた結果として蛇は匍ふべきものとなつたのであります。元來蛇は直立し、智慧にみち、形態の立派な、物言ふ事の出来る、人間に最も近いものであつたらしく考へる人もあります。然し蛇を利用して女を試みたものは悪魔でありました、これは聖書中の他の言葉によつて明かにされます。黙示録第十二章九節に、『かの大なる龍すなはち悪魔と呼ばれサタンと呼ばれたる全世界をまどはす古き蛇は落され地に落されその使たちも共に落されたり』と記されてあります。又約翰傳第八章四十四節に、『彼は最初より人殺なりまた眞その中になき故に眞に立たず彼は虚偽をかたる毎に己より語るそれは虚偽者にして虚偽の父なればなり』とあります。

悪魔は悪しき靈にして活ける神の仇、神の創造りたまひし人を惑はし、人を己の所有とせんとするものであります。悪魔もはじめは天使であつたのであります、自ら傲りて神の權利を奪ひ取らんとしたために、罪の審判に陥つたのであります。此の悪魔が女を惑はして、『善惡を知るの樹』の果を食ふ時は、神の様に賢くなるのであると言ひ偽つたのであります。

## 二、罪

『婦樹を見れば食に善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり』(三〇六)

これは罪の初めであり、神の誠命を犯す事は即ち罪であります。而して罪に陥る階段は大抵いつもかくの如き順序であります。『目に美麗し』とは即ち目の慾であり、『食に善く』は肉體の慾。『智慧からんが爲に慕はし』とは權勢より來る傲慢の爲めに罪を犯す事であり、眼の慾に惑はされ、肉體の欲求に捉へられ、精神的に傲慢にながれたが爲めに神に叛き、限りなき生命を捨て、恐ろしき罪を犯し、その上夫までもともに罪に陥れました。惡魔は女を惑はすために蛇を利用しましたが、男を陥れる爲めには女を利用したのであります。

## 三、罪の結果

『是において彼等の目俱に開て彼等其裸體なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり』(三

(〇七)

罪を犯した爲めに彼等の心には大なる變化が起り、彼等は慾に満たされて恥を知りました。今まで無邪氣な性情を以て神と交はり、清淨潔白なる生活をしてゐた者が、一旦罪を犯すやその性質を一變せられ、神の像なる品性を失ひました。こゝに彼等はその裸體を被はんが爲めに、無花果の葉を以て裳を作りました。これが衣服の初めでありまして、人間はそれ以來着物を着る動物になりました。今日衣服を纏はないといふ事は、人の無邪氣を意味するよりは寧ろ恥を知らぬ事の表現となつて居ります。

『彼等園の中に日の清涼き時分歩みたまふエホバ神の聲を聞しかばアダムと其妻即ちエホバ神の面を避て園の樹の間に身を匿せり』(三〇八)

罪の第二の結果は神に對する恐怖でありました。罪を犯さぬ以前には神と親しみ、親子の情愛も及ばぬ關係に居つたものが、罪の結果人間は神を恐れるものとなりました。神の聖顔を避けたい、神が訪づれ給ふ時身を匿したいと思ふ様になりました。即ち人間は罪の爲めに神を失つたのであります。

『エホバ神アダムを召て之に言たまひけるは汝は何處に居るや 彼いひけるは我園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと』(三〇九、十)

これは偽りであります。罪の果結人間は偽りを言ふものとなりました。元來神の如く眞實であつた人の性が、惡魔に變じて偽るものとなりました。以上の三つの變化が罪の爲めに人間の品性の上の結果となつてあらはれ、かくて人は墮落の淵に陥つたのであります。故に人間は罪あるもの、『義人なし一人だになし』(羅三〇十)とパウロも言ひました。

#### 四、神罪の源を探り給ふ

神がアダムに

『汝は我が汝に食ふなかれと命じたる樹の果を食ひたりしや』(三〇十一)

と問ひ給ふた時に、アダムは答へて

『汝が與へて我と偕ならしめたまひし婦彼其樹の果實を我にあたへたれば我食へり』(三〇十

二)

と云ひ、其の罪を女に負はせたのであります。その女が同じく神より問はれた時には蛇にその罪を負はせました、自己の責任を避けて他に罪を負はせんとする、これまた罪ある人間の性情の一面であります。

### 五、蛇への宣告

『エホバ神蛇に言たまひけるは汝是を爲たるに因て汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて詛はる汝は腹行て一生の間塵を食ふべし』(三〇十四)

こゝに蛇は詛はれて地を匍ふものとなりました。博物學者も蛇の構造組織を研究して、元來蛇は動物中高い地位に屬すべきところを、最低の位置にまで引下げられたものであると言つて居ります。

またこゝに私共は次の如き神の宣告を聞きます。

『又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置ん彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん』(三〇十五)

『汝の苗裔』とは惡魔の子供、即ち惡人を意味して居ります。『婦の苗裔』とはイエス、キリスト、又イエス、キリストを信する人々の意味であります。この兩者の間に怨恨を置かんと言はれたのは、惡人等がキリスト信徒等を怨み、彼等は聖子イエスの踵を碎く、即ちイエスを磔るであらうとの意であります。然しながら主イエス、キリストはこの惡魔の頭を碎き、惡魔の業を破らんがために此の世に來り給ふたのであります。

## 六、女への宣告

女は罪の結果として産の苦しみを増されました。婦人は何等の苦痛無しに子を産む筈であります、その苦しみは罪のためであります。又女が夫に敬服せねばならぬ事をもその宣告の一部として示されました。これは第十六節に記されてあります。

## 七、男への宣告

『土は汝のために誼はる』(三〇十七)

元來地の産物は自然の恩恵ゆたかに生じたのでありましたが、今土は誑はれて、人類は勞働により、額に汗して働かなければこれを得る事が出来なくなりました。

「汝は面に汗して食物を食ひ終に土に歸らん其は其中より汝は取れたればなり、汝は塵なれば塵に歸るべきなり」(三〇十九)

かく神は宣告せられました。我等の始祖アダムは即ち、人類を代表してこの罪に陥りました。斯くて凡ての人は罪あるものとなり、また死を見るべきものとはなつたのであります。

第四章

アダム其妻エバを知る彼孕みてカインを生みて言けるは我エホバによりて一個の人を得たりと 彼また其弟アベルを生りアベルは羊を牧ふ者カインは土を耕す者なりき 日を経て後カイン土より出る果を携來りてエホバに供物となせり アベルもまた其羊の初生と其肥たる者を携來れりエホバ、アベルと其供物を眷顧みたまひしかどもカインと其供物をば眷みたる



まはさりしかばカイン 甚怒り且其面をふせたり エホバ、カインに言たまひけるは汝何ぞ怒るや何ぞ面をふするや 汝若善を行はゞ擧ることをえざらんや若善を行はずば罪門戸に伏す彼は汝を慕ひ汝は彼を治めん カイン其弟アベルに語りぬ彼等野にをりける時カイン其弟アベルに起かゝりて之を殺せり（創世記第四章一節八節）

### 眞の宗教と偽の宗教

アダムに二人の息子がありました、一人はカインといひ一人はアベルと呼びます。兄のカインは農業家で弟のアベルは牧畜業者でありました。神は曾て彼等に禮拜することを教へ給ふたに相違ありません。神はアダムと其の妻エバのために皮衣を作つて彼等に着せ給ひましたから、其の時に屠られたる羊を罪のための宥の供物となす事を教へられたことと思はれます。そこでアベルは神の命に従ひ、羊の初児を携へて供物としこれを神に献げました、多分この時天よりの火がこれを焼き盡した事によつて、神の御心になつた事を示されたのでありませう。カインは土より生じた果實を持つて來て神に供へましたが、神はカインと其の供物とを願み給

ひませんでした。何故かといへばカインは神の命に叛いたからであります。カインは自身の罪人たるを認めず、その供物は血を流して罪を負ふ意味の供物でないからでありました。

これによつて私共は眞の宗教と偽の宗教との區別を知る事が出来ます。宗教は神にゆく道でありますから。神の教へ給ふた道をゆくものでなければなりません。此の二つの宗教を對照して見るならば餘程違ふところが見えます。アベルの宗教は神に従ふ信仰の宗教であり、カインの宗教は神に叛いた我儘の宗教であります。前者は自分の罪を悟つて神に懺悔する宗教、後者には罪の懺悔はなく、偽つて自己を正しいものとする態度であります。アベルの宗教には有る供物があります、罪を贖ふ羔羊の血は眞の宗教になくてならぬものでありまして、勿論これは來らんとする神の聖子イエス、キリストの十字架の血を意味してゐたのであります。これに關する聖句の數節を左に引照致しませう。

『我血を見る時なんぢらを逾越すべし』(出十二〇十三)

『萬のもの血をもて潔めらる血を流すことなくば赦さるることなし』(來九〇廿二)

『其の子イエス、キリストの血すべて罪より我らを潔む』(約壹一〇七)

『他の者によりては救を得ることなし』(徒四〇十二)

斯のごとく人の子の來れるも事へらるゝ爲にあらす反つて事ふる事をなし又おほくの人の拯贖として己が生命を與へん爲なり』(太廿〇廿八)

『銀や金の如き朽つる物に由るにあらす瑕なく汚點なき羔羊の如きキリストの貴き血に由ることを知ればなり』(彼前一〇十八、十九)

『視よこれぞ世の罪を除く神の羔羊』(約一〇廿九)

私共は自ら省みて、果して自分の罪を心から神に懺悔した事があるかどうか、主イエスの血を供物として捧げたことがあるかどうかを考へなければなりません。若し己の罪を悔いてこれを言ひあらはすならば、神は眞なる正しきものなるが故に、必ず我等の罪を赦し、凡ての不義よりわれらを潔めて下さいます。私共ともに躊躇するところなく今その罪を懺悔し、今この瞬間に、尊き主イエスの血に潔められる恩恵に與らうではありませんか。

第 五 章

カイン、エホバの前を離れて出でエデンの東なるノドの地に住り、カイン其妻を知る彼孕みエノクを生りカイン邑を建て其邑の名を其子の名に循ひてエノクと名けたり、レメク二人の妻を娶れり、アダ、ヤバルを生めり彼は天幕に住て家畜を牧ふ所の者の先祖なり、其弟の名はユバルと云ふ彼は琴と笛をとる凡ての者の先祖なり、亦トバルカインは銅と鐵の諸の双物を鍛ふ者なり、レメク其妻等に言けるは我聲を聽け我わが創傷のために人を殺す（創世記第四章十六節廿四節の略）

物質の文明

弟を殺したカインは神の聖前を離れて出でノドに、住まひました。神をはなれて生活する事は物質的生活の始まりであります。眞の生活の目的である神を離れての生活、即ち單なる生活

のための生活、かくの如き生活は永續することなくやがて終りを見るべき生活であります。『ノド』といふ名は『さまよへる』といふ意味であります。神をはなれたカインはノドに住まひましたが、精神的には流浪者で何等慰安を得るところがありませんでした。我々はみな神のために創造されたものでありまして、私共の心が神の御許へ立ちかへつて來ない間は、如何にしても眞の安息は得られないのであります。

カインの妻は子供を産みこれをエノクと名づけました。漸次に住民も増殖してカインは町を建てました。その町はどの様な町でありましたでせうか。七代目を數へる人々までみな其の邊りに住むやうになりましたから、人口も餘程多くなつてゐた事と思はれます種々の職業、技術も發達し、娯樂の機關も相當に備はりました。ヤバルは牧畜家の祖先であり、ユバルは音樂家の祖先、トバルカインは工業家、發明家でありました。此の如くにして彼等は其處に物質文明の世界をつくり出したのであります。

此の時人々の宗教については如何なる状態でありましたでせうか。カインが神をはなれてノドに住んで以來、暫く宗教に關しては何も記されてありません。町は建設せられました、神

を禮拜すべき教會については何等の歴史も残されて居りません。農業も商業も牧畜業も漸次盛んになりましたが、この時の文明は神の御榮をあらはした文明であつたとは考へられないのであります。音楽なども盛んになりまして琴の音、笛の音、又レメクの戦争の歌などが聞えましたが、神を讚美する聲、人間を向上せしむべき神聖なる歌聲は少しも聞かれなかつたに相違ありません。

道徳的方面に至つては、レメクが二人の妻を娶つた事によつても想像することが出来ませう。又レメクが其の妻等に向つて言つた言葉に、『我わが創傷のために人を殺す』とあります。此等の事實によつて、此の時一夫多妻、殺人、争鬪等が行はれて居た事が解ります。レメクはその若き時の妻の契に背きました、而して肉慾を貪り、其の家庭を亂し、遂には世界の洪水を招く様な結果となつたのであります。ノドの榮華はこのやうなものであります。根柢のない物質文明の成行は大方此の如きものであります。

『故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ イスラエルの神エホバ いひたまふわれは離縁を惡みまた虐遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む故に汝ら誓約にそむきて妻

を待遇はざるやう心につゝしむべし萬軍のエホバこれをいふ』(馬二〇五十六)

## 第六 章

アダム復其妻を知て彼男子を生み其名をセツと名けたり其は彼神我にカインの殺したるアベルのかはりに他の子を與へたまへりといひたればなり セツにもまた男子生れたりかれ其名をエノスと名けたり此時人々エホバの名を呼くことをはじめたり アダムのセツを生し後の齡は八百歳にして男子女子を生り アダムの生存へたる齡は都合九百三十歳なりき而して死リセツの齡は都合九百十二歳なりき而して死リ エノス九十歳におよびてカインを生リ エノスの齡は都合九百五歳なりき而して死リ カイン七十歳におよびてマハラレルを生リ カインの齡は都合九百十歳なりきしかして死リ マハラレル六十五歳に及びてヤレドを生リ マハラレルの齡は都合八百九十五歳なりき而して死リ ヤレド百六十二歳に及びてエノクを生リ ヤレドの齡は都合九百六十二歳なりき而して死リ エノク六十五歳に及びてメト



セラを生り エノクの齡は都合三百六十五歳なりき エノク神と偕に歩みしが神かれを取り  
たまひければをらすなりき（創世記第四章廿五節第五章廿四節の略）

## 一、信 仰 の 人

セツはカインに殺されたアベルの代りとしてアダムに與へられました。カインの子孫は物質文明に走りましたが、セツの子孫は信仰の人々でありました。『此時人々エホバの名を呼ぶことはじめたり』とある如く、彼等は神を崇め、神に祈つて信仰の道を歩みました。セツの子孫については町を建設したり、多くの富を所有したり、技術や科學の進歩發達をはかり、又商工業を盛んにしたといふ様な記録は少しもありません。勿論彼等も此の如き事物の上に、全然干與せぬといふのでもなく、また其の位の力はあつたのでありませうが、然し彼等が生活の目的とする所は此等の事柄の上にはなかつたのであります。彼等は『エホバの名を呼ぶ』事を以て生活の目的と致しました。其の結果道德も進み、一夫多妻や殺人罪などの記録は彼等の生活に就て少しも殘されては居りません。エホバを畏るゝは知識の本であります。



私共は現在果して如何なる傳記を自身に書きのこしつゝあるでありませうか。只物質的の生活くわつしやうを營んでゆくカインの系統けいとうに屬すべきでせうか、或は神を信じ、神の聖旨せいしに従ふことを第一の目的とするセツの系統けいとうを追ふべきでありませうか。我々の生活には世の終りに至るまでこの二系統けいとうが存在そんざいしてゐることを忘れてはなりません。主イエス、キリストは世の終りの比喩ひゆの中に、「雨ながら收穫かりいれまで育つに任せよ收穫の時我かる者にまづ「毒麥どくむぎを抜き集めて焚くために之を束ね麥はあつめて我が倉くらに納れよ」と言はん』(太十三〇三十)と暗示あんしし給ひました。

## 二、長壽の人

此等信仰の人々は皆餘程長命ちやうめいでありました。アダムは九百三十歳さよ、セツは九百十二歳さい、エノスは九百五歳さい、カイナンは九百十歳さい、マハラレルは八百九十五歳さい、ヤレドは九百六十二歳さいまでも生き永らへました。アダムは九百三十歳さいでありましたから、洪水の時代のノアの父レメクが五十六歳さいになるまで長命ちやうめいしてゐたことゝなります。かゝる事實じじつよりしても、世の創始そうしの歴史れきしを少しも間違まちがひなく言傳いひつたへる事が容易たやすく出來たのでありませう。

然し長命はしても『而して死り』と終りに記されてあるのを見ては、いひしれぬ哀愁を感じざるを得ません。たとひ幾百年の永い間子孫を産みて榮え、生き永らへるとも、終に此の世の死は避ける事の出来ない彼等の運命でありました。この運命を人が負はねばならぬこととなつた理由は、羅馬書第五章十二節に示されてあります、即ち『それ一人の人の人によりて罪は世に入りまた罪によりて死は世に入り凡ての人罪を犯し、故に死は凡ての人に及べり』と。罪の故をもつて人は死すべきものとなつたのであります。然しこゝにまた彼等は信仰をもつて死したといふ事を記憶しなければなりません。彼等の肉體は死によつて終りを告げましたが、彼等は信仰によつて救ひを得た人々である事を忘れてはなりません。即ち彼等の死は終局ではないのであります。

『それは一人の不従順によりて多くの人の罪人とせられし如く一人の従順によりて多くの人の義人とせらるゝなり』(羅五〇十九)

『すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり』(約三〇十六)

### 三、不死の人

洪水の以前に、死を見なかつた人が只一人あります、それはエノクでありました。エノクはアダムより七代目の人でありまして、『エノクの齡は都合三百六十五歳なりきエノク神と偕に歩みしが神かれを取りたまひければをらずなりき』とある如く彼は死なずして天に移されました。これは理想的であります。人の死ぬる事は神の聖旨ではありません。罪のために死ぬる死は不自然であります。死なずして天に移される事は自然であり、神の恩恵、聖旨であります。エノクは如何にして其の御恵に與つたかといひますと『信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり神これを移し給ひたれば見出されざりきその移さるゝ前に神に喜ばるゝことを證せられたり』(來十一〇五)とあるごとく、彼は信仰に由りて移され、信仰によりて神と偕に歩み、信仰に由りて神に喜ばれました。『信仰なくしては神に喜ばるゝ事能はず』と希伯來書に記されてあります。エノクは即ち私共に示された典型であります、キリストの再臨の時生存する信者達は、みな彼の如く移されるのであります。而してエノクはまた時の預言者であつたこと

を記憶すべきであります。

「視よ我汝等に奥義を告げん我等は悉く眠るに非ず終のラツパの鳴らん時皆忽ち瞬間に化せん」(哥前十五〇五一)

「アダムより七代に當るエノク彼等につきて預言せり曰く「視よ主は其の聖なる千萬の衆を率ゐて來り給へりこれ凡ての人の審判をなしすべて敬虔ならぬ者の不敬虔を行ひたる不敬虔の凡ての業と敬虔ならぬ罪人の主に逆ひて語りたる凡ての甚だしき言とを責め給はんとてなり」(猶十四、十五)

## 第七章

ノア五百歳なりきノア、セム、ハム、ヤベテを生り 人地の面に繁衍はじまりて女の子之に生るゝに及べる時 神の子等人の女子の美しきを見て其好む所の者を取て妻となせり エホバ人の惡の地に大なると其心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡きのみなるを見たまへり 是

に於てエホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へたまへり エホバ言たまひけるは我が創造りし人を我地の面より拭去らん人より獸昆蟲天空の鳥にいたるまでほろぼさん されどノアはエホバの目のまへに恩を得たり ノアは義人にして其世の完全き者なりきノア神と偕に歩めり 時に世神のまへに亂れて暴虐世に満ちたりき 神ノアにいひたまひけるは汝松木をもて汝のために方舟を造るべし ノア都て神の己に命じたまひしごとく然爲せり

(創世記第五章卅二節—第六章卅二節の略)

## 一、洪水の來りし所以

開闢より一千六百五十六年を経て、人の世は人口増殖し、幾百萬人に及びました。最初セツの子孫はカインの子孫とは全く二派に別れて互に交際もせず、セツの子孫は一神教の主義に立つて靈的生活をなし、カインの子孫は自己中心の物質的渡世を續けて居りました。然し時を経て隨つて、此の二者の差別が曖昧になりました。清水と濁水とが混同しはじめました。神の子孫とはセツの子孫であり、人の娘とは即ちカインの子孫を意味して居ります。セツの子孫が

カインの子孫の美しきを見、その欲するがまゝにこれを娶つて妻としました。信仰ある人が信仰のない人を迎へて結婚したのであります、慾望のために主義を棄て、女の美しきを見て彼等は妥協したのであります。かくて清水が濁つて汚水と化しました。主義のない宗教は一見盛んな様に見えても、主義ある基督教の立場からこれを見れば、かゝる宗教はたとひ立派な形式はあつても生命のない宗教であります。此の清水と濁水との混同、妥協の爲めに、世は神の前に亂れて暴虐の流が地上に氾濫しました。これが即ち神の審判を招いた所以であります。世の信仰ある男子よ、信仰ある妻を迎へよ、信仰ある女子よ、深く心すべきであります。

## 二、神の憂ひ

世に住む人々の間に悪しき思想が蔓延し來り、たゞ罪惡のみ世に行はれてゆく有様を見そなはし、神はいたく心に憂ひ、人を創造された事を悔い給ふやうになりました。神は神の像に似せて人を造られましたのに、今人は淫慾と妥協とに亂れて暴虐世にみち、神の像は悲しくも傷けられてしまつたのであります。斯かる状態に陥つた人間には何等の價値もなく、人として生

くる甲斐も更になき有様であります。親は息子の墮落を見ていかに歎き悲しむであります。親の名譽を傷けられた事も苦痛でありませうが、それよりも尙ほ以上に、最愛の息子自身が信なく價值なき有様に陥つてゐるのを見るのが一層つらいのであります。種子が腐敗すれば播いても良いものは生へませんから、農夫は種子を取替へます。然し親の悲痛はかゝる事實に比すべくもありません、掛替のない吾が子が罪に陥つた悲しみは如何に深刻なものでありませうか。純潔を失つた愛子等のために、神はたゞ獨り憂ひに沈み給ふのであります。

### 三、ノア即ち慰め

第六章八節、九節にある如く、ノアは神と偕に歩める正しき人でありました。神は世に住む幾百萬人を一人々々にかへりみ給ひ、果して其の中に主義を棄てず、信仰の妥協を許さず、此の世の暴虐に與せぬものはなきかと探し求められた時に、こゝに一人の人がありました。一定の羊を見出したる羊飼の喜び、一枚の銀貨を探り求め得し女の歡喜、それらにも勝る神の喜悅は一人の義しき者を見出された事でありました。神と偕に歩む人は此の世の汚れに染むことが



ありません。神はノアに恵みを與へ給ひ、此の人を以て新しき世界を造り、この種子によつて最も精選された、新しき畑を地上に開拓せんとせられたのであります。

#### 四、世の改革

「彼等のために暴虐世にみつれば視よ我彼等を世とともに剪滅さん我が創造りし人を我地の面より拭去らん」と神は仰せられました。料理人は汚い皿を拭ひ清めます、さもなくば微菌が新鮮なる食物に附着するであります。「我これを剪滅さん」との御言葉は非常なる裁斷を示して居ります、決してこれは容易く出來得る事ではありません。神が御自身に創造られたものを亡ぼし給ふといふことは、どれ程の悲痛であつたかわかりません。大工でさへも自分の建てた家の焼けるのを見て泣き悲しみます。然し必要がこゝに差迫つて來たのであります、大手術に相違ありませんが外に救ひの道はない場合であります。「視よ我洪水を地に起して凡て生命の息氣ある肉なる者を天下より剪滅し絶たん」(六〇十七)とはエホバ神の御聲でありました。



## 五、救ひの道

「信仰に由りてノアは未だ見ざる事につきて御告を蒙り畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造りと」希伯來書第十一章に記してあります。洪水の來るべきを神が告げ給ふた時に、ノアはそれを信じ、慎んで用意をいたしました。而してノアは百二十年の間、人々に向つて洪水の來るべきことを預言して呼びました。亂れに亂れて居た人心には何等の反響もなく、彼等は平氣で邪道を歩みつけて居りました。愈々ノアが箱船に入る日まで人々は飲み食ひ娶り嫁ぎなどして居りましたが、遂に洪水は襲來して彼等は悉く滅ぼされてしまひました。ノアはその家族を救はんが爲めに箱船を設けましたが、其の船大工さへも洪水の事などは信じませんので船に乗りませんでした。たゞノアの家族八人だけが助かつたのであります。箱船は長さ四百五十尺、幅九十尺、三階で高さ四十五尺あり、今日の航海船程の大きい船でありました。ノアは即ち其の家族を救ふ爲めに、神の命に従つてこの船を造つたのであります。

讀者諸兄姉よ、基督信徒たる諸氏は各自家族を救ふために如何に力を盡して居られますか。

此の箱船は恰もキリスト御自身を意味して居ります、即ち今日イエス、キリストは我等の救ひの船であります。すべてキリストにあるものゝ救はれむことは神の御約束であります。ノアの時の洪水の如く、人の子もまた我等に來り給ふであります。主の日は盜人の夜來る如く思はざる時に到來し、その日には天轟きて諸々の天體は震ひ動き、地と其の中にあるものとは悉く焼き盡されるであります。我々はみな潔き行と敬虔なる心とを以て、來るべき主の日のために絶えず、怠らず、用意しつゝ、待望むべきではありませんか。

## 第八章

神ノアと其子等を祝して之に曰たまひけるは生よ増殖よ地に滿よ 凡そ生る動物は汝等の食となるべし菜蔬のごとく我之を皆汝等に與ふ 汝等の生命の血を流すをば我必ず討さん 凡そ人の血を流す者は人其血を流さん其は神の像のごとくに人を造りたまひたればなり 見よ我汝等と汝等の後の子孫 および汝等と偕なる地の諸の獸と契約を立ん 我わが虹を雲の中

に起さん是我と世との間の契約の徴なるべし 水再び諸の肉なる者を滅す洪水とならじ

ノアの子等の方舟より出たるものはセム、ハム、ヤベテなりきハムはカナン之父なり 是等はノアの三人の子なり全地の民は是等より出で、蔓延れり(創世記第九章一節—十九節の略)

## 一、新世界

洪水の終へたる時八人の人々が箱船を出ました。ノアは神の爲めに壇を築き燔祭をその上に献げました。コロンブスもアメリカを發見した時には、土に口をつけて神に感謝したといひます。神は彼等に生めよ殖えよ地に満てよとて祝福を與へられました。爾來ノアの三人の子、即ちセム、ハム、ヤベテより全地の民は出で、擴がつたのであります。創世記の第十章に彼等の系圖が詳しく記されてあります。

多くの今日の人類學者は、世界の住民はこれを大別して三種に分つ事が出来ると云つて居ります。即ち言語と風習と色とによつて觀察する時に、人類に三家族ある事が證明せられます。セムの血を享けた者は大方東へ行つてアジアの國々に住みました。セムは長男であつて家權を

も所有し、且つ宗教心に富んで居りました。イスラエル人はその子孫であり、主イエスもまたセムの裔より生れ給うたのであります。

「セムの神エホバは讃べきかな」(九〇廿六)

とセムの父なるノアは言ひました。

ハムの子孫は大方アフリカに住んで居ります。ハムは葡萄酒に酔うた父の裸體を見たといふ第九章廿二節の言葉によつて、彼の不眞面目な心の淫猥な状態が知られます。ハムは不良青年でありました。

「ノアは酒さめて其若き子の已に爲たる事を知れり」(九〇廿四)  
と。茲に於てノアは

「カナン諛はれよ彼は僕輩の僕となりて其兄弟に事へん」(九〇廿五)

と言ひました、カナンはハムの子であります。今日までアフリカに偉大な國民は起りません、淫猥な民族は榮える事が出来ないのであります。然し今日アフリカに囁すべき希望はたゞ一つ、即ち主イエスの十字架の血によつて潔められ、救はれる事でありませぬ。

ヤベテには七人の息子がありました。ヨーロッパ及び西洋諸國にある國民は、大方ヤベテの血を享けた者であります。

『神ヤベテを大ならしめたまはん彼はセムの天幕に居住はん』(九〇廿七)

とあります。セムの天幕とはキリスト教を意味して居ると思ひます。兎に角西洋の民族は、セムの血を享け給ふた主イエスの十字架によつて大なる國民となり、今日に於ても安らかに主イエスの天幕に住まつてゐるのであります。全世界の民はかくの如く三家族に分れて居りますが、皆一つの血族より出でたるもの、四海皆同胞なのであります。

## 二、新 食 物

世の創始より洪水に至るまで人間は菜食をして居りましたが、洪水後は肉食をも許されました。これは神の許し給ふところであまりますから、私共も憂ふる事なく肉食をとつて差支へないのであります。神はノアに『凡そ生る動物は汝等の食となるべし菜蔬のごとく我これを皆汝等に與ふ』と告げ給ひました。今日人々は食物の事に餘程心を用ひて居ります。それは善い事

ありますが、今一つ注意すべきことは食事を戴く時の感謝の精神であります。『食は神の造り給へるものにして信じかつ眞理を知る者の感謝して受くべきものなり神の造り給へる物はみな善し感謝して受くる時ほ棄つべき物なし』と提摩太前書第四章三節、四節にあります。キリスト信徒の食前に感謝するのは當然の事であります。

### 三、新 規 則

『凡そ人の血を流す者は人其血を流さん』と。洪水の後神は人々に死刑の發布を爲し給ひ、政府に死刑執行の權が與へられることゝなりました。『其は神の像のごとくに人を造りたまひたればなり』とあります。人は神の像にして凡て造られたるものゝ長でありますから、人の生命を尊重する事は神の聖旨であります、それ故神に叛き、神の像なる人を尊重せず、その生命を害ふものは最早生くる權利はありません、この故に神は死刑なる刑法を定められたのであります。近年或る國では死刑を廢しました。然しこれは其の國の進歩を意味せず、却てその文明が退歩したものであると考へられます。人の生命を輕んずる思想は、神を信する信念の薄らいだ

事を證明するものであります。故に單に感情的の立場から殺人犯罪者の命を赦し、その罪の審判を軽くする事によつて殺人罪を減ずるといふことは不可能であるのみならず、却て社會を亂すことがあると思はれます。神は聰明にして、その審判も正しく完全である筈であります。

#### 四、新 契 約

洪水の後に神は人に新しい契約を立て給ひました。即ちこの後再びすべての人を水を以て亡ぼし給はぬといふ意味でありまして、

『地のあらん限りは播種時、收穫時寒暑夏冬および日と夜息ことあらじ』(八〇廿二)  
と仰せられました。以來四千年を越えて、神はその御約束を違へ給ふ事はありません。今此の世界に生存する多くの人々は神の御恵の下に安らかに暮して居りますが、これを衷心より感謝するものは少ないことであります。神の聖旨を敬はぬ者の多くあるにも關はず、すべてはキリストの十字架の聖恩によつて、赦されたるものとして取扱はれて居ります。神はその御約束を守り給ふ。洪水の終へたる時、此の契約の徴として、神は雲の中に虹を現はし給ふたのであ



ります。

## 第九 章

全地は一の言語一の音のみなりき 茲に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住り 彼等互に言けるは去來甄石を作り之を善く焼んと遂に石の代りに甄石を獲灰沙の代りに石漆を獲たり 又曰けるは去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん斯して我等名を揚て全地の表面に散ることを免れんと エホバ降臨りて彼人衆の建る邑と塔とを觀たまへり エホバ言たまひけるは視よ民は一にして皆一の言語を用ふ今既に之を爲し始めたり然ば凡て其爲んと圖維る事は禁め得られざるべし 去來我等降り彼處にて彼等の言語を消し互に言語を通ずることを得ざらしめんと エホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散したまひければ彼等邑を建つることを罷たり 此故に其名はバベル（清亂）と呼べる是はエホバ彼處に全地の言語を消したまひしに由てなり彼處よりエホバ彼等を全地の表に散したまへり（創世記



## 第十一章一節—九節

### 一、全地の一の言葉

前章にも述べたる如く、全世界の國民は皆一つの家族より出たものであります、而して言語も始めは一つであり、發音も一つでありました。世の元始よりノアの時に至る一千六百五十六年間、及び洪水の終りに至るまでの百年間は、人々はたゞ一の共通な言葉を用ひて居りました。人類は凡て一つであり、その信ずる處の神も一つであつたのであります。然るに現今全世界に用ひらるゝ言語の數は一千以上もありまして、聖書或は四福音書は七百以上の言葉に譯されて居ります。然し言語學者が常に見出すところは、其等多種の言語の奥に流れて居る思想、その考へ方なり言ひ方なりは、すべて同一であるといふ事でありませぬ。この萬民共通なる思想、共通なる發表の方法によつても人類は一つであることが解ります。此の世に異人といふものはありません、皆同じ神の創造により、同一家族として生れたものであります。言葉に差別の生じて來たのは左程に古い事ではありませぬ、僅か四千二百年前のことであります。今私共は其

の言葉に差別の生じたる所以、歴史を研究いたしませう。

## 二、洪水後の帝國建造

『去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん斯して我等名を揚て全地の表面に散ること免れん』と人々は言ひました。此の帝國は何處に建てられたかといひますと、「シナルの地」即ちメソポタミヤでありました。これが即ち昔のバビロン帝國であり、その建設者はハムの孫のニムロデでありました。此の人については、

『ニムロデ始めて世の權力あるものとなれり 彼はエホバの前にありて權力ある獵夫なりき是故にエホバの前にある夫權力ある獵夫ニムロデの如しといふ諺あり』(十〇八、九)

と記されてあります。

ハムの孫ニムロデはこゝに始めて帝國を建設し、先づメソポタミヤにバベルと四つの大なる町をたて、その後アツスリヤに出で、ニネベと四つの有名な町を建てました。ニムロデはかくの如く諺にうたはれる程有名なる獵人でありました。而して只猛獸を狩つたばかりでなく、彼

は隣族をも侵した軍人であつた事と思はれます。彼と戦争とは常に附物でありました。こゝにニムロデは初めて空搔の塔を建てたのであります、今でもバビロンの古跡の北方にある高い山の上に、『ニムロデの塔』と呼ばれる塔があります。

何故ニムロデ等は此の町と塔とを建てたかと言ひますと、それは彼等が名を擧げて全地の表面に散ることを免れんが爲めでありました。このニムロデの精神は、後のバビロン王ネブカデネザルや、ギリシヤ帝國を建設せるアレキサンダー王、ローマ帝國の建設者たるジュリアス、シーザー、またフランスのナポレオン等の精神と等しく、名譽心と傲慢より來たところの精神であり、神は彼等に『生よ増殖よ地に満よ』と命じ給ひしにもかゝはらず、彼等は名を擧げんがために全地に散る事を免れやうとしてゐました。此の謀叛の精神を防がんが爲めに、神はその言葉を亂し、全地の面に彼等を散らし給うたのであります。

### 三、國語及び國民

シナルの平野は即ち萬國民の出生地であります。日本人のみならず他にも亦、昔その祖先が

高原の平地より出たといふ傳説を有つて居る國民があります。此の時人々がその始めの居住地より別れ出た理由は、彼等の言語が通じなくなつた爲めであります。嗣はその聖旨を成就せられ、全地の表面に人類を散らし給はんがために人々の言葉に差別を生ぜしめ、その相互間の交渉を困難ならしめ給うたのであります。今日人類は全世界に散住して居ります。而して一面國語の相違は國々の區域を限定して居るやうなものであります。即ち一の國民が他の國民を配下に從へても、言葉の異なるところは永く制服する事が困難であります。又國語の差違によつて、すべて國々の風俗、文學、歴史等の上にも少からず影響を與へられて來て居ります。

前述の如く今日に於ては世界は一千以上の言語に分れて居りますが、果してこれは嘉すべき事實でありませうか。決してそれは理想的ではありません、國語の相違のために我々國民等は如何程相互に妨げられて居るところがあるか知れません。何時の世にかはまた再び一つの言葉にかへる時が來るでありませう。而してその時我々は、全地を統制して完全なる聖旨を成遂げ給ふべき一人の王を待望むべきであります。主イエス、キリストの聖國の來らんとし全地は再び一の言語に歸るであります。聖書はこれを預言して居ります。

『我神エホバ來りたまはん エホバ全地の王となりたまはん其日には只エホバのみ只その御名のみにならん』(亞十四〇五九)

## 第十 章

爰にエホバ、アブラムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家に離れて我が汝に示さん其地に至れ 我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は祝福の基となるべし 我は汝を祝する者を祝し汝を詛ふ者を詛はん天下の諸の宗族汝によりて祝福を獲と アブラム乃ちエホバの自己に言たまひし言に従て出たりロト彼と共に行りアブラム、ハランを出たる時七十五歳なりき アブラム其妻サライと其弟の子ロトおよび其集めたる總の所有とハラんにて獲たる人衆を携へてカナンの地に住んとて出で遂にカナンの地に至れり アブラム其地を經過てシケムの處に及びモレの橡樹に至れり其時にカナン人其地に住り 茲にエホバ、アブラムに顯現れて我汝の苗裔に此地を與へんといひたまへり彼處

にて彼已に顯現れたまひしエホバに壇を築けり（創世記第十二章一節―七節）

## 一、アブラム召を受く

私共は神が五回世界史下に其の聖手の力をあらはし給ひし場合を記憶致します。第一は開闢の時神の像に象りて人を造り給ひし事、第二は一千六百五十六年後、大洪水に際しノアと其の家族を援け出し、今日生存する十六億人の祖先となし給ひし事、第三はアブラムを召して、一神教の國民なるユダヤ人の祖先となしたまひし事、第四はモーセに、今日文明國の憲法の基礎となつて居る律法を授け給ひしこと、第五は其の聖子イエス、キリストを萬民の救ひのために與へたまひし事であります。今私共はそれらの偉大なる聖業の中の一つについて研究したいと思ひます。

## 二、アブラムとの契約

神はアブラムと契約を立て給ひました。これはアブラム自身の意志より出た事ではなく、全

然神の御計畫の成就を意味するものでありまして、その契約には三つの内容を示されてあります。

第一、國。「我汝に示さん其地に至れ 我汝の苗裔に此地を與へん」と、神は御約束を示し給いました。其の地とはカナン國、即ち地中海の東、小亞細亞の沿岸に臨める國であります。

第二、大國民。「我汝を大なる國民と成す」と言はれたのは即ちユダヤ國民の意味であります。河流より水を誘導してこれを濫過し、清淨なる水道給水をなして多くの市民の渴をうるほす如く、神は人類の中よりアブラムを選び、彼を恵み、彼を潔め、彼を榮えしめ、而して彼によつて萬國民を恵み祝し給うたのであります。

第三、革國民の救ひ。「汝は祝福の基となるべし 天下の諸の宗族汝によりて祝福を獲ん」と、これはキリストの救ひを意味して居ります。神の御獨子にして萬民の救主なる主イエス、キリストは、アブラムの血をうけたるユダヤ人として生れ給うたのでありまして、神は此の偉大なる御約束を、この時既にアブラムに與へられたのであります。



## 三、アブラムとは誰か

ノアにはセム、ハム、ヤベテの三人の息子がいました、而してこのアブラムはセムの十代目の孫に當る人でありまして、その住所はカルデアの首府ウルでありました。カルデアは昔のバビロン帝國の南東に位する國であつて、其の國民は天文學、化學、及び哲學に達して居りました。其の時代の人々の宗教としては火、及び天體を禮拜して居りました。アブラムは遊牧を職として居りましたが、牧畜業者が世界的人物とならうとは思ひがけない事でありました。然し彼が偉大な人物となつた所以は其の職業に關せず、又軍事思想、政治慾、文學の力によるのでありません。彼の卓越せるところは彼の信仰にありました。アブラムは一神教者で、他の人々が日や月や星等を拜してゐたにも關はらず、天地萬物を造られ、これに生命を與へて守り給ふ獨りの活ける父なる神を信じて居りました。この信仰によつて神は彼に啓示を與へ、彼を世界的人物となし給ふたのであります。

この一神教の教理はキリスト教の基礎であります。神はその御獨子なる主イエス、キリスト



を與へ給ふ程に人類を愛せられ、而してその主イエスを遣はし給ふ以前に、アブラムの血によつて一の一神教の國民、即ちユダヤ人を造り給ひました。

アブラムの偉大な點はその信仰にありました。金儲けの爲め、家族の都合のため、名譽の爲め、戦争のために國を捨て、外國へ行く人々は多數ありますが、アブラムは唯神の爲め、たゞ信仰のために故國を後に立ち出でました。これが彼の偉大なりし所以であります。

愛する讀者よ、諸氏は神の爲め、唯神のために何事をか果たした事がありますか。唯神の爲め、神の御命令であるがために洗禮を受けた事がありますか、又現在神のため、日毎に一つの親切な行爲でもを捧げつゝありますか。我々は皆深く反省すべきであります。

「信仰に由りてアブラムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵ひその往く所を知らずして出で往けり」(來十一〇八)

# 第十一章

参照||創世記第十二章七節一十三章四節

## 一、壇を築く人

茲にエホバ、アブラムに顯現れて我汝の苗裔に此地を興へんといひたまへり彼處にて彼己に顯現れたまひしエホバに壇を築けり 彼其處よりベテルの東の山に移りて其天幕を張り西にベテル東にアイありき彼處にて彼エホバに壇を築きエホバの名を呼り(十二〇七、八)

ユダヤ人の祖先なるアブラムはエホバに壇を築く人でありました。彼は神の命に従ひ約束の地に向つて旅をつゞけましたが、愈々其の國に入り中央なる或る山に到着した時に、其處に天幕を張り、その時彼に懸はれ給ひしエホバに壇を築きました。そこで其の山はベテル即ち『神の家』と呼ばれました。アブラムは到る處にエホバに壇を築きエホバの聖名を呼びました。ア

アメリカの清教徒は新しい世界へ移住せるに際し、自分の住居を造る前に先づ天の父を禮拜する  
ための教會堂を建てました。古角權平氏は勢見山上に祈堂を建て、徳島縣の上に神の恩恵を  
祈願しました。また江原素六翁は毎朝四時に起き出で、聖書を読み、神に祈つて靈的修養をな  
し、然る後その日の業務につきました。

アブラムが壇を築いたのはたゞ自分の爲めではなくして、其の家族の爲め、即ち來らんとす  
る國民の爲めでありました。神はアブラムにより、來るべきユダヤ人を恵み祝して、『其は我彼  
をして其後の子孫と家族とに命じエホバの道を守りて公義と公道を行しめん爲に彼をしれり』  
(創十八〇十九)と言はれました。家庭に於て壇を築き毎朝家庭祈禱會を行ふ信者は幸でありま  
す、何故ならば彼等の家はベテル、即ち『神の家』と呼ばれるであります。

## 二、壇を離れたる人

『アブラム尙進て南に遷れり 茲に饑饉其地にありければアブラム、エジプトに寄寓らんとて  
彼處に下れり其は饑饉其地に甚しかりければなり 彼近く來りてエジプトに入んとする時其

妻サライに言けるは視よ我汝を觀て美麗き婦人なるを知る 是故にエジプト人汝を見る時は  
 は彼の妻なりと言て我を殺さん然ど汝をば生存ん 請ふ汝わが妹なりと言へ然ば我汝の故に  
 よりて安にしてわが命汝のために生存ん」(十二〇九—十三)

其の後約束の國に饑饉が起りました。これは思ひがけない事でありました。嗣業として受く  
 べき地には常に緑の野、憩ひの水濱が興へらるべきものと思つて居ました處、雨降らずして牧  
 場は枯れ、獸は飢ゑ、羊は瘡せ、僕等はつぶやき、アブラムは途方に暮れました。信仰をもつ  
 者はたゞ安樂に暮して、苦痛なく呑氣な生活が出来ると考へる人は、此の如き不時の災害に躓  
 きます。神はすべての困難、災害より我等を救ひ出さんと約束せられませぬ。アブラムに饑  
 饉、ヨセフに牢獄、モーセに荒野、ダビデにサウル王の迫害、エレミヤに卍戸穴、パプテスマ  
 のヨハネにヘロデの刃、パウロに刺、主イエスには十字架があつたではありませんか。神は此  
 等の苦難をすべて除かんとは仰せられませぬが、わが恩恵なんぢに足れりわが能力は弱きうち  
 に全うせらるればなり(哥後十二〇九)と言ひ給ふであります。こゝに起りし饑饉はすなは  
 ちアブラムにとつての試練でありました。

饑饉の年が來た時に、アブラムは其の築いた壇の事を忘れたのでありませう。もし彼が祈つた時に天の使が現はれて、「エジプトに逃れてわが告ぐる時まで彼處に留まれ」と言はれたとするならば、彼がエジプトへ行つた事は善かつたのでありますが、彼は飢饉のために壇の事を忘れてしまつたのではありますまいか。兎に角エジプト近くまで來た時に彼は狼狽し、その信仰に動搖を來した様に思はれます。それより以前に、エジプトのパロ王が外國人の妻を奪つてその夫を殺したといふ様な言傳へを聞いて居つたのかも知れませんが、然しアブラムは何故「我汝を大なる國民と成す」との神の御約束を忘れ、不要な懸念の爲めに偽りを言ひ、又妻のサライを偽らせたりしたのでありませうか。

アブラムは此の時たしかに壇を離れて居りました。彼は虚言を言ひました。主イエスは一言の偽りを言はんよりは寧ろ十字架の苦しみをを選び給うたのであります。主イエスは正しく立たれましたが、アブラムはこの時命が惜しいために誘惑に敗けて、その妻に「汝わが妹なりと言へ」と勧めました。轉徹手が赤旗を擧げる筈の處を青旗をあげた爲めに、列車の衝突を來す事がありますが、アブラムはこれは我が妻であると云ふべきところを妹であるとして云つた爲め

に、パロの大臣等はその女の美しさを譽めて王に告げ、御殿に召入れましたので、多くの國民の父たるべきアブラムは妻を失ひました。僞信號は恐ろしきもの、僞りは罪なきものを禍に陥れます。

『時にエホバ、アブラムの妻サライの故によりて大なる禍を以てパロと其家を惱したまへり』(十二(〇十七)とある如く、僞りは己の家庭を亂し、且つは罪なき王の一家に禍を及ぼしたのであります。

### 三、壇に立ち歸る途

然しアブラムは壇に立ちかへりました。これは全く神の救ひ、神の恵みであつたのであります。

(一) アブラムを救はんが爲めに、神はサライの故によりパロと其の家を惱ましたまひました。たとひ知らずに爲た事であつても、他人の妻を取る事は恐ろしき罪であります。神はパロをしてその禍よりのがれしめ給ひました。アブラムは再びその妻を與へられるべき資格はな

つたのであります。が、神の恵みにより、サライはその御殿の中より救ひ出されて、アブラムの許にかへる事を許されました。

(二) パロ王は偽つたアブラムを叱りつけました。

『パロ、アブラムを召て言ひけるは、汝が我になしたる此事は何ぞや、汝何故に彼が汝の妻なるを我に告ざりしや、汝何故に彼はわが妹なりといひしや、我幾彼をわが妻にめとらんとせり、然ば汝の妻は此にあり、挈去るべし』(十二〇十八、十九)

當時のエジプト人には種々缺點もありましたが、嘘や偽りを憎む事は彼等の徳でありました。

パロの鋭い言葉はアブラムの良心を喚醒しました。

(三) パロはアブラムを其の國より送り歸しました。

『パロ即ち彼の事を人々に命じければ、彼と其妻および其有る諸の物を送りさらしめたり』(十二一〇廿)

パロの厳しさも、其の親切も、すべてアブラムにとつては苦しい傷手でありました。彼は不名譽を荷ひ、恥辱を負うてエジプトの地を去りました。



『悖逆者の途は艱難なり』(箴十三〇十五)

(四) アブラムは壇に立ちかへりました、途は遠くありましたが遂にベテルの山に着きました。彼はエジプトを出で、より先づ南の地に上つたのであります。

『アブラム甚家畜と金銀に富り』(十三〇二)

と書いてありますが、それらのものは今彼にとつて何等の慰めでもありませんでした、彼はひたすら壇を望んだのであります。それで南の地より更に旅路をつゞけて、彼が最初に壇を築いたベテルに到り、其處にて彼はエホバの聖名を呼びました。

かくて放蕩息子が父の懐に立ち歸つたのであります。信者なる讀者達よ、皆壇を築かれよ、壇を忘れぬやう注意しなければなりません。若し今壇を忘れてゐるならば、その壇に立ちかへるまでの旅路は艱難であります。若しかゝる場合にあるならば、我々は一時も早く再び壇のあるところに立ち歸り、エホバの聖名を呼ぶべきではありませんか。



## 第十一 章

アブラムと偕ともに行いしロトも羊牛ひつじうしおよび天幕てんまくを有もり 其地そのちは彼等かれらを載のせて俱ともに居をしむること能あたはざりき彼等かれらは其所有そのちものおほ多おほかりしに緣より俱ともに居をることを得えざりしなり 斯有かばアブラムの家畜かちうの牧者まきしやとロトの家畜かちうの牧者まきしやの間に競争あつぎありきカナン人びととベリジ人びと此時このとき其地そのちに居住すり アブラム、ロトに言いけるは我等われらは兄弟あなちの人ひとなれば請こふ我われと汝なんぢの間あひだおよびわが牧者まきしやと汝なんぢの牧者まきしやの間に競争あつぎあらしむる勿なれ 地ちは皆爾みなの前まへにあるにあらずや請こふ我われを離はなれよ爾若なんぢもし左ひだりにゆかば我右われみぎに行ゆかん又爾右またなんぢみぎに行ゆば我左われひだりに行ゆかん 是こゝに於おいてロト目めを舉あげてヨルダンの凡すべての低地くさちを瞻望のぞみけるにエホバソドムと、ゴモラとを滅ほろし給たまはざりし前まへなりければゾアルに至いたるまであまねく善よく潤澤うるはひてエホバの園そのの如ごとくエジプトの地ちの如ごとくなりき ロト乃すなはちヨルダンの低地くさちを盡ことごとく選えらとりて東あづまに徙うつれり斯彼等かくかれら彼此たがひに別わかれたり アブラムはカナンの地ちに住すり又ロトは低地くさちの諸まろ邑まちに住すみ其天幕そのてんまくを遷うつしてソドムに至いたれり ソドムの人ひとは悪あしくしてエホバの前まへに大おほなる罪人つみびとな

りきロトのアブラムに別れし後エホバ、アブラムに言たまひけるは爾の目を舉て爾の居る處より西東北南を瞻望め 凡そ汝が觀る所の地は我之を永く爾と爾の裔に與ふべし 我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん若人地の塵沙を數ふることを得ば爾の後裔も數へらるべし 爾起て縦横に其地を行き巡るべし我之を爾に與へんと アブラム遂に天幕を遷して來り ヘプロンのマムレの橡林に住み彼處にてエホバに壇を築けり(創世記第十三章五節十八節)

## 己か神か

ロトはアブラムの甥でありました、それはロトにとつて名譽でもあり、又重荷でもありません。偉大な人の親族たる事は人々の光榮であります。ロトは格別勝れたところはありませんでしたが、唯偉大なアブラムの親族であり常に彼と共に住んで居りました。アブラムがカルデアを出る時もロトは伴はれてゆき、その後ハランに滞在せる間も、約束の地に移つた時もエジプトへの旅の折にも、またエジプトを出で、歸る時にも、彼は絶えず叔父と連立つて居りました。即ちロトは叔父の傍に居る間は光榮ある生活をして居たのであります。世の中には屢々かくの

如き人があります。一人立ちは出来難いのですが、恵まれた、力ある人と共に居り、その感化を受け、その恵みに與るのであります。それも善い事ではありますが、此の如き人は獨立した時に失敗致します。ロトは決して叔父の傍を離るべき人ではなかつたのであります。

## 一、親族間の争鬭

この時こゝに争鬭が始まりました。其の理由は彼等の所有が餘り多くなつた爲めでありました。財産が増して親族間の親しみが薄くなり、家畜が殖えて國が狭くなつたのであります。而してアブラムの牧者とロトの牧者との間に競争が起りました。この場合兩人共資産を減らした方が賢かつたのでありませうが、それは容易に出来ない事でありました。財産の増殖を中止することは如何にも出来難い事であります。駱駝が針の孔を通る方がまだ容易いかも知れません。此の時兩人の爲めには合資して二つの群を一つにした方がよかつたでありませう、かくてそれら牧者間の争ひは止まつたかも知れません。別れるよりもロトは凡てを叔父の手に譲つた方が、却て得策であつたに相違ありません。叔父の恩顧によつて富豪になつたのでありますか

ら、ロトは決して叔父の許を去るべきではなかつたのであります。

## 二、平和の談判

アブラムは此の時寛容なる態度を以て、仲直りをしやうと試みました。「我等は兄弟の人は請ふ我と汝の間およびわが牧者と汝の牧者の間に競争あらしむる勿れ」といつた言葉によつて見ますと、アブラムの精神には親戚としての人情がなほ厚いやうであります。所有物よりは人の方が大切であります。自分等は兄弟にも等しい間柄であるから喧嘩をしてはならない、争ふよりも別れる方が増しであると考へたのであります。そこで彼は「地は皆爾の前にあるにあらずや請ふ我を離れよ爾若左にゆかば我右に行ん又爾右に行ば我左に行ん」と言ひました、何とこれは寛大な申出ではありませんか。茲に於てロトの方から「叔父上よ私は貴方のお蔭で成功したのです、私は決して御傍を離れません。それよりも財産を合併させるか、或はすべてを叔父上に差上げてでも宜しうございます」といふ返事が聞き度かつたのですが、それは聞かれませんでした。ロトは未だ若かつたばかりでなく卑屈な人でありましたので、叔父の厚意

を忘れ、自分勝手な利益をばかり考へました。是に於てロト目を舉てヨルダンの凡ての低地を  
瞻望みけるにエホバの園の如くエジプトの地の如くなりき。ロト乃ちヨルダンの低地を盡く  
選とりて東に徙れり」とあります。これは非常に面白からぬ結果であり、アブラムにとつても  
意外であつたに相違ありませんが、彼は承諾致しました。若し國を北方と南方とに分けたなら  
ば、二人の爲めに山分の牧場も低地の平野も河水もあつたのでありますが、こゝにロトはヨル  
ダンの低地を悉く選び取つてしまひました。併しながら、ロトの如き慾深き人は皆近眼であり  
ます。イスカリオテのユダにしてもイエスを賣れば三千圓でも得られたであらうに、その  
三十圓は近眼の慾でありました。此の如き貪慾の人々は先を見る眼がありません。

ロトはよく潤うた地を見る眼はありましたが、叔父の親切を見る眼がありませんでした。低  
地の中にある町々は、羊や牛の市場に適する事を悟る知識はありながら、ソドムの人の惡しく  
してエホバの前に大なる罪人たることを見抜くだけの力がありませんでした。ソドムに移れば  
自分の名譽が高まると考へる頭はありますが然し自分の娘がソドムの人の妻になつて、彼等の  
如く墮落してつまらぬ人間となる憂ひなどには、少しも考へ及びませんでした。アブラムと別

れる事は神の恵みより離れる事であるとは知りません、先見の明がありません、信仰が薄いのであります。ソドムの人々は既に恐ろしい罪を犯して居り、其の罪は四千年後の今日までもソドムの地名を以て呼ばれる程大きいものであるとは知らず、彼等の上に將に來らんとする神の審きに氣が付きませんでした。強慾なロトは即ち神の亡ぼし給はんとする地を自ら選んだのであります。慾は結局損失を招きました。其の後彼は戦ひに敗れて捕虜となりましたが、アブラムによつて援け出されました。また暫時の後ソドムは焼き盡され、彼の妻は鹽の柱になりました。娘等の婿は亡ぼされましたが、ロトと二人の娘は漸く救ひ出されました。貪慾は零落、不幸の基であります。

### 三、信仰の特質

アブラムの爲めには只山分の地ばかりが残りました。其の牧者等は不平を洩らしたことでありませう。然しアブラムは神を所有して居りました。ロトに別れた後神がアブラムに言ひ給ふには、「爾の目を擧て爾の居る處より西東北南を眺望め凡そ汝が觀る所の地は我之を永く爾と

爾の裔に與ふべし 我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん」と。神を中心として人を寛谷に取扱ふ時に、損失を招く筈はありません。神は生きて働き給ふのであります。神は神に事ふる人を富ましめ給ひます。それ故に私共はロトの例に倣はず、アブラムを模範とする事に務めませう。

## 第十三章

参照 創世記第十四章

### 一、軍人としてのアブラム

私共の記憶には軍人としてのアブラムは少しも浮んで来ません。即ち彼は偉大な軍人としてはあまり世に知られてゐないのであります。然し彼が其の時代の最も大なる帝國、即ちニムロデの建てたる昔のバビロン帝國、の陸軍と戦つてこれに打勝つた事は争はれない事實であります。



す。

彼は如何なる理由の下に戦に出陣したのでありませうか。これより先、メソポタミヤの方より四人の王の聯合軍が攻めて來まして、ヨルダンの谷なる町々を撃ち平らげ、五人の王を平伏せしめて十二年の間其處を統治しました。而して十三年目に被征服者が其の王達に叛きましたので、十四年目にケダラオメル王が再び聯合軍を率ゐて西の國民等を撃ち、遂に又ヨルダン川の谷に到り、五人の王達と戦端を開きました。彼等はこゝに再度ケダラオメル王の聯合軍に敗られ、ソドム王とゴモラ王とは遁げて地溼青の穴に陥ち、他の者は山に遁れました。而してケダラオメル王は、ソドムとゴモラの總ての人と、總ての食糧とを奪つて去りました。アブラムの甥ロトもソドムに住んで居りましたので捕虜となりましたが、ソドムより遁れ出た一人の人が、ヘブル人アブラムにその事を告げました。アブラムは直ちに鍛練ある僕等三百十八人を率ゐて、夜に乗じて敵軍を攻め、彼等を打破つてダマスコまで追撃してゆきました。

斯くてアブラムは凡てのものを取り返し、又甥のロトと其の所有、及び婦女や人民等を悉く奪ひ返しました。アブラムがロトを救ひ出す爲めに命懸けで戦ひ、さしもに強い敵軍を追ひや



つたといふ事は、全く痛快事であります。普通の人であつたならば、ロトが捕虜となつたと聞いた時、それは天罰の靦面であると云つて少しも顧みやうとはしないであります。アブラムは曾てロトの爲めに、其の國の最も良き部分を占領された事などは氣にも留めず、直ちに彼の救ひに従事した事は、何と美しい行動ではありませんか。

アブラムは立派な勝利を得ました。實際世には戦争を事とする軍人よりも以上に強く勇敢な人があるのであります。神を信じ、人を愛し、平和を好み、正義の爲めに戦ふ聖人、義人に對しては、如何なる強き敵も勝つ事は不可能であります。

## 二、メルキゼデク

アブラムが其の王達を打破つて歸る時、こゝに一人の貴い人が現はれました。

『時にサレムの王メルキゼデクパンと酒を攜出せり彼は至高き神の祭司なりき 彼アブラムを祝して言けるは願くは天地の主なる至高神アブラムを祝福みたまへ 願くは汝の敵を汝の手に付したまひし至高神に稱れあれ』(十四〇十八―廿)

とあるごとく、それはメルキゼデクでありました。メルキゼデクといふ名の意味は『正義の王』であります。而してサレムといふ處は多分後のエルサレムの地でありまして、サレムとは『平和』を意味して居ります。サレムの王は平和の王、此のメルキゼデク、即ち平和の王、正義の王は、至高き神の祭司でありました。然らばこの貴き人メルキゼデクは何處から來たのでありませうか、その父と母とは誰であるか、其の系圖はどの様なものでありませうか。

此の人の出處、及び死期に就ては、全く不明であります。併し希伯來書に『神の子の如くにして限りなく祭司たり』とある如く、このメルキゼデクは天地の主なる至高き神に事へた祭司であり、而して此の時アブラムを祝してパンと酒とを備へたといふ事は、聖書によつて知る事が出來ます。この時より八百年の後に、ダビデ王は主イエス、キリストの事を預言して、『エホバ誓をたて、聖意をかへさせたまふことなし汝はメルキゼデクの狀にひとしくとこしへに祭司たり』(詩百十〇四)と歌ひました。又一千九百年後に、パウロも主イエスを讃めて、『されど彼は永遠に在せば易ることなき祭司の職を保ちたまふこの故に彼は己に頼りて神にきたる者のために執成をなさんとて常に生くれば之を全く救ふことを得給ふなり』(來七〇廿四、廿五)と言

ひました。我等が仰ぐ平和の王、正義の王、天地の主なる至高き祭司は、永遠に易る事なく活  
き給ふ主イエス、キリストであります。

### 三、十分の一の献金

『アブラム乃ち彼に其諸の物の十分の一を饋れり』(十四〇廿)

前述の如くこのメルキゼデクは神の祭司でありましたから、アブラムは神の僕として彼を敬  
ひ、其の所有の十分の一を彼に贈りました。これによつて、今より三千八百年以前に、既に真  
の神を信ずる聖徒達は、所有の十分の一を正當なる献物として居たことが知られます。これよ  
り四百年の後、即ちモーセの時代に、神がイスラエル人の十二の宗族の一たるレビ人を祭司と  
して聖別し、宮に仕へる事を命じ給うた時、彼等の生活の爲めその兄弟たるアブラハムの子孫  
より十分の一を受けること、及びその受けたるものゝ什一をエホバの擧祭として献げる事を命  
ぜられました。而して教會の歴史を研究してみますと、眞心を以て天地の主なる至高至尊の神  
を信じ、十分の一の献金をさゝげて其の信仰をあらはすものは、特別に祝福された事がわかり

ます。今日に於ても主イエス、キリストの御命令に従ひ、世界を救ひの道に導き、社會に奉仕せんとする信者達は、矢張り此の信仰を保ち、天地の所有者なる神を信じ、其の持物の十分の一を献物とすべき人々であります。

『わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ而して是をもて我を試みわが天の窓をひらきて容べきところなきまでに恩澤を汝らにそゝぐや否やを見るべし萬軍のエホバこれを言ふ』と馬拉基書第三章十節にあります、これは面白い言ひ方であります。十分の一を献げて神を試み、神が果して天の窓を開いてわれらに恩恵をそゝぎ給ふや否やを見よと言はれます。この言葉の中に信者の商事成功の秘訣が示されてあります。神は即ち十分の一を献ぐる人を富ましめ給ふのであります。

## 第十四章

参照 創世記第十五章

### 顯現の神

神は前後九回アブラムに顯はれ給ひましたが、此の第十五章に記されてあるのは五回目の事でありませす。神はかくて幾度か御自身の新しき方面をアブラムに示されました。即ち、

『懼るなかれ我は汝の干櫓なり汝の賚は甚大なるべし』(十五〇一)

との御言葉は、此の時のアブラムの爲めに最も適切なる默示でありました。何故ならば彼は昔のバビロン帝國の軍隊に勝利を博したとはいへ、其の翌年に於ける王達の復讐を恐れてゐた場合でありました。恰もこの時幻の中に、『懼るなかれ我は汝の干櫓なり』との神の御言葉を聞いた事は、彼にとつて非常なる力であつたに相違ありません。

## 一、干櫓となり給ふ神

アブラムは彼の御言葉を耳にした時に如何ばかりか心に慰安を得たことでありませう。その國民の後の歴史を研究してみれば、神が幾度か彼等の干櫓となり給ひしことが知られます。彼等がカナンの國に一族として生活して居た時も、彼等は神を我が干櫓として安らかなる日を送つて居りました。またエジプトの地に移つて四百三十年間奴隸として月日を送る間と雖も、彼等は神なる干櫓の中に恙なく過すことが出来ました。十の災害が彼等エジプト人の上に降された場合にも、神の干櫓の中なるアブラムの子孫にはその禍の一つだに臨みませんでした。信者達よ、よく彼等の歴史を研究し、且つ各自に神を干櫓となしてその中に隠れられよ、然らば常に安らげき生活を興へられるであります。

『おそろゝなかれ我なんぢとともにあり驚くなかれ我なんぢの神なりわれなんぢを強くせん誠になんぢを助けん誠にわがたゞしき右手なんぢを支へん』(賽四十一〇十)

## 二、子を與へ給ふ神

アブラムはいかに戦ひに勝ち、社會に用ひられ、財産を増殖せられ、干槽の中に安全なる生活をなすも、尙ほ一つの大なる不満を感じて居りました、それは子供のない事でありました。

『我は子なくして居り此ダマスコのエリエゼル我が家の相續人なり』(十五〇二)  
と彼は神に訴へて居ります。然し神は彼に告げて、

『此者は爾の嗣子となるべからず汝の身より出る者爾の嗣子となるべし』(十五〇四)  
と言はれ、またエホバは彼を戶外へ連れ出して、

『天を望みて星を數へ得るかを見よ汝の子孫は是のごとくなるべし』(十五〇五)

と仰せられました、これはアブラムの最も聞き度しと願ふ御言葉でありました、これは彼が衷心よりの祈願であつたのであります。然し今アブラムは年齢八十五歳に達し、サライも亦子を産む時期が過ぎましたので、如何にして此の事の成就するやは彼等の量り知るところではありませんでした。唯アブラムは信仰により、萬物に生命を與へ、子を産ましめ、死者をも甦らせ

給ふ、能はざるところなき全能の神の御業を信じたのであります。

『アブラム、エホバを信ず』(創十五〇六)

『彼は望むべくもあらぬ時になほ望みて信じたり』(羅四〇十八)

『彼はその信じたる所の神すなはち死人を活し無きものを有るものゝ如く呼びたまふ神の前にて我等すべてのものゝ父たるなり』(羅四〇十七)

### 三、信仰を義とし給ふ神

『アブラム、エホバを信ずエホバこれを彼の義となしたまへり』(十五〇六)

天啓教たる基督教の中心となるべき教理は、即ち神は信仰を義とせられるといふことであります。新約聖書の書簡の中に、イエスの使徒パウロは最もよくこの眞理を論じ、且つ證明して居ります。而してこれを證明する爲めに、彼は屢々アブラムの事を例として引照致しました。

『アブラム神を信ずその信仰を義と認められたり』と羅馬書第四章三節にありますが。

然らば神の義とせられる信仰とは如何なる信仰であるか。これをよく注意しないならば迷信



に陥る恐れがあります。人を信ずるといふ事は即ち其の人の言ふところを眞とする事であり、神を信ずるといふ事は即ち神の聖言を眞理とすることであり、未だ神の示し給はざるに何事かゞ成就すると信ずるは迷信であり、盲信であります。神の聖言なるが故に確かに成ると信ずるのが即ち正しい信仰であります。それ故に信ぜんとするに先だち、それが神の聖言なるや否やを確かめなければなりません。『汝の子孫は天の星の如く成るべし』と神が告げ給ひし故に、アブラムはこれを信じ、神はその信仰を義とせられたのであります、

神がパウロをして『若し己の罪を言ひあらはさば神は我らの罪を赦し凡ての不義より我らを潔め給はん』(約壹一〇九)と言はしめ給ひし御言葉を信ずる人は、己の罪を懺悔して罪の赦を體驗する事を許されます。若し『それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へりすべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり』(約三〇十六)との聖書の言葉を信ずるならば、その人は即ち神の御獨子なるイエスを信じて、永遠の生命に生きる事が出来るのであります。又主イエスが『天にいます汝らの父は求むる者に善き物を賜はざらんや』(太七〇十一)と言ひ給ひし聖言を信ずる人は、祈禱の本義を悟つて天の父よりの最も善き賜物、即ち聖靈を受

くる事を得るでありませう。神はすべてこれらの信仰を義とせられるのであります。

#### 四、契約をなし給ふ神

神はアブラムをしてその子孫を増し、又一つの國を興へられるといふ事を確信せしめんが爲めに、彼に契約の徴を示し給ひました。即ちアブラムはエホバの命により、牡牛と、牡山羊と、牡羊と、山鳩及び家鳩とを取つてこれ等を中より裂き、各々を相向はしめて置きました處、神は煙と焰の出づる爐をその切り裂きたるものゝ中に通らせ給ひ、それによつて御自身の臨在を顯はし、又神が確かにその契約を守らせ給ふといふ事を、彼をして確信せしめられたのであります。

#### 五、國民の將來を示し給ふ神

然し神の御計畫は一朝一夕にして人々の前に示されないかも知れませんから、氣永くして信じつゝ待たねばなりません。第十五章十三節以下數節を、こゝに註釋を加へつゝ、引照致しま

せう。

「時にエホバ、アブラムに言たまひけるは爾確なんぢたしかに知るべし爾なんぢの子孫他人たれもひとの國くに(エジプト)に旅人たびびととなりて其人々そのひと々に服事つかへん(奴隸どれいの時代)彼等かれら四百年よんひゃくねんのあいだ之これを惱なごまさん又其服事またそのつかへたる國民こくみんは我之われこれを鞫さばかん(十の禍)其後そののち彼等かれらは大なる財貨たからを携たづさへて出ん(出埃及)爾なんぢは安然やすらに爾の父祖なんぢのせんぞの所にゆかん(アブラムの死)爾なんぢは遐齡よきよひに達りて葬はらむるべし四代だいに及びて四百年よんひゃくねんの後)彼等かれら此こゝに返りきたらん其それはアモリ人びと(現在げんざいユダヤに居住すまする國民こくみんの惡未あくいまだ貫盈みたさればなりと」(十五〇十三—十六)

## 第十五章

参照 創世記第十六章

## 一、一夫一婦主義

アブラムは一夫一婦主義者でありました。そしてその一人の妻サライとの美しい生活に満足してゐたのであります。然しサライは子供を産みませんでした。神の御約束により、多くの國民の母となるべきアブラムの妻サライは、七十五歳に至るも未だに一子をも擧げませんでした。爲めに、非常なる信仰の試鍊を受け、遂にサライは誘惑に陥りました。サライに一人の侍女がありました。それは彼女がエジプトより連れて來たハガルといふ女であります。或る時サライは夫アブラムに向つて、神が自分に子を産むことを止め給ひし故に、その侍女ハガルの所へ行き彼女より子供を得るやうにと勧めました。而してそのエジプト人なる侍女のハガルを夫に與

へて妻となさしめました。アブラムが此の時彼女を以て妾とした事は、或る人々の様に肉慾の奴隸となつて妾を持つたものではありませんでしたが、たゞ子供欲しい爲め、即ち子孫慾のためでありました。若し善意に解するならば、アブラムは多くの國民の父となるといふ神の御約束の成就を援けんとしたものと考へられますが、兎に角これは全く大なる失敗でありました。サライは此の時『天は自ら助くる者を助く』といふ主義で、夫にかくの如き所爲を勧めたのであります。

## 二、一夫多妻の失敗

然し如何なる事情の下に於ても、性慾或は子孫慾の爲めに一夫一婦主義を脱するといふ事は、許すべからざる失態であります。子なき夫婦は養子として子を貰ふ事は正當であります。一夫一婦主義を棄て、子を儲けるといふことは、認める事の出来ない所爲であるのみならず、大なる罪であります。男女共にその節操は破るべからざるものであり、而してたとひ如何なる理由の下にも若しこれを破る時は、必ず取返しつかぬ悪結果が報いて來るのであります。此の

時アブラムの一家にも非常なる悪影響を及ぼされました。

## 第一には

『ハガル遂に孕みければ己の孕めるを見て其女主を藐視たり』(十六〇四)

とある如く、侍女たる者が女主を輕視したのであります。箴言第三十章のアゲルの言葉に、『世界には三つの不安の原因があり、また四つの耐え難い事がある、即ちそれは僕が王となる事、愚者が滿腹する事、不貞の女の嫁ぐ事、侍女がその女主の後繼となる事である』といふ意味があらはしてあります。サライはその侍女を利用してこれを子を産む機械といたしました。然し奴隸も勞働者も機械ではありません。女中も人間であり、人間の感情を有つて居ります。ハガルはアブラムの妻となり、子を産んでアブラムの後繼者の母となる日を豫期した時に、人情の弱點として子なき妻を輕蔑するやうになつたのであります。

## 第二の惡結果として、

『サライ、アブラムに言けるはわが蒙れる害は汝に歸すべし我わが侍女を汝の懷に與へたるに彼己の孕るを見て、我を藐視ぐ願はエホバ我と汝の間の事を鞠きたまへ』(十六〇五)

とある様にこゝに、夫婦喧嘩が始まつたのであります。サライは非常に美しい女であり、アブラムは彼女を大切に幾十年を圓滿に過して来たのであります。こゝに初めて夫婦喧嘩をなすに至つたのであります。サライは主人を悪しざまに言ひ、自分の苦痛の原因は主人にあると嘸いて居ります。神の御約束を信じて靜かに待ちさへすれば、この様な結果を見る事はなかつたでありませうに。夫婦間の圓滿な關係は、一夫多妻の家庭には決してあり得ないのであります。

### 第三の悪結果は、

『アブラム、サライに言けるは視よ汝の侍女は汝の手の中にあり汝の目に善と見ゆる所を彼に爲すべしサライ乃ち彼を苦めければ彼サライの面を避て遁たり』(十六〇六)

との事實であります。此れは女中に對する壓迫、勞働者への壓制であり、人を機械視する事でありませぬ。自身の意志を果さんが爲めには雇人を苦しめても、壓制しても、放棄してもかまはないといふ考へは、非常なる誤謬と云はねばなりません。一人の人間はその様に容易く捨て得べきものではないのであります。サライはエジプトに居た時には妃殿下にも等しい地位にあつて、パロの宮殿に厚く待遇され、主人のアブラムは非常な富豪となつて、人々の尊敬を一身に



あつめて居たのであります。而してサライがエジプトを出る時に、侍女のハガルは自分の父母を離れ、國を捨て、サライと共にユダヤの國へ来て忠實にその女主に仕へて居りました。ハガルは主人アブラムの心を盗むやうな事はなく、また彼とサライとの間に立入らうとは決してしませんでしたが、ハガルを兩人の間に立入させたのはすなはちサライ自身であり、子を産ませる爲めにサライが彼女を用ひたのであります。然し侍女と雖も、とより子を産む機軸ではありません。又子を産む時期の來たゝめに壓迫を受くべきものでもありません。嗚呼、此の夫妻の涙、妾の涙、苦しめらるゝ侍女の涙を一つにあつめたならば、涙の海ともならうかとさへ疑はれます。

### 三、被壓制者への福音

そこでハガルが自分の國をさして逃げ歸る途次、シユルの路にある泉の傍で天の使が彼女に尋ねて、

「サライの侍女ハガルよ汝何處より來れるや又何處に往や」(十六〇八)



と言ひました。

『我は女主サライの面をさけて逃るなり』(十六〇八)

と彼女が答へますとエホバの使者は、

『汝の女主の許に返り身を其手に任すべし 我大に汝の子孫を増し其數を衆多して數ふること

あたはざらしめん 汝孕めり男子を生まん其名をイシマエル(神聽知)と名くべしエホバ汝の

艱難を聽知したまへばなり 彼は野驢馬の如き人とならん其手は諸の人に敵し諸の人の手は

これに敵すべし彼は其諸の兄弟の東に住ん』(十六〇九—十一)

と告げました。神の御諭の尋きかな、女主の許に歸り身を其の手に任せよと。奴隸たるものと

して神を信じて救はれむ人々は、其の主人の手に身を任すべきであります。労働者たる者神を

信じて救はれむとならば、その主人の所有を奪ひ取らんとはせず、たゞ主人に自身を任せる筈

であります。小作人なる者よ、神を信じて救はれむには、その地主に叛いて成功せんとはせず、

主人にすべてを任せねばなりません。神は被壓制者を顧み給ふのであります。

ハガルはやがて子を産み、その名をイシマエルと名づけました。イシマエルはアラビヤ人の

祖先であります。而してアラビヤ人は沙漠に住居して、矛を手に取り、馬に乗り、天使の言つた言葉のやうに野驢馬の如き生活をして居ります。インマエルは壓迫の中に生れた人であり、その手は凡ての人に敵し、すべての人はこれに敵して、子孫は三千八百年の間壓制したり、壓制せられたりして暮して居ります。即ちモハメットはインマエルの血をうけた人でありまして、モハメット教は今日一億五千萬の信者を有し、彼等は刃を手にして人々に敵し、人々は彼等に敵對して居ります。前年彼等が三十萬の人口を有するスミルナを焼き盡した事實は、恰もこの預言の中に居ると思はれます。

## 第十六章

参照||創世記第十七章

### 神の六回目の顯現

『アブラム九十九歳の時エホバ、アブラムに顯れて之に言たまひけるは我は全能の神なり汝我前に行みて完全かれよ』(十七〇一)

#### 一、神の新しき聖名

神の自己紹介の御言葉は、人心に訴へる面白い表現であります。然し此の第十七章一節なる『我は全能の神なり』といふ言葉は不適當なる譯言であります、『我はエルシャダイなり』であり、エルとは神、或は強者の意、シャダイは母の懷、又は母の乳房の意味であります。故に『我は

胸のある神である』或は『乳房のある強い者である』といふ意味になります。アブラムは駄々  
と捏る子供の如く、神の御約束を待ち兼ねて居る處へ神は顯はれて言ひ給ふ、『我は胸ある神な  
り我は哺乳して汝を慰めん』と。母が其の子を抱き慰むる如く、神は我等を愛し、養ひ、強め、  
慰め給ふのであります。適當な言葉がない爲めに『我は全能の神なり』と譯されてあります、  
残念ながら其の言葉によつては、母親の乳房の暖かい慰安を見出す事の出来ない恨みがありま  
す。キリスト教會の一部なる舊教がマリヤ教になつたのは惜しむべき事ではありますが、然して  
れは神の懷を探らんとして、誤つて聖母の懷に入るやうになつたのであります。

## 二、アブラムの新しき名

『我汝とわが契約を立つ汝は衆多の國民の父となるべし 汝の名を此後アブラムと呼ぶべから  
ず汝の名をアブラハム(衆多の人の父)とよぶべし』(十七〇四五)  
エルシャダイ、即ち母の愛の懷を有ち給ふ神が、アブラハムを慰めて彼に新しき名をあたへ  
且つ其の契約を更に擴大せられました。ユダヤ人はアブラハムの本血統の國民であります、

其の他にも彼の血をうけた國民は少くないのであります。靈的に云へばキリスト教會はすべて其の子孫であります。此の約束を單に靈的にのみ解釋したくないと思ひます。既に充分に現實的にも成就せられて居るのであります。神の聖國の來らん時には、その文字通り以上にこの契約が成遂げられることと信ぜられます。

『王等汝より出べし 我わが契約を永久の契約となし カナンの全地を與へて永久の産業となさん而して我彼等の神となるべし』(十七〇六—八、略)

### 三、新しき契約の表象

『汝等の中の男子は皆生れて八日に至れば割禮を受べし 汝等其陽の皮を割べし』(十七〇十

#### 一、十二、略)

陽皮を切る事はこの時に始まつたのであるか、或はそれ以前にもありしかは、格別問題でありませぬ。兎に角神はこれを選んで、アブラハムとの契約の表象として定められましたので、この意味を以てアブラハムの子孫は今日に於ても、一般に八日目に男子の陽皮を切る割禮の式

を守つて居ります。近時他の國民の間にも衛生上餘程行はれて居り、日本の軍隊に於ても同じく衛生上行はれて居ります。日本にはまた八日目に嬰兒に名をつけ、宮詣をなす等の習慣があります。これは何時、如何にして起つた風習であるかは研究すべき問題であります。西洋にはかゝる風習を見ないのであります。

#### 四、新しき妃

『神又アブラハムに言たまひけるは汝の妻サライは其名をサライと稱ぶべからず其名をサライ(妃)と爲べし 我彼を祝み彼よりして亦汝に一人の男子を授けん我彼を祝み彼をして諸邦の民の母とならしむべし諸の民の王等彼より出べし』(十七〇十五、十六)

サライは九十歳でありましたから、子を産む希望はあり得なかつたのであります。エルンヤダイ即ち愛の御神が其の名をサライ妃となし給ひ、彼女をして諸邦の民の母たらしめんと仰せられたのであります。二千年の後パウロも、此の歴史的事實に就て次の如く記しました。

『信仰に由りてサライも約束したまふ者の忠實なるを思ひし故に年邁きたれど胤をやどす力を受

けたりこの故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとくまた海邊の藪へがたき砂のごとく夥多しく生れ出でたり』(來十一〇十一、十二)

## 五、新しき子

『アブラハム俯伏て晒ひ其心に謂けるは百歳の人に豈で子の生ることあらんや又サラは九十歳なれば豈で産ことをなさんやと 神言たまひけるは汝の妻サラ必ず子を生ん其名をイサク

(笑ひ)と名くべし』(十七〇十七、十九)

こゝに我々の神觀を改めなければならぬ點があります。何故ならばかく言ひ給ふ神は氣まぐれな方であるかの様に思はれます。その子にイサク(笑ひ)と名をつけるのは如何にも滑稽らしい感じが致します。しかし幸福の源なる神は、その子供の喜樂をも望ませたまふのであります。宗教は葬式ではありません。諧謔もまた基督者に與へられる生命の無邪氣な一面であります。先般神戸のキリスト教青年會に於て一千二百の聴衆を前に、賀川豊彦氏は『宗教に於ける諧謔の位置』と題して、非常に有益なる講演を試みられました。神は『笑ひ』給ひ、又我等にも

「笑ひ」を與へ給ふのであります。

第十七章

エホバママレの橡林にてアブラハムに顯現たまへり彼は日の熱き時刻天幕の入口に座しゐたりしが目を舉て見たるに視よ三人の人、其前に立り彼見て天幕の入口より趨り行て之を迎へ身を地に鞠めて言けるは我か主よ我若汝の目のまへに恩を得たるならば請ふ僕を通り過すなかれ請ふ少許の水を取きたらしめ汝等の足を濯ひて樹の下に休憩たまへ我一口のパンを取來らん汝等心を慰めて然る後過ゆくべし汝等僕の所に來ればなり（創世記第十八章一節五節）

神の友

神は或る暑い日にアブラハムを訪づれ給ひました。アブラハムはその時天幕の入口に座つて



居ましたが、三人の旅人が見えませんでしたので、彼等に挨拶をしてその足を洗ひ、涼しい木蔭に休ませました。それより急ぎ天幕に入り、サラにパンを造らせ、また牛の群に到り、犢の軟かい良いものを選んでこれを調理し、牛酪と乳と共に供しました。

## 一、旅人の款待

此の三人が誰であるかをアブラハムは少しも知りませんでした。天使達が我等を訪づれる時、普通、人の姿容をとるといふ事を例として、パウロは旅人を款待することを奨励して居ります。『兄弟の愛を常に保つべし旅人の接待を忘るな或人これに由り知らずして御使を舍したり』(來十三〇一)と記されてあります。又主イエスの聖言には、『汝らを受くる者は我を受くるなり我をうくる者は我を遣はし給ひし者を受くるなり凡そわが弟子たる名の故にこの小き者の一人に冷かななる水一杯にても與ふる者は誠に汝らに告ぐ必ずその報を失はざるべし』(太十〇四、四十二)とあります。それ故凡ての人を、神に對するが如くに接待致しませう。アブラハムの客は即ち神とその天使達とであつたのであります。

『また吝むことなく互に懇ろに待せ』(彼前四〇九)

## 二、款待の報

アブラハムは報ひを得んがためにこの三人の客を接待したのではありませんでしたが、然し親切なる款待には當然報償が伴つて來ました。エホバはこゝに御自身を顯はされ、サラに向つて彼に子と與ふる約束を再び語られました。サラがそれを聞いて笑ひ、且つ疑つて居た時に、『エホバ豈に爲し難き事あらんや時至らば我定めたる期に爾に歸るべしサラに男子あらん』(十八〇十四)

と告げ給ひました。祝福は吝みなく人を款待する家に臨むのであります。

## 三、神の友なるアブラハム

アブラハムは『神の友』と稱へられて居ります(雅二〇廿三)。神が友を要し給ふといふ事を私はアブラハムの生涯に就て研究するまでは知りませんでした。しかし此の時より幾百年の後、

神が預言者の口を通して言はれた言葉に我僕イスラエルよ我友アブラハムの裔よ〔賽四十一〇八〕とあります。私は曾て神が友を要せらるゝとは知らず、又神より友として求めらるゝ程の價值ある人が曾てあつたとも考へて居りませんでした。私は友を要します。慰安者が欲しい、相談相手や道連を求めますが、然し神には淋しさや心の悩みもなく、相談相手を要せらるゝ様な事はない筈であると考へて居りました。然し聖書に據れば、全能の神はたしかにアブラハムを眞の友として求められ、而して彼を得給ふたのであります。神はソドム、ゴモラの罪深き有様を見そなはし、非常なる悩み、憂ひを御胸に秘めて居られました。而して斷然彼等を滅ぼさねばならないと決せられた時、その苦しき御心を慰むべき友を要せられ、御自身の衷心を打明け給はんが爲めにアブラハムに來り給ふたのであります。神の慰安者となり、相談相手となり、眞の友となり得る事、それは人の最高の名譽でなくて何でありませうか。

友とは如何なるものなるかに就て箴言に左の如き句があります。

『朋友はいづれの時にも愛す兄弟は危難の時のために生る』(箴十七〇十七)

『兄弟よりもたのもしき知己もまたあり』(箴十八〇廿四)

眞の友の間に秘密はない筈であります。故に神は、

『我爲んとする事をアブラハムに隠すべけんや』(十八〇十七)

と言はれました。信仰の篤い神の友は、つねに神の爲さんとし給ふところを前以て告げられて居りまし、而してこゝに神が、其の聖旨をアブラハムに打明けられた理由が二つ記されてあります。一つは、

『アブラハムは必ず大なる強き國民となりて天下の民皆彼に由て福を獲に至るべきに在らずや』(十八〇十八)

とあるごとく、彼は天下の最も有用なる人士なるが故に、神は彼にその聖旨を告げられました。なほ一つは、

『其は我彼をして其後の兒孫と家族とに命じエホバの道を守りて公義と公道を行しめん爲に彼をしれり』(十八〇十九)

とあります。神は家族を治め、家庭禮拜をなし、公義公道を其の子女等に教示する人に聖旨を打明け給ふのであります。かゝる人々こそは神の信任を受け、神の友となり得るのであります。

す。主イエスは「汝等もし我が命する事をおこなはゞ我が友なり我なんぢらを友と呼べり我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり」(約十五〇十四、十五)と仰せられました。

#### 四、仲保の位置

斯くてアブラハムはソドムの滅亡についての神の相談相手となりました。ソドムはアブラハムの愆の深い甥ロトの住む邑であります。アブラハムは此の時

「爾は義者をも悪者と俱に滅ぼしたまふや 若邑の中に五十人の義者あるも汝尙ほ其處を滅ぼし其中の五十人の義者のためにこれを恕したまはざるや 天下を鞫く者は公義を行ふ可にあらすや」(十八〇廿三—廿五略)

と神の聖前に親しく尋ねたのであります。神はこれに答へて、

「我若ソドムに於て邑の中に五十人の義者を看ば其人々のために其處を盡く恕さん」(十八〇廿六)

と仰せられました。眞の信仰に生きる信者達は天下の救済人であります。彼等のために此の奸

悪なる世界は赦されて居ります。數名の義しき信者達が一つの町に住めば、其の町は悉く彼等のために赦され、恵まれるのであります。この世界が斯く安全な、恵まれた存在を許されて居るのは、それら信仰の人々の故であります。『汝等は地の鹽なり』と主イエスの仰せられしも亦、この意味であると信じます。アブラハムの仲保の祈は誠に熱誠のあふれたもので、凡ての信者の模範であります。『若し彼處に四十五人の義者あらば……若し彼處に四十人あらば……若し彼處に三十人あらば……若し彼處に二十人あらば……若し彼處に十人あらば如何』と、而してエホバは十人の義しき者の爲めに彼處を滅ぼさじとまで、憐みを以て其の怒りを遅くし給ひました。かくの如くアブラハムは神の眞の友でありました。怒りを宥めてこれを柔らげ得る者は眞の友であります。

主イエスの信者等は各々其の責任をつくさなければなりません。此の世の滅亡は定まつた事でありますが、その間私共はキリストの福音を宣傳へ、義しき人をつくり、此の世の爲めに祈り、火の中より人々を救ひ出す事は、神の友たるものゝ責任であります。『スコットランドを與へよ、然らざれば死を與へよ』とは、ジョン、ノツクストリスの仲保の祈でありました。信者等

の熱誠あふるゝ祈こそ、やがてこの日本の國土をも救ふことが出来るのであります。

## 第十八章

其二個の天使黄昏にソドムに至る　　ロト乃ち彼等のために筵を設け酔いれぬパンを炊て食はしめたり　　斯て未だ寐ざる前に呂の人々即ちソドムの人老たるも若きも諸共に四方八方より來たれる民皆其家を環み　　ロトを呼て之に言けるは今夕爾に就たる人は何處に在るや彼等を我等の所に携へ出せ我等之を知らん　　ロト入口に出て其後の戸を閉ぢ彼等の所に至りて言けるは請ふ兄弟よ惡き事を爲すなかれ　　我に未だ男知ぬ二人の娘あり請ふ我之を携へ出ん爾等の目に善と見ゆる如く之になせよ惟此人等には何をも之になすなかれ　　彼等曰ふ爾退け又言けるは此人は來り寓れる身なるに恒に士師とならんとす然ば我等彼等に加ふるよりも多くの害を爾に加へんと遂に彼等酷しく其人ロトに逼り前よりて其戸を破らんとせしに　　彼二人人其手を舒しロトを家の内に援いれて其戸を閉ぢ　　家の入口に在る人衆をして大なるも小き



も俱に目を眩しめければ彼等遂に入口を索ぬるに困憊たり（創世記第十九章一節—十一節の略）

## ソドムの滅亡

### 一、ソドムの罪惡

凡そ國民の道德的狀態を知らんとする時、その國民に就てのあらゆる行動を調査する必要はありませぬ。たゞ彼等一日の生活狀態を観察するならば、それを以て大方すべてを推量する事が出来ませう。二人の天使がソドムを訪づれロトの客となつた事を聞いて、ソドムの人々は老いたるも若きも色情を懷いて四方八方より集り來り、ロトの家を圍んでその二人の天使なる客に男色を挑みました。ロトがこれを拒んでその代り二人の娘を遣ると申し出た時に、其の人は女は不要である、男を要求すると暴言しました。こゝに於てなほロトが其の二人を連れ出す事を拒んだために、人々はロトを男色の犠牲にしやうといはしました。そこで天使は彼を内に引き入れ、戸を閉ぢてその町民等を盲目となし、漸くその恐ろしき危難を免かれたのであり



ます。この一つの事實を以て、ソドムの墮落した状態が明かに知られます。後にこの町の名を取つて男色の罪をソドミと呼ぶ様になつたのを見てもこれを想像する事が出来ませう。

ソドムの人々が何故かくまで墮落したのであるか、その階段を神はエゼキエルの口を通して示し給ひました。

『ソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽きその女子らとともに安泰に居り而して難める者と貧き者を助けざりき かれらは傲りわが前に憎むべき事をなしたれば我見てかれらを拂ひ除けり』(結十六〇四十九、五十)

傲慢、飽食、安逸、無慈悲、色情、男色、これは滅びに到る階段、道程であります。かゝる國民は國民としての價值がありませんので、神は彼等を『拂ひ除き』給ふより外はありませんでした。たゞ此の上の爲す可き一事は、滅亡の邑より恵みを受くべきものを導き出す事にあつたのであります。

## 二、燃 柴

『汝等は火焰の中より取り出したる燃柴の如くなれり然るも汝等は我に歸らずとエホバ言ひ給ふ』とある如く、人を救ふ事はまことに困難な仕事であります。それは恰も焰の中より燃柴を取り出すやうなものであります。ロトは天の使に勧められてその娘の婿等を救ひ出さうとしたが、彼等は不信仰の爲め滅亡の邑を遁れやうとはしませんでした。天の使達はロトと、其の妻と、二人の娘を救ひ出さうとつとめました。それもまた容易な事ではありませんでした。彼等はロトを促して速かに遁れさせやうと致しましたが、彼はなほ躊躇して居りました。天使は遂に彼等の手を執り、二人宛を率ゐて漸く町の外へ導き出し、而して彼等を顧まして、『逃遁て汝の生命を救へ後を回顧るなかれ山に遁れよ』(十九〇十七)

と勧めましたが、ロトはなほ氣が進まず、叔父のアブラハムが山に居る事を思ひ出し、彼の羊飼等に出會つたならば酷い目にあふかも知れぬと懸念して、ゾアルといふ小さい町へ逃れる様に天の使に願ひました。

眞に我々人間が滅びの地より逃れる足は鈍り勝ちなものであります。救ひの道が與へられて居ても、その道を敢て代へやうと致します。又滅亡の時が來ると告げられてさへそれを疑ふ心

深く、誠に人間は救はれ難いものであります。イエス、キリストを信じてバプテスマを受くる者は救はるべしされど信ぜぬ者は罪に定めらるべし』(可十六〇十六)と告げられても、何かと自分の理屈を主張して、主イエスの救ひを信じまいとする人々が多いのであります。

### 三、ソドムの最後

ソドムの滅亡は有名な事實でありまして、之は世界の滅亡の型となつて居ります。預言者達が國々の滅亡を預言した時にも『ソドムの如く』と言つて居ります。例へばバビロンに就ては、『すべての國の中にてうるはしくカルデヤ人がほこり飾となせるバビロンはむかし神にほろぼされたるソドムゴモラのごとくならん』(賽十三〇十九)

モアブに就ては、

『イスラエルの神言給ふ我は活く必ずモアブはソドムの如くなりアンモンの子孫はゴモラのごとくにならん』(番二〇九)

イスラエルの國に就ては、

「その全地は硫黄となり鹽となり且燒土となりて種も蒔れず産する所もなく何の草もその上に生ぜずして彼の昔エホバがその震怒と忿恨とをもて毀ちたまひし、ソドム、ゴマラ、アデマ、ゼボイムの毀たれたると同じかるべし」(申廿九〇廿三)

イエスを信ぜぬ家及び町については、主イエス御自身の言葉に、

「人もし汝らを受けず汝らの言を聽かずばその家その町を立ち去るとき足の塵をはらへ誠に汝らに告ぐ審判の日にはその町よりもソドム、ゴモラの地のかた耐へ易からん」(太十〇十四、十五)

とあります。

ロトがゾアル町に着いた時、既に夜は明けはなれ、太陽が昇つて居りました。その時ソドムの人々は常の如く飲み、食ひ、商ひ、植ゑつけ、家造りなどして居りましたが、エホバは天より硫黄と火を降らせて彼等を滅ぼし給ふたのであります。

「人の子の顯はるゝ日にもその如くなるべし」(路十七〇三十)

#### 四、ロトの妻を憶へ

此の「ロトの妻を憶へ」といふ短かい言葉を以てイエスは意味深い説教をせられました。即ち後を顧みるなかれと誠め給ふたのであります。ロトの妻は後を顧みた爲めに鹽の柱となりました。彼女は命よりも持物が大切であつたのであります。命を救はんがために逃れながらも家に残して來た持物に心を惹かれ、それを取りに歸らうとした時硫黄と火と泥水とが天より落ちてかゝり、遂にそれらに覆はれて鹽の柱と化してしまつたのであります。

「人全世界を贏くとも己が生命を損せば何の益あらん」(可八〇卅六)

「その日には人もし屋の上をりて器物家の内にあらば之を取らんとて下るな烟にをる者も同じく歸るなロトの妻を憶へ」(路十七〇卅一卅二)

## 第十九章

参照||創世記第二十章

## 外國に滞在するアブラハム

## 一、アブラハムの不信仰と偽り

アブラハムは暫く南のゲラルに滞在して居りました。此の時に於ても亦エジプト滞在の際の如く、彼は其の國の人々を怖れてサラを自分の妹であると云ひましたので、ゲラルの王アピメレクは人々を遣はしてサラを召入れました。アブラハムは先に、エジプトに於て同じ偽りを言ひ、激しく意見され、排斥せられた事がありました故それで懲りる筈であるのに、何故再び同じ罪に陥つたのでありませうか。其の時代には妻の美の爲めに夫の殺された事實が往々あつたとしても、それはたゞの言譯に過ぎません。アブラハムの偽りは不信仰と恐怖とより出たもの

であります。

『我此處はかならず神を畏れざるべければ吾妻のために人我を殺さんと思ひたるなり』(廿〇十一)

と言つて居ります。

アブラハムは神を知らぬ外國の人々の間にある時と雖も、絶えず神が自分を保護し給ふといふ事を忘れ、偽りを以てその生命を自ら護らむと致しました。かゝる事實は一面人間の癖であります。故郷に居る間評判の良かつた人が、旅行先で大なる過失に陥る事が往々あります。即ち『旅の恥はかき捨て』といふ善からぬ諺を信ずるところからであります。何時何處にある時も神は我と我が家族を護り給ふ事を信じて、虚偽に頼らず神に頼る、確固たる信仰が欲しいものであります。

偽言を用ふる時、人々の良心は眠つてゐるのであります。

『彼は誠にわが妹なり彼はわが父の子にしてわが母の子にあらざるが遂に我妻となりたるなり』(廿〇十二)

と偽いつはつてアブラハムはその良心りょうしんを眠ねむらせてをりましたが、斯かかる偽いつはりは神かみの聖前みまへには通用つうよういたしません。實じつはアブラハムには若い時ときから一の恐怖おそろがありました。即すなはちサラの美びのために何時いつかその身みに禍わざはひが來きはしまいかとの懸念けんねんがありました。そこで二人ふたりの間あひだには、

『我等われらが至いたる處ところにて我われを爾なんぢの兄あになりと言いへ』(廿〇十三)

といふ約束やくそくがあつたのであります。誰たれでもその様やうな約束やくそくの下もとに旅行りょこうをするならば、忽たちまちにして虚言病者きよげんびやうしやとなる筈はずであります。

## 二、他人の妻

『然しかるに神夜かみよの夢ゆめにアビメレクに臨のぞみて之これに言いたまひけるは汝なんぢは其その召入めいせいれたる婦人むんなのために死しほるなるべし彼かれは夫をとある者ものなればなり』(廿〇三)

他人たにんの妻つまを召入めいせいれる事ことは神かみの聖前みまへに死刑罪けいせつざいであります。世間せけんの娛樂機關ごらくきくわんたる活動寫真くわつどうしやしんの幕まくの中に、若もし毎夜まいよ右みぎの聖句せいこの文章ぶんしょうを寫うつし出したならば、如何いかに人々ひとびとの心こころに訴うたへるところがありませう。このアビメレク以後いごの社會しゃかいは或あるひはこれを忘わすれてゐたかも知しれませんが、今日神こんにちかみの前に、



他人の妻を召入れる事は、許すべからざる罪であります。或る人々の罰は既に明かに示されて居ります。また或る人々には未だ審判の時が到らないかもしれませんが、併し早晚其の罪の報いは來ます。私の記憶に残つて居る實例を吟味してみただけでも、是は疑ふ事の出来ない事實であります。此の世にある天死、即死、時機に適はぬ死、變死等の或る場合について考へても、他人の妻を召入れる人にはその罪の報いが無いとは決して言はれません。

### 三、酌量すべき事情

『アビメレク未だ彼に近づかさりしかば言ふ主よ汝は義き民をも殺したまふや 彼は我に是はわが妹なりと言しにあらすや又婦も自ら彼はわが兄なりと言たり我全き心と潔き手をもて此をなせり 神又夢に之に言たまひけるは然り我汝が全き心をもて之をなせるを知りたれば我も汝を阻めて罪を我に犯さしめざりき彼に觸るを容ざりしは是がためなり』(廿〇四六)

アビメレク王はサラに夫があるとは知らなかつたのでありますから、神は彼に罪を犯さしめぬやう阻め給ひました。即ち酌量すべき、事情があつた爲めに神は彼の罰を減刑せられ、死刑

の代りに胎閉の罰を課せられたのであります。

『エホバさきにはアブラハムの妻サラの故をもてアビメレクの家いへの者ものの胎たいをことごとく閉とじたまへり』(廿〇十八)

#### 四、救はるゝ道

然し神はアビメレクに罪が無いとは言はれません、却てその罪の悔悟を嚴命せられ、

『然ば彼の妻を歸せ汝若歸すば汝と汝に屬する者皆必死るべきを知るべし』(廿〇七)

と仰せられました。アビメレクは其の嚴命に従ひ、サラの潔白なるを證明して其の顔を立てるために、銀一千枚と立派な禮物を與へて其の夫に妻を返しました。

『彼は預言者なれば汝のために祈り汝をして生命を保しめん』(廿〇七)

と神は仰せられました。神の僕の許にゆき、自身のための祈を求むる事は大切なことであります。自分の力の限りを盡して罪を悔改め、その妻を返したゞけではまだ足りません。主イエス、キリストの御許に往き、主の仲保の祈を求めるならばそれによつて、人々は完き救ひを與へら

れるのであります。

『凡て勞する者重荷を負ふ者われに來れわれ汝らを休ません』(太十一〇廿八)

## 第二十章

參照||創世記第二十一章、二十二章

### 信仰の最上試験

『是等の事の後神アブラハムを試みんとて之をアブラハムよと呼たまふ彼言ふ我此にあり。エホバ言給ひけるは爾の子爾の愛する獨子即ちイサクを携てモリアの地に到りわが爾に示さんとする彼處の山に於て彼を燔祭として獻ぐべし』(廿二〇一二)

### 一、イサクの誕生

遂に神の御約束か成就せられてサラにイサクが生れました。恐らくはこれ程喜ばれた誕生はなかつたでありませう。アブラハムは其子をイサク（笑ひ）と名づけたのであります。又サラは、

『神我を笑はしめ給ふ聞く者皆我とゞもに笑はん』（廿一〇六）

と歌ひました。アブラハムはその時百歳でありましたから、殊更にその誕生は人々の間に評判せられました。八日目に父アブラハムはイサクに割禮を受けさせました。サラは喜んでその子を育てましたが、やがて乳離れの時期となりました。其の日アブラハムは幾百人の羊飼とその家族等を招待して、イサクの乳離れを祝ひ、盛大なる祝宴を催しました。イサクはかくてアブラハムの寶玉となり、その一家の愛情の中心となつたのであります。

或る日サラは十五才になるイシマエルがイサクを嘲笑する有様を見て、直ちにアブラハムに告げて妾のハガルと共に彼を放逐する事となりました。嗣子のイサクを邪魔にするやうな事があつては、許す事が出来ないものであります。それ程深く子供を愛するやうになりますと、人は神を忘れ勝ちなものであります。そこで神はその後或る機を得て、アブラハムを試みられました。神が大切か、イサクが大事か、神はやがてこれを試験されたのであります。

## 二、信仰の試験

イサクは成長して青年になりました。其の年齢二十才の頃神はアブラハムに告げて「爾の子爾の愛する獨子即ちイサクを燔祭として獻ぐべし」と言はれました。信仰の試みはその人の最も大切なものゝ上に與へられます、さもなくば眞の試験とは云はれないであります。これまでアブラハムは幾度か困難な試験に出遇つた事がありました。例へば「汝の國を出で嗣業として受くべき地に出で往け」と命ぜられた時、彼は國か、神か、何れが大切であるかといふ試験の答案を求められたのであります。然しその時彼は見事に其の試験に及第し、信仰によつて其の往く處を知らずして出立いたしました。又朔のロトにヨルダンの沃地を取られ、山地のみ自分に残された時には、アブラハムは財産か、神か、何れか一をゑらぶべく信仰の試験を受けたことであります。併し、此度の新しき一つの試験に比すれば、それ等はなほ小さい試みであつたかのやうに思はれます。その愛子を燔祭として獻げる、これより大なる試みが又とありませうか。

ハリ、ラウダといふ世界的聲樂家に一人の息子がありません。其の獨息子がフランスに於ける激戦で國家の爲めに一命を失つた時に、父のハリ、ラウダは戰場に赴き、息子の墓を探し出し、その上に身を伏せて言ひました。『この様な試みに遇ふ時、煩悶して自殺する人もあり、飲酒によつて忘れやうとする人もあり、又神に立ちかへつて信頼する人もある、余はこれを以て一切を献げる』と言ひつゝ起ち上り、塹壕の近くへ行つて兵士等を慰めるために、聲張り上げてうつくしく歌ひました。これは即ちラウダの上に與へられた試練に對する合格であり、勝利であつたのであります。

アブラハムは愛子イサクを伴ひ、三日の旅路を経てモリアの山に着きました。其處に彼は石の祭壇を築き、薪をのせ、イサクを縛つてその上に置き、手をのべて刀を執り、これを殺さうと致しました。斯くの如くアブラハムはその最上の試験に合格したのであります。神の命は彼にとつて、愛するイサクよりも大切でありました。如何なる事情の下にも一切をすてゝ神の誠命に従ふことは、信仰の最高試験の合格を意味するものであります。

### 三、神の愛

「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり」(約三〇十六)

アブラハムは預言者でありました。其の子イサクを燔祭として献げた事も、それ自身一の預言をなして居ります。後にソロモンはモリア山上に神の宮を造りました。其の宮の周圍にはユダヤの首府エルサレムが建てられ、而して神の御獨子イエスは其の宮を潔め、その宮で教へ、其の町の人々を癒し、その町に裁判せられ、其の町の外にある丘の上に貴き命を捨て給ひました。イサクは型でありましたが、主イエスは我等の眞の燔祭となり給ひました。アブラハムの深い情愛も型でありましたが、神の愛は實際今我等の上にそゝがれて居ります。神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給ふのであります。イエスの十字架は全世界の燔祭であります。アブラハムは其處をエホバエレ(エホバ預備たまはんと名づけました。エホバの備へたまひし萬國民の犠牲は即ち神の御獨子なる主イエス、キリストであります。イエスは我等に代りて生命を捨て給ふほどに、われらを愛したまふのであります。



## 第二十一章

参照 創世記第二十四章

## 配偶を選ぶ方法

「彼言ふわれはアブラハムの僕なり エホバ大にわが主人をめぐみたまひて大なる者とならしめ又羊牛金銀僕婢駱駝驢馬をこれにたまへり わが主人の妻サラ年老てのちわが主人に男子をうみければ主人其所有を悉く之に與ふ わが主人我を誓せて言ふ吾すめるカナン地の人の女子の中よりわが子に妻を娶るなかれ、汝わが父の家にゆきわが親族にいたりわが子のために妻をめとれと、我わが主人にいひけるは倘女我にしたがひて來ずば如何、彼我にいひけるは吾事ふるところのエホバ其使者を汝とともに遣はして汝の途に幸福を降したまはん爾わが親族わが父の家より吾子に妻をめとるべし。汝わが親族に到れる時はわが誓を解さるべ



し若彼等汝にあたへずば汝はわが誓をゆるさるべしと』(廿四〇卅四―四十一)

サラは百二十歳にて死し、ヘブロンに葬られました。アブラハムも年老いて、その後繼たるイサクのために嫁を選択すべき時期となりました。長子相續權のある國々に於ては、長男の配偶を選ぶ事は戸主の責任であります。イスラエルの國民は、アブラハムの後裔より萬民の救主イエス、キリストが生れ給ふといふ預言がありましたので、一般に家柄、血統を重んじ、長子相續權を非常に尊重して居りました。今でも英國に於ては此の長子相續權を法律として居りますが、他のヨーロッパ諸國に於ては既に廢止せられて居ります。米國に於ても最初英國の殖民地時代には、矢張りこの長子相續制に従つて居りましたが、やがてそれは廢止となり、現今に於ては子供は同様に親の財産を相續致します。日本にあつては矢張り昔のイスラエル國民と同様に、長子相續が法律となつて居りますから、結婚の習慣等もそれに應じて定められてあります。長子の配偶を選択する事は親の責任であります。キリストを信ずる兩親も、同じく此の責任をつくす筈であります。

## 一、根本主義

配偶を選ぶ事に就て、キリスト信者の爲めに一のとるべき、根本主義があります。即ちそれは信仰ある息子のために、信仰ある嫁を迎へることであります。

「不信者と軛を同じうすな約合はぬなり義と不義と何の干與かあらん光と暗と何の交際かあらんキリストとベリアルと何の調和かあらん信者と不信者と何の關係かあらん神の宮と偶像と何の一致かあらん我らは活ける神の宮なり即ち神の言ひ給ひしが如く「われ彼らの中に住みまた歩まん我かれらの神となり彼等わが民とならん」とこの故に「主いひ給ふ汝等彼らの中より出で之を離れ穢れたる者に觸るなかれとさらば我なんぢらを受けわれ汝らの父となり汝等わが息子娘とならんと全能の主いひ給ふとあるなり」哥後六〇十四―十八」

永遠の家を建てんとする信者は此の主義を確く守ります。「我を愛しわが誠命を守る者に恩恵をほどこして千代にいたるなり」との神の御約束があります。信仰の生活はたゞ一時代にのみ限らるべきものではなくして、千代にいたるまでも御恵の下に繼續すべきものでありま

す。たゞ一代のみキリストの道に従ひ、後にまた元の暗黒と迷信とにかへる家庭は、大抵この根本主義を忘れた爲めであります。アブラハムは年老いて後、或る日その信用ある僕を召しよせて、偶像信者の中より其の子イサクのために妻を娶らず、故郷へ行き、眞の神を知る親族等の中よりこれを選ぶべき事を命じ、彼をして天地の神エホバをさして此の事を誓はせました。

## 二、祈りと導き

或る人々は、信者の多い外國では信者同志の結婚が容易に行はれますが、信者の少い日本ではそれは實行が出来ないといひます。併しアブラハムの信仰に倣へば、日本に於てもこの根本主義を守る事が出来る筈であります。アブラハムが滞在して居たカナンの地にはエホバを信ずる人々はありませんでしたが、然し五百哩ほどを隔てたパダンアラムにはエホバなる神がイサクのために定め給ひし配偶者が立派に成長して居たのであります。結局これは信仰の問題であります。結婚が神の聖旨であるならば、その結婚すべき配偶を、神は必ず人々のために備へて下さるに相違ありません。アブラハムの僕も信仰の篤い人でありましたので、この事について

神の御導をひたすら願ひました。

「我今日井に至りて謂けらくわが主人アブラハムの神エホバねがはくはわがゆく道に幸福を降したまへ 我はこの井水の傍に立つ水を汲にいづる處女あらん時我彼にむかひて請ふ汝の瓶より少許の水を我にのましめよと言ん 若我に答へて汝飲め我亦汝の駱駝のために汲んと言は是エホバがわが主人の子のために定たまひし女なるべし、我心の中に語ふことを終るまへにリベカ其瓶を肩にのせて出來り井にくだりて水を汲みたるにより我彼に請ふ我にのましめよと言ければ、彼急ぎ其瓶を肩よりおろしていひけるは飲めまた汝の駱駝にものましめんと是に於て我飲しが彼また駱駝にものましめたり、我彼に問て汝は誰の女なるやといひければミルカがナホルに生たる子ベトエルの女なりといふ是に於て我其鼻に環をつけ其手に手輪をつけたり 而して我伏てエホバを拜み吾主人アブラハムの神エホバを頌美たりエホバ我を正き途に導きてわが主人の兄弟の女を其子のために娶らしめんとしたまへばなり」(廿四

〇四十二—四十八)

### 三、娘の承諾

『この事はエホバより出づ』（廿四〇五十一）

と云つて、リベカの父と、兄とは直ちに承諾致しましたが、併し愈々婚約を成立せしめる前に、リベカを呼んで其の意見を問ひました。

『汝此人と共に往や』（廿四〇五十八）

リベカはまだイサクに會つた事はありませんでしたが、其の使者たる信仰あつき僕の話を聞き、又十匹の駱駝に積まれたる立派な贈物をも見て、これはエホバより出づる事であると信じた。めに、進んでこれを承諾したのであります。娘の承諾は大切なる條件であります。娘は親の私有財産ではありません。娘自身の生涯に關係する重大な問題でありますから、信仰ある両親等は決して心からの承諾のない娘を、強いて嫁がせるやうな事は爲ないであります。

### 四、新郎の愛

イサクは祈深い人でありましたからの父の僕がその使命のために正しく導かれんことを祈りました。或る夕暮に、彼が野に出でて黙想して居た時に、ふと向ふを見ますと駱駝が来て居りました。而して使命を果して歸れる僕に會ひ、すべてその語るところを聞き、イサクはリベカを母サラの天幕に伴ひまして、彼女を娶つて妻となし深くこれを愛しました。

## 第二十二章

参照 創世記第二十五章

### 家督權を輕視せるエサウ

『かくて臨月みちて見しに胎には孿ありき。先に出たる者は赤くして體中衷の如し其名をエサウと名けたり、其後に弟出たるが其手にエサウの踵を持ち其名をヤコブとなづけたり、リベカが彼等を生し時イサクは六十歳なりき。茲に童子人となりしがエサウは巧なる獵人にし

て野の人となりヤコブは質樸なる人にして天幕に居ものとなれり。イサクは塵を暗によりてエサウを愛したりしがリベカはヤコブを愛したり。茲にヤコブ羹を煮たり時にエサウ野より來りて憊れ居りエサウ、ヤコブにむかひ我憊れたれば請ふ其紅羹其處にある紅羹を我にのませよといふ是をもて彼の名はエドム(紅)と稱らるヤコブ言けるは今日汝の家督の權を我に鬻れ、エサウいふ我は死んとして居る此家督の權をヤコブに鬻ぬ是に於てヤコブ、パンと扁るは今日我に誓へと彼すなはち誓て其家督の權をヤコブに鬻ぬ是に於てヤコブ、パンと扁豆の羹とをエサウに與へければ食且飲て起て去り斯エサウ家督の權を藐視したり(廿五〇

#### 廿四—卅四)

イサクはりベカを深く愛しましたが、結婚後二十年に至るも未だに一子をも與へられませんでしたので、イサクは神に祈願しました。而してその願ひが聽かれりベカは妊娠致しました、その子が胎内で争ふやうに覺えましたので、彼女は不審に思ひ、その理由を神に尋ねました。エホバは、

『二つの民汝の腹より出て別れん一の民は一の民よりも強かるべし大は小に事へん』(廿五〇



## 廿三)

と言はれました。やがて産れ出でし子は双生兒でありました。先に生れた方の子は色赤く、毛深く、毛衣のやうな子供でありまして、その名をエサウ(赤い)と付けました。次に弟が生れましたが、その手に兄の踵を握つて居りましたので、ヤコブ(推除者)といふ名をつけました。

此の二人は成長するに随ひ、其の性質が全然異つて居りました。兄のエサウは獵の名人で、毎日常幕を出ては野に行きました。彼は其の地方の獸の通る場所や、其の穴や隠れ家などをよく知つて居りました。そして屢々父イサクのために鹿を獵しました。其の邊りに住むカナン人等はこの獵人なるエサウを愛しました。弟のヤコブは質樸な人で、母と共に天幕に居りましたので、リベカはヤコブを愛してをりました。

## 一、家督權の賣買

或る日弟のヤコブが羹を煮て居りました處へ、エサウが疲れ果て、野から歸つて來ました。而してヤコブに『我働いたれば請ふ其紅羹其處にある紅羹を我にのませよ』と言ひました。ヤ



コブはこゝに、『今日汝の家督の權を我に鬻れ』といふ要求を出したのでありましたが、エサウは、『我は死んとして居る此家督の權我に何の益をなさんや』と言ひ、自らその家督の權を輕んじました。日本に於ては家督の權は非常に重んぜられて居ります。家柄、祖先、禮拜の道具、墓地、財産の分前等は皆その中に含まれて居ります。ユダヤ人にはそれら以上になほ、神の特別の祝福が長子の上に與へられる事となつて居たのであります。アブラハムの家には神の偉大なる契約、即ち『大なる國民となり、一の國を與へられ、而して萬民の救主が其の裔より出づる』といふ約束が與へられて居りました。而して當然エサウは此の偉大なる契約の相續者でありました、アブラハムの神、イサクの神と稱へられると同様に、エサウの神とも稱へられる筈でありましたのに、彼はこの尊き家督の權を輕視して、たゞ羹一杯のためにそれを弟に賣つてしまつたのであります。

## 二、家督權を賣りし理由

エサウは長子でありながら、何故かくの如く自己に不利益な賣買をするやうになつたのであ

りませうか。元來人間はこの時のエサウのやうに、それ程容易く大切なる權利を放棄し得るものではありませんが、然しある場合には、その精神の根柢に變化を來したがために斯かる失敗に陥るのであります。エサウは生來人に好かれる質で、身體の壯健な、獵好きな、そして毛深い所謂男らしい人でありました。さういふ質の人の往々にして陥る誘惑は恐ろしいもので、彼等は注意しないならば動物的な性格と化し易いのであります。エサウは實際この時動物化されてゐたのであります。空腹が彼をして動物たらしめ、吠える獅子、飢ゑたる狼の如くならしめました。斯かる状態に陥つた場合、人間は空腹を満たさんが爲めには、財産でも、家でも、子供でも、職でも、希望でも、何の選ぶところなく賣り拂ひます。腓立比書に『彼等の終は滅亡なりおのが腹を神となし己が恥を光榮となしたゞ地の事のみを念ふ』(腓三〇十九)とあります。かくの如き人々は、目の前の慾のために先を見る事が見出されません。後はどうでもよい、唯其の時、其の瞬間さへ良ければよいと考へます。『手にある鳥は林の中の鳥に優る』といふ諺は、かゝる人々の心持を言ひ表はしたものであります。エサウも亦かくの如き精神状態に陥つたために、尊ぶべき家督權を輕んじてこれを賣りはなす様な結果となつたのであります。

### 三、エサウの將來

『エサウ食且飲て起て去り』とある如く、エサウは其の時、感覺が鈍くなつて居りましたので、自身の上に享けた損害を急には覺りませんでした。が、然し後に追々その大なる損失を悟るやうになつた時には、自暴自棄に陥るのが當然であります。エサウは起つて去りました。それより後は、彼は父の家の楽しみよりもヘテ人との交際を望みました。ヘテ人は神を知らず、此の世限りの生活をする人々であります。エサウは自分がイサクとリベカの長子である事、又アラハムとサラの孫である事などは最早念頭になく、アブラハムの美しい信仰はエサウに何等の感化をも及ぼして居りませんでした。彼には信仰もなく希望もありません。而してヘテ人の若者等と共に魚釣りや鹿狩りをなし、又夜はヘテ人の女達と躍りなどしてうか／＼と日を送るうち、彼は早や四十歳になりました。やがて彼は妻帯せんとし、ヘテ人に勧められたのでありませう。遂にヘテ人の娘ユデテと、バスマテの二人を妻に娶りました。彼の如き性情の人は二人の妻を要したのであります。

『彼等はイサクとリベカの心の愁煩となれり』（廿六〇卅四）

かくてイサクとリベカの家庭の圓滿はエサウの爲めに破られました。

我等基督者の家督權は、即ちキリストの救ひ、父の恵み、聖靈の喜び、神の約束、永遠の聖國であります。而してまた私共の嗣業は、安息日、聖晚餐、聖徒の交際、社會の奉仕、世界の指導であります。私共は決してエサウの如く、この聖く尊き信徒としての家督權を輕んずるやうな事があつてはなりません。

『彼らが遭へる此等のことは鑑となれりかつ末の世に遭へる我らの訓戒のために録されたり』

（哥前十〇十一）

## 第二十三章

参照 創世記第二十七章

### 和合無き家庭

「イサク老て目くもりて見るあたはざるに及びて其長子エサウを召て之に吾子よといひければ答へて我此にありといふ イサクいひけるは視よ我は今老て何時死るやを知らず 然ば請ふ汝の器汝の弓矢を執て野に出でわがために麴を獵て わが好む美味を作り我にもちきたりて食はしめよ我死るまへに心に汝を祝せん イサクが其子エサウに語る時にリベカ聞たりエサウは麴を獵て携きたらんとて野に往り 是に於てリベカ其子ヤコブに語りていひけるは我聞ゐたるに汝の父汝の兄エサウに語りて言けらく 吾のために麴をとりきたり美味を製りて我にくはせよ死るまへに我エホバの前にて汝を祝せんと 然ば吾子よ吾言にしたがひわが汝に

命ずるごとくせよ 汝群畜の所にゆきて彼處より山羊の二個の善き羔を我にとりきたれ我之をもて汝の父のために其好む美味を製らん 汝之を父にもちゆきて食しめ其死る前に汝を祝せしめよ ヤコブ其母リベカに言けるは兄エサウは毛深き人にして我は滑澤なる人なり 恐くは父我に捫ることあらん然らば我は欺く者と父に見えんされば視をえずして反て呪詛をまねかん 其母彼にいひけるは我子よ汝の詛はるゝ所は我に歸せん只わが言にしたがひ往て取來れと 是において彼往て取り母の所にもちきたりければ母すなはち父の好むところの美味を製れり』(廿七〇—十四)

イサクが花嫁リベカを迎へる時の美しい記事を読むならば、此の新郎新婦は世にも稀なる圓滿な家庭をつくるであらうと、誰れも期待せざるを得ないであります。然るに此の第二十七章の記事によれば、意外にもその家庭内の和合を欠いた有様を見るのであります。結婚の時は未だその新家庭が如何なるものとして營まれてゆくかは、明言し難い場合が多い様に思はれます。當然圓滿である筈と思はれた家庭が、不和な状態に陥つてゆくのを度々見る事があります。イサクの家庭も亦この例にもれずして、不公平、争論、家督權の賣買、夫婦間の不和、長

男の不相應なる結婚、姑と嫁の不調和、母の溺愛、父の老衰、妻の虚偽、相續者の狡猾、兄の嫉妬、盲目の父の死の豫期、妻の寂寥等がすべてこの不幸なる家庭を襲ひました。『此等のことは我らの訓戒のために録され』てあるのでありますから、私共はこの家庭不和の理由を考究して、自身等の家庭生活完成の資と致しませう。

## 一、イサクの老衰

モリヤの山の祭壇に犠牲として献げられた従順なイサクが、若し其の時に燔祭として實際殺されたとしたならば、より以上に彼の名聲は高まつたかも知れません。若し然らば彼は世界の悲劇中の悲劇の主人公として人々に知られたであります。然し彼は事實その様に早世はせずして長年月を生き永らへましたので、それだけなほ多くの犠牲を拂ふべき身となつたのであります。

賢いリベカと結婚して以來、彼は餘りに柔弱にながれたものではありますまいか。『イサクは塵を嗜によりてエサウを愛したりしがリベカはヤコブを愛したり』といふ言葉は恰も塀の隙間の



やうなもので、これを通して私共は其の家庭内の状態を判然と見ることが出来ます。家の内には剛の者のエサウ、鹿を賞味する父イサク、依怙最負する母のリベカ、狡猾な愛子ヤコブ等の團樂を見ます。柔弱な父イサクはあまり運動もせず、悴の獵して呉れた鹿を嗜んでは屢々胃病を病み、自然不規律になり、元氣乏しく、早く老衰するやうになつたのでありませう。彼の如き人の楽しみは美味を食ふ事にあります。鹿を食べさせて貰へば祝禱もしようといふのであります。『視よ我は今老て何時死るやを知らず 然ば請ふ汝の器 汝の弓矢を執て野に出でわがために麋を獵て、わが好む美味を作り我にもちきたりて食はしめよ我死る前に心に汝を祝せんと』イサクは言ひました。諺言にも『酒にふけるものと肉をたしなむものとは貧しくなる』といふ言葉があります。

## 二、嗅天下の家庭

リベカはヤコブを愛して居りましたので、夫イサクがエサウに話して居た言葉聞き、早速ヤコブを呼びよせまして、『汝の父汝の兄エサウに語りて言けらく 吾ために麋をとりきたり美



味を製りて我にくはせよ死るまへに我エホバの前にて汝を祝せんと 然ば吾子よ吾言にしたがひわが汝に命することくせよ 汝群畜の所にゆきて彼處より山羊の二個の善き羔を我にとりきたれ我之をもて汝の父のために其好む美味を製らん 汝之を父にもちゆきて食しめ其死る前に汝を祝せしめよ」と言ひました。若しリベカが夫を眞に尊敬し、信任して居たならば、かゝる卑屈な策略には出なかつた筈でありませう。併し彼女は幾年かの間に主人に對する従順な性情を失ひ、いつかかくの如き偏狹な精神にとらへられて居たのであります。この事實に對してリベカは充分責任を負ふべきでありますが、然しイサクにも弱點がないとはいへません。その双生の兄弟の誕生に際し、神が『大は小に事へん』と告げ給うた事をイサクは知つて居りました、またエサウがヤコブにその家督權を賣つたことをも承知して居りましたのに、なほ彼は無理にエサウを相續者としようとしたのであります。而してリベカはこれに對抗し、ヤコブにエサウの着物を着せて夫を欺きました。若しリベカがかゝる場合にもなほ確く信仰に立つてゆく婦人であつたならば、此の事のためひたすら神の御助けを仰ぎ、神によつて救ひを得たに相違ないのであります。この時彼女は『神は自ら助くるものを助く』との主義をとり、善い目

的のためならば悪しき手段に出づるも止むを得ぬと考へて、この不名譽なる詐欺的手段を敢て用ひたのでありました。

『妻たる者よその夫に服へ』(西三〇十八)

### 三、ヤコブの狡猾

ヤコブはその敏捷なる性格に於て母の弟子でありました。彼はエサウの美服を身に纏ひ、山羊の子の毛皮でその手と頸の滑かな部分を被ひ、母の製つた料理とパンとを携へて父の前にゆき、エサウの聲を真似て巧に父を欺きました。ルーテルはこの場合の光景を想像して、「余であれば震へて其の皿を落したであらう」と言ひました。然し狡猾なるヤコブは身をも聲をも震はせず、疑へる父に向ひ、

『我は汝の長子エサウなり』(廿七〇十九)  
と平然として答へました。父が

『吾子よ近くよりて我に接吻せよ』(廿七〇廿六)

と云ひますと、ヤコブは進みより鐵面皮にも父に接吻しました。而して父はエサウの衣の香を嗅ぎ、次の如き言葉を以て彼に祝福を與へました。

『ねがはくば神天の露と地の朕および饒多の穀と酒を汝にたまへ 諸の民汝につかへ 諸の邦汝に躬を鞠ん』(廿七〇廿八、廿九)

#### 四、エサウの悔み

ヤコブが父から祝福をうけて退いた後に、エサウが獵から歸り、美味を製つて父の許へ持つて行きました處、意外にも父はいたく戰慄して、今既に先に來れる者を祝した後である、彼がまことに祝福を得るであらうと告げました。エサウは父の言葉を聞き、大いに歎き、

『父よ我を祝せよ我をも祝せよ』(廿七〇卅八)

と泣きくづれました。弟ヤコブは實にその名の通り推除者でありましたが、しかしエサウ(赤い)にも悟るべきところがあります。彼は紅き美味一杯でその相續權を賣つたではありませんか。一度賣つてしまへば永久に買ひ戻す事の出來ぬ恩恵があります、エサウの家督權もその一

つでありました。

力めて凡ての人と和ぎ自ら潔からんことを求めよもし潔からずば主を見ること能はずなんぢら憤め恐らくは神の恩恵に至らぬ者あらん恐らくは苦き根はえいで、汝らを惱まし多くの人これに由りて汚されん恐らくは淫行のもの或は一飯のために長子の特權を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん汝らの知ることく彼はそのうち祝福を受けんと欲したれども棄てられ涙を流して之を求めたれど回復の機を得ざりき』(來十二〇十四—十七)

## 第二十四章

参照 創世記第二十八章

### ヤコブの夢

父のイサクが次男のヤコブを相續人として祝福した爲めに、エサウはヤコブを憎みました。

而して彼は遠からず、父の死期を待つてその喪の日の過ぎ次第、ヤコブを殺さうと心に決して居りました。母のリベカはそれとなくこれを知り、ヤコブの身に危機の迫つて居ることを深く憂ひ、彼を呼びよせましてハランに居る伯父ラバンの許に一時逃れて居るやうにと勤めました。而して彼女はまた夫イサクに向ひ、

「我はヘテの女等のために世を厭ふにいたるヤコブ若此地の彼女等の如きヘテの女の中より妻を娶らば我身我るも何の利益あらんや」(廿七〇四十六)

と訴へましたので、イサクはヤコブを呼び、母の里なるハランにゆき妻を娶るやうにと命じました。

願くば全能の神汝を視み汝をして子女を如く得せしめ且汝の子孫を増て汝をして多衆の民とならしめ 又アブラハムに賜へんと約束せし祝を汝および汝と共に汝の子孫に賜ひ汝をして神

がアブラハムにあたへ給ひし此汝が寄寓る地を持たしめたまはんことを」(廿八〇三、四)

右は父がヤコブを送る時の祝福の言葉であります。

斯くてヤコブは兄エサウの怒りを避け、且つは妻を娶らんがためにハランの方へ起きまし

た。二三日の旅路の後、或る夕暮に石を枕に臥して眠るうち、彼は次の様な夢を見ました。

見ると其處に、梯子が地に立つて居り、その頂が天にまで達して居ります。又神の使達がその梯子を昇り降りして居ります。而してエホバなる神がその頂に立たれ、

『我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり汝が偃臥ところの地は我之を汝と汝の子孫に與へん 汝の子孫は地の塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし又天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん また我汝とゞもにありて凡て汝が往ところにて汝をまもり汝を此地に牽返るべし我はわがかりし事を行ふまで汝をはなれざるなり』(廿八〇十三—

## 十五)

との御恵の言葉をヤコブに與へ給うたのであります。

かゝるさすらひの旅路にあるヤコブにとつて、これほど尊い適切な默示はなかつたでありませう。彼は旅の空にしみく、孤獨を感じて居ましたが、此の時全能の神が偕に在し給ふことを知りました。相談相手のない事を心淋しく思つて居りました折から、神は彼に語りたまひ、援助者もなきさすらひ人であつた彼の許へ、天の使たちが降されました。將來は全く暗黒である

と憂ひに沈める時、神は先祖のアブラハムやイサクに與へたまひし偉大なる約束を繰返して、ヤコブにも語り告げ給うたのであります。即ちそれは次の四項にわたる神の御約束であります。

(一) 國を與へ給ふ事

(二) 子孫を大なる國民等と成し給ふ事

(三) 萬國民の救ひと福祉とがイスラエル國民より出づべき事

(四) イスラエル國民は何處へゆくとも此の約束の成就するまでは神借にいまし遂にユダヤの國

へ彼等を導き返し給ふべき事

ヤコブの夢の要點は、梯子が地に立ち、其の頂が天に達して居る事、及び神の使たちがそれを昇り降りしてゐる事でありませう。これには深い意義があります。天と地との間に梯子が架かつて交通が出来、神の使たち、神の僕たち、神の子供たちがこれを昇つたり降りたりしてゐるのであります。昇るのは、梯子の上に在すエホバなる神の御許へ地上の人々の願ひをたづさへてゆくためであり、降るのは、神の恵みと賜物とを人々の許へもたらすためであります。その



梯子は何と尊い梯子ではありませんか。天と地との間は左程遠くはありません。その距離は短いのではありませんが、然し若しその梯子がかゝつてゐなければ天にいます神の御許へ昇る事が出来ません。その梯子こそ天地間の交通に缺くべからざるものであります。

ヤコブがこの夢を見てより一千八百年の後に當り、主イエスはこの梯子の意味を解かれました。

「ピリポ、ナタナエルに遇ひて言ふ「我らはモーセが律法に録しゝところ預言者たちが録しゝ所の者に遇へりヨセフの子ナザレのイエスなり」ナタナエル言ふ「ナザレより何の善き者がいづべき」ピリポいふ「來りて見よ」イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見これを指して言ひたまふ「視よこれ眞にイスラエル人なりその衷に虚偽なし」ナタナエル言ふ「如何して我を知り給ふか」イエス答へて言ひたまふ「ピリポの汝を呼ぶまへに我なんちが無花果の樹の下に居るを見たり」ナタナエル答ふ「ラビなんちが神の子なり汝はイスラエルの王なりイエス答へて言ひ給ふ「われ汝が無花果の下にをるを見たりと言ひしに因りて信するか汝これよりも更に大なる事を見ん」また言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ天ひらけて人の子



のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」(約一〇四十五—五十一)

主イエスの解釋に依れば、天にいたるこの梯子は即ち主イエス、キリスト御自身であります。『天ひらけて』とは天への梯子のかゝること、天への道の開かれる事でありまして、その梯子なる人の子の上に神の使たちが昇り降りするのを見るであらうと主は告げられました。

愛する兄弟姉妹よ、諸氏は自分等がこの神の使達である事を知つて居られますか。主イエス、キリストなる此の梯子を昇り降りして天地間の用務を司ることは、信者達のつとめであり  
ます。

全能なる獨りの神の存在を認めて居る人々は多くありますが、未だ神の許へ到る道を知りません。イエス、キリスト無しにも神に到る事が出来ると考へる人もありますが、それは梯子無しに天へ昇らんとするものであります。

『イエス彼に言ひ給ふ』「我は道なり眞理なり生命なり我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし」(約十四〇六)

ヤコブは目醒めて、

『誠にエホバ此處にいますに我しらざりき 是即ち神の殿の外ならず是天の門なり』(廿八〇)

十六、十七)

と絶叫しました。主イエスの御足の許は即ち神の殿、天の門であります。此の梯子を昇り降りして居る信者等の心は神の殿、天の門であります。それらの人々にはキリストによつて天に通ずる電話機が備へられてあります。否、電話のみならず、梯子が架けられてありますから、彼等は何時でも自由に神の御許へ往くことが出来ます。

ヤコブはこの夢の意味をそれと悟つた時、その石を立て、祭壇となし、膏をそそぎ、神を拜し、且つその生涯を通じて神に十分の一の献物をなすといふ誓ひを立てたのであります。

## 第二十五章

参照||創世記第二十九章―第三十章

## 一、ヤコブのローマンス

淋しき異國の一人旅をつゞけてゐたヤコブが、一夜天と地とを通ずる梯子の夢を見て、神が彼と偕にいまし給ふ事を知つた時の喜悅はどんなでありましたでせう。彼はその翌日元氣よく出立して旅をつゞけました。やがて伯父の住む東の國へ到着してみますと、其處の野に祖先の掘つた井戸があり、そのほとりには三つの羊の群が臥して居りました。又その井戸の口には大きな石が置かれてあつて、羊の群が皆あつまつた時にその石をまろばして水を飲ませてやるのであります。

ヤコブは早速羊飼たちに伯父ラバンの事を尋ねてみますと、親切な彼等は丁寧に話してくれました。「此處は伯父上ラバンの住む土地です。伯父様は至つて御達者です。向ふを御覽なさい、ラバンの二番娘ラケルが伯父上の羊を連れて來て居ります」と言はれて、ヤコブは彼等の示す方を見ますと、成程澤山の羊を連れて井戸に近づいて來るラケルの姿が見えました。ヤコブは初對面の従妹とその群とが近づいた時、まづ井戸に進み寄り、大きな石を轉ばして羊の群

を飲みました。

長い一人旅の後、今近しい親族に出遇つた瞬間、ヤコブのよろこびは如何に深いものでありましたでせうか。彼は従妹ラケルに接吻し、歡喜のあまり涙ながらに自分を紹介致しました。ラケルは意外な人に遇ひ、驚きと喜びとにみたされた事でありませう。彼女は家へ走り歸つて父にその事を告げました。父は聞いて、人情に冷たいラバンとはいへ、流石に懐かしい妹の子ヤコブが遙々訪ねて來たことを知るや、走り出て彼にあひ、あたゝかく彼を迎へ入れました。かくてヤコブは客として一ヶ月程の間待遇される事になり、その間には母リベカの事、父イサクの消息などを語りひつゝ楽しい日を送りました。

## 二、ラバンの惡竦手段

ヤコブの母リベカはその夫を欺く程狡猾な人で、ヤコブに父を欺す事を教へたのも彼女でありました。しかしその兄のラバンは、また彼女よりも更に狡猾な人でありました。而してこゝに、伯父ラバンと甥ヤコブとの交はりも亦、遂に欺し合ひの交際となつてしまつたのでありま

す。「ダイヤモンドはダイヤモンドを切る」、「ギリシヤの武士は偶々ギリシヤの武士と撃ち合ふ」、「賣手は賣られた」、「欺し手は欺された」などいふ諺があります。パウロはこの理を説いて「神は侮るべき者にあらず人の播く所はその刈る所とならん」(加六〇七)と教へて居ります。

狡猾なるヤコブをその性癖より救はんがために、神は一層狡猾なる伯父ラバンの許に送り給ふたのであります。神は偶像に捉はれたるイスラエル國民を救はんとして、一層偶像にみちたるバビロン帝國へ捕虜として送り給ひし事もあります。ヤコブの如き狡猾な人が伯父ラバンには十度も欺されました。最早耐へがたいと思ふほどに欺かれた事々の中、最も惡辣な手段にかけられたのは彼の結婚當日の事でありました。

客として待遇された一ヶ月が過ぎて後、或る日ラバンはヤコブに向つて、

「汝はわが兄弟なればとて空く我に役事べけんや何の報酬を望むや我に告よ」(廿九〇十五)

と言ひました。ラバンには二人の娘があつて、姉はレア、妹はラケルといひます。レアは目が弱くありましたが、ラケルは顔立の美しい娘でありました。ヤコブはラケルを愛して居りました。

たので、伯父に答へて云ふには、

『我汝の季女ラケルのために七年汝に事ん』（廿九〇十八）

と。ラバンはこれを聞いてよろこび、他人に娘をやるよりも、甥なる彼に與へる方がどれほど善いかしれないと言つて承諾しましたので、愈々ヤコブは七年間ラケルのために勤める事となりました。ラケルを愛して居るヤコブには、七年の勤めも長いとは思はれません、たゞ日數をかぞへて結婚の日を待ち望んで居りました。

月日が經つて勤めの年限が終へた時、彼は愛するラケルとの結婚を要求しますと、伯父は承知して種々結婚式の準備をなし、多くの人々を招いて宴を催しました。その式日の夕刻に、花嫁はスリヤ人の習慣に従ひ顔覆ひをかけてヤコブの許に連れられました。狡猾な伯父はラケルの代りに姉のレアを彼に與へたのであります。

その翌日の事であり、ヤコブは事の以外に驚きました、花嫁は自分の愛するラケルではなく目の弱いレアであつたからであります。彼は心中怒りに燃えつゝ伯父に向ひ、

『汝なんぞ此事を我になしたるや我ラケルのために汝に役事しにあらすや汝なんぞ我を欺く』

や』(廿九〇廿五)

と呟きました。然しながら彼もまた、自分が年老いたる父イサクを欺いて、兄の祝福を盗み取つた事を思ひ起した時、「あゝこれは罰である」と心付き、自分の卑しき心根を反省して悔んだことでありませう。其の時ラバンは言譯して、

「姉より先に妹を嫁しむる事は我國にて爲ざるところなり 其七日を過せ我等是をも汝に與へ

ん 然ば汝是がために尙七年我に事へて勤むべし」(廿九〇廿六、廿七)

と云ひましたので、ヤコブはこれを承諾して、一週間の後にはラケルをも妻として貰ふ事となつたのであります。

三、子を産む競争

斯くして一人の夫に二人の妻が出来ました。これは勿論善い事ではありません。ヤコブの實任といふよりも寧ろ狡猾なるヤコブ自身の收獲でありました。又伯父のラバンは二人の娘に一人づつの侍婢をも與へました。ヤコブはレアよりもラケルを愛しましたが、神は慰めなき者を



かへりみ給ひレアの、嫌はるゝを見てその胎を開き給ひました、ラケルには子供を與へられませんでしたので、こゝに二人が子を産む競争をはじめた事を聖書に詳しく記されてあります。二人はなか／＼負けず嫌ひで、自分達に子なき場合にはその、侍婢を夫に與へてなりとこれを得んとする程激しい競争を致しました。結局ヤコブには十二人の息子が與へられ、その十二人はイスラエル國民の分派の祖先でありますから、こゝに彼等の名を掲げてみませう。

レアの息子（六人）

ルベーン

シメオン

レビ

ユダ

イツサカル

ゼブルン

レアの侍婢ジルバの息子（二人）

ガ  
ド

ア  
セ  
ル

ラケルの息子(二人)

ヨ  
セ  
フ

ベニヤミン

ラケルの侍婢ビルハの息子(二人)

ダ  
ン

ナ  
フ  
タ  
リ

#### 四、ヤコブの狡猾なる返禮

二人の妻のために十四年間勤めたヤコブは、伯父に別れて國へ歸らうと決心しましたが、狡猾なる伯父はなほも彼を止めやうと企てました。彼はヤコブに向つて、「若しお前の意にかなふならば留まつてゐて下さい。私はエホバがお前のゆゑに私を恵んで下さつた事を知りました。」

何でも欲しいものがあるならば上げるから言つて下さい」と云つて引止めたのであります。ヤコブは「それはたしかに私が来てから貴方の財産は殖えました、神様はあなたを祝われました。しかし私は何時迄も伯父様のためにばかり働いても居られまさん。貴方にばかり勤めてゐたのでは何時になつたら私の財産が出来ませう。私は早く一家をたてなければならぬと思ひますから」と返事を致しました。ラバンが然らば何を望むかと重ねて尋ねましたので、ヤコブは考へて、「何も他に望みといつてはありませんけれど、斯うして頂くならばなほ私は六ヶ年勤めます。それは今日私が貴方の群の中を通つてみて、黒や斑點のものだけを私に取らせて頂きませう、そしてこれより生れる羊の子、山羊の子を二人で分けませう。その他は凡て貴方の所有となさつては如何ですか」と相談しました。ラバンはそれを承諾しましたので、彼は二つに分けたその群を連れて三日路を隔てた場所にゆき、其處でそれを飼ふ事に致しましたが、彼はこゝにまた巧みな手段を用ひました。即ち家畜の強いものが孕む時には斑や點なる兒として産ませ、弱いものは伯父のものとなるやう計らひましたので、自然伯父の所有は次第に減つてゆきました。かくてヤコブは非常に豊かになり、伯父よりも多くの家畜、僕婢、及び駱駝、

驢馬を所有するやうになりました。

狡猾な性情は容易に改められるものでありません。神は祝み給はんとするものを富ましめたまふのでありますから、その様な卑しき企圖に出でずともよかつたのであります。ヤコブはまだ――聖徒にはなれません。彼は尙ほ一層苦しき經驗を経て後に、漸く神の王子（イスラエル）となる事が出来たのであります。

## 第二十六章

参照 創世記第三十一章

### ヤコブの歸國

#### 一、エホバの導き

神の恩恵によりヤコブは富裕な身分となり、多くの家畜、婢僕、駱駝、及び驢馬の所有者と

なりましたが、或る日の事ふと彼は、伯父ラバンの息子等が不平を言つて居るのを耳にしました。

「ヤコブわが父の所有を盡く奪ひ吾父の所有によりて此榮光を獲たり」(卅一〇一)

と彼等は父に訴へてゐたのであります。そのために伯父のヤコブに對する待遇が急に變つて、彼を酷く扱ふやうになりました。彼は十度もその約束を變更しましたが、然し神はかはる事なくヤコブを富ませ給ひましたので、彼は損害を受けはしませんでした。或る晩エホバは夢の中にヤコブに現れて

「我ラバンが凡て汝に爲すところを驗みるに我はベテルの神なり汝彼處にて柱に膏を沃ぎ彼處にて我に誓を立たり今起て斯地を出て汝の親族の國に歸れ」(卅一〇十二、十三)

と告げられました。それは天地間の梯子の上に残れ給ひし神に、彼が立てたる二十年前の誓を意味してをります。そこで彼は妻のラケルとレアを野に呼び出して國へ歸る事につき相談しました處、彼等は直ちに同意して、

「都て神の汝に言たまひし事を爲せ」(卅一〇十六)

と答へました。

## 二、無斷の出立

茲にヤコブは歸國せんとして、伯父のラバンに相談なしに出立致しました。所有物が人々を支配する場合には、事の成行を見ることは有り勝ちなものであります。ラバンは慾心のために、ヤコブがその財産を持つて歸國する事を決して許しません。ヤコブはそれを知つてゐながら自分の獲た多くの所有を悉く持つて出立と企てたために、伯父に相談無しで忍んで出かけたのであります。ヤコブの出た事が三日の後、伯父の耳に入りまして、勿論彼は大に立腹しました。而して早速人々を引連れその後を追ひかけて、七日路程の旅の後ギレアデ（國境）の山で遂に彼に追ひ着きました。ラバンは怒りに驅られ、腕力を以てなりとヤコブの所有と其の妻子等を取返してかへるつもりでありましたが、この時神が夜の夢にラバンに臨み、

『汝慎みて善も惡もヤコブに道なかれ』（卅一〇廿四）

と告げ給うたのであります。

ギレアデの山々は五千尺程の高さがあり、其のあたり一體は綠色濃く樹木が繁茂して居りまして、砂漠とは異り非常に趣深い景色でありました。その高い山の上にヤコブは五つの天幕を張つて居たのであります。ラバンも亦その兄弟達と共に近くの山に天幕を張り、直ちにヤコブに談判を持ちかけ、彼がひそかに逃れ出た事を責めました。

『何故に汝潜に逃さり我をはなれて忍いで我につげざりしや我歡喜と歌謠と譏と琴をもて汝を送りしならんを 何ぞ我をしてわが孫と女に接吻するを得ざらしめしや汝愚妄なる事をなせり 汝等に害をくはふるの能わが手にあり然と汝等の父の神昨夜我に告て汝つゝしみて善も惡もヤコブに語べからずといへり』(卅一〇廿七—廿九)

かゝる言葉を伯父の口から聞いた時、ヤコブも大分激した氣分でその談判に應答し、自分が十四年間二人の娘のため、六年間を群のために苦勞して勤めた事を述べ、

『我何の愆あり何の罪ありてか汝火急く我をおふや 汝は十次もわが價を易たり 若わが父の神アブラハムの神イサクの畏む者我とともにいますにあらざれば汝今必ず我を空手にて去しめしならん神わが苦難とわが手の勞苦をかへりみて昨夜汝を賣たまへるなり』(卅一〇卅



六、四十一、四十二)

と力説りきせつしました。親戚同志しんせきどうしの不和ふわは心苦しいものであります。併しとも双方さうほうに希望きぼうがあるならば、黙もくして居ゐるよりも却かえてありのまゝに打解うちあけて、各自かくじの立場たちばを明あかにしておく方がよい事ことがあります。『雨降あめふつて地固ちかたまる』といふ譬たとへもあるではありませんか。黙もくして心中しんちゆう恨うらんだり憎にくんだりするよりも、所謂いはゆるん江戸えどつ兒肌こはだの遣やり方かたの方がよろしいと思おもはれます。

三、平和の條約

程ほどなく伯父おぢの心こころも和やほいで來きたやうであります。

『女等むすめらはわが女子等むすめらはわが子群こむれはわが群汝むねが見みる者ものは皆みなわが所屬もなり我われ今日けふ此このわが女等むすめらとその生うたる子等こらに何なにをなすをえんや 然さば來きたれ我われと汝なんぢ二人ふたり契約けいやくをむすび之こを我われと汝なんぢの間まの證憑あかしとなすべし』(卅一〇四十三、四十四)

この言葉ことばを聞きいてヤコブは喜よろこんで同意どういしました。而しかして其處そこに大おほきな石いしの柱はしらを建たて、石いしを積つんで塚つかを造つくり、丁度ちやうど今日こんにちアラビヤ人じんが爲するやうに、此このスリヤ人じんラバンとイスラエル人じんヤコブと

が、一同と共に、その石塚の上で會食したのであります。彼等は此の石塚を「證憑の塚」と名付けました。斯くて彼等は條約を結び、

「我儕が互にわかるゝに及べる時ねがはくばエホバ我と汝の間を鑿みたまへ 我この塚を越て汝を害せじ汝この塚この柱を越て我を害せされ アブラハムの神ナホルの神彼等の父の神われらの間を鞫きたまへ」(卅一〇四十九、五十二、五十三)

と互に誓ひました。かくて彼等は楽しく食事をなし、その山で一食を明明し、平和の音信をつたふる朝日とともに、ラバンはその孫と娘とに接吻し、これを祝して後別れて歸途につきました。これは即ちスリヤ人とイスラエル人との分家の歴史であります。

所有の爲めに争ふよりも、斯く境界を明かにたてゝ互に獨立する方が、遙かに優つて居ります。それは國家に於ても家庭に於ても同様の理であります。

## 第二十七章

## ヤコブの改心

### 一、神の二營

「茲にヤコブその途に進みしが神の使者これにあふ ヤコブこれを見て是は神の陣營なりといひてその處の名をマハナイム（二營）となづけたり」（卅二〇一、二）

神はヤコブを守らんがためにその使者を送られたのでありますから、彼は全く安んじてその途にすゝむ筈でありましたが、然しなほこの時の彼にとつて、全然無抵抗主義をとり、唯神にのみ頼る事はむづかしいことでありました。

使徒ペテロが劍を抜いて大祭司の僕の耳を切り落した時、「主イエスは彼を制して、『なんぢの劍をもとに收めよすべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり我わが父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるゝこと能はずと思ふか』」（太廿六〇五十二、五十三）と言はれたではありませんか。

キリストの弟子たるものは、ピストルを投げ棄てドスを海中に投じて、たゞ神の近衛兵に頼りさへすれば充分な筈であります。

## 二、困つた通信

ヤコブはその途次、兄エサウの許に先づ使者を送りました。その使者に言はせた言葉は、  
「汝の僕ヤコブ斯いふ我ラバンの所に寄寓て今までとどまれり 我牛驢馬羊僕婢あり人をつ

かはしてわが主に告ぐ汝の前に恩をえんことを願ふなり」と（卅二〇四、五）

と、謙遜して、又内心誇りをも感じつつ、兄に告げました。使者が歸つて来て、エサウが然らば四百人を従へてヤコブを迎へやうと云つたと傳へますと、急に大騒ぎになりました。「戦争、國交斷絶」といふ號外でも手にした時のやうに、ヤコブの心はおのゝき躍りました。

## 三、半身でももの救ひ

ヤコブは此の時神の送り給ひし「二營」に頼らず矢張り自身の狡猾に頼りすぎりました。當

然彼は懼れ、且つ苦しみました。遂に彼は考へた末、家畜と人々を二組に分けました。

『エサウもし一の隊に來りて之をうたば遣れるところの一隊逃るべし』(卅二〇八)

#### 四、祈り

『困つた時の神頼み』といふ諺があります、しかし全く祈らないよりもヤコブのやうに祈る事が出来れば、その方がどれ程幸であるかわかりません。今ヤコブの祈りを聴きませう。

『わが父アブラハムの神わが父イサクの神エホバよ汝嘗て我につけて汝の國にかへり汝の親族に到れ我なんぢを善せんといひたまへり 我はなんぢが僕にほどこしたまひし恩恵と眞實を一も受るにたらざるなり我わが杖のみを持てこのヨルダンを濟りしが今は二隊とも成にいたれり 願くはわが兄の手エサウの手より我をすくひいだしたまへ我彼をおそる恐くは彼きたりて我をうち母と子に及ばん汝は嘗て我かならず汝を恵み汝の子孫を濱の砂の多して數ふべからざるが如くなさんといひたまへり』(卅二〇九—十二)

實にうつくしい祈りであります。而も

神の御約束の想起

自己の恐怖の懺悔

神の恩恵に對する感謝

の言葉は人の心を動かさずには行きません。私はこの祈りの文章をつねに愛誦いたします。

「我わが杖のみを持って」と祈りの中にあります。ヤコブの最も大切な所有は、羊を飼ふためのこの一本の杖でありました。その杖一本を携へて故國を出た彼は、今神の恵みにより二群の富を得て歸らうとして居ります。おゝその杖よ。二十年前ベテルに於て梯子の夢をみた時にも、彼の枕邊に横たへられてあつたその杖。ラケルのために七年、レアのため七年、家畜のために六年をラバンに仕へて暮す間も、おそらく彼の慰めとなつたのはこの杖でありましたでせう。(事實は知りませんが或はこの杖は狩人なる兄エサウより貰つたものかも知れません。)兎に角此の杖は彼にとつて神の導き、神の恵みのしるしでありました、彼はそれを見る毎に、來し方の神の護りと恩恵とを想ひ起すのであります。

諸兄弟方にもまた同様に、何かヤコブの杖に相當するやうな、御恵を記念すべき品物がある

ことでありませう、母の寫眞、友人よりの衣類、父よりの時計など、それらはすべて人々にとつての尊い記念品であります。

#### 四、宥めの贈物

狡猾といふ捕虜より救ひ出される事は容易なことではありません。アコブは斯く祈りながらも、自ら巧みな策をめぐらして居りました。兄の怒りをなだめるために、五百五十頭の家畜を土産として贈りました。その贈り方も上手であります。十六節から二十節にその詳しい記事があります。

戦争よりも宥めの贈物は確かに優つて居ります。然し神はヤコブをして、自己の策略によつては約束の國に入らしめ給ひませんでした。神の國を繼ぐためには謀らむものは相應しくありませんので、神はこゝに自ら地上に降つて一つの仕事を爲し給ふたのであります。

#### 六、角力をとり給ふ神



『禮物おくりものかれに先さきちて行くゆ彼かれは其夜陣營そのよぢんえいの中に宿やどりしが 其夜そのよおきいで二人ふたりの妻つまと二人ふたりの仕女つかへおよび十一人じゅういちにんの子こを導みちびきてヤボクの渡わたりをわたれり 卽すなはち彼等かれらをみちびきて川かはを涉わたらしめ又またその有もる物ものを渡わたせり 而しかしてヤコブ一人ひとり遺のこりしが人ひとありて夜よの明あるまで之これと角力ちからくらす』(卅二〇)

## 廿一—廿四)

夜通よどろしその二人ふたりは角力つまぶをとりました。ヤコブは一生懸命ししょうけんめいであります。『我われを妨さまたげる者もの、一體たいこれは誰たれであらう。誰たれであらうとも約束やくそくの國くにに入るいる邪魔じやまをする者ものであれば、それさへ倒たふしてしまへば入いることが出来るこるに相違さうみない』と考かんがへましたが、なか／＼相手あひても強つよく倒たふれさうにもありません。遂つひに相手あひてがヤコブの髀もの樞骨つがひに觸ふれますと、その樞骨つがひがはづれ、その瞬間しゆんかんヤコブは覺ざとりました。『自分じぶんと今力競いまちからくらべする人ひとは主しゆであつたか、神かみであつたか』と。而しかして彼かれは祝福しゆくふくを乞こひました。神かみが御自身おんじしんを我々われらに紹介せうかいせられるためには、様々さまざまの道みちをとられます。この時ときヤコブには、斯かかる事實じじつのうちに顯あはたしたのであります。

メシヤなるイエスが目開めあきの人ひとの前に立たち、『汝なんぢは神かみの子こを信しんするか』と尋たづねられた時とき、その人ひとは知らずして、『主しゆよそは誰たれなるか我信われしんぜまほし』と叫こゑびました。『汝なんぢ彼かれを見みたり汝なんぢと語かたるもの

はそれなり」とイエスいひ給へば、「主よ我は信ず」と云つて彼はイエスを拜しました。これは主イエスの自己紹介でありましたが、ヤコブは彼の樞骨がはづれた瞬間その力競べする人が主であることを覺り、彼の心は見事に入れ代へられたのであります。彼はこゝに角力する事を止めて信賴する事を始めました。彼は自身の狡猾を捨て、神にすがつたのであります。

## 七、依頼るものは強し

角力を止めたヤコブは祝福を要求しました。神は始めて彼を祝し給ひ、こゝにヤコブ（推除者）はイスラエル（神の王子）と改名せられたのであります。

『是を以てヤコブその處の名をベニエル（神の面）となづけて曰ふ我面と面をあはせて神とあひ見てわが生命なほ存るなりと』（卅二〇卅）

『ヤコブ』は神の國に入る事を許されませんでした。『イスラエル』としての彼は約束の國に入る事が出来ました。我々もまた押除け、押分けて自分の力に頼ることをせず、『王子』として天に在す父より一切を繼承して神の、聖國に入りませう。

## 第二十八章

參照||創世記第三十三章—第三十五章

## 一、平和の問題

エサウは四百人を率ゐてヤコブをむかへました。二十年の歲月が流れても、彼の恨みは流れて去りませんでした。何としても戦争の外はないと心の中に決し、軍備はすでに整へられてありました。併し戦ひは一人では出来ません。何程戦ひを挑んでも、敵がこれに應じないならば戦争にはなりません。

ヤコブは兄エサウと戦ふ事はしまいと決して居りました。たとひどれ程の犠牲を拂つても決して戦争はせず、平和に事を濟ませやうと決心して居りました。彼は五百五十頭の家畜を五組に分けて兄に贈りその心を宥めました處、流石恨みにみちた頑迷なエサウの心も解かれ、ヤコ

ブが七度も身をかぐめつゝ兄の前に平伏するを見て、エサウは走り寄り堅くその首をいだき熱烈に接吻を與へました。茲に二十年來の怨恨は解かれ、あたゝかき平和の春が二人の兄弟の上に曙光を放つたのであります。解け合つた二人の眼には露の玉がやどつてゐたことでありませう。あゝ平和、麗はしの春の平和よ。

兄エサウは歡びに満ち、靜かに情のあふれた言葉を以て更めて尋ねました。

『此語の群は何のためなるや』(卅三〇八)

ヤコブは喜び勇んで答へて言ひますには、

『我もし汝の目の前に恩をえたらんには請ふわが手よりこの禮物を受よ我汝の面をみるに神の面をみるがごとくなり汝また我をよろこぶ 神我をめぐみたまひて我が有ところの者足りされ

ば請ふわが汝にたてまつる禮物を受よ』(卅三〇十、十一)

と、嬉しさ餘つて彼は言葉も後や先。兄との間に平和を贏ち得たる彼の歡喜は私共の想像も及びません、その眞相は神のみ知り給ふところでありませう。

エサウは一度は辭退しましたが、弟の切なる情を思ふては斷り兼ね、喜んで凡てを受けまし

た。此の平和を贖ふための價として家畜五百五十頭が用ひられたのであります。今日に於ては人々の知る如く、戦争は幾億萬の費用と、幾千萬の尊き青年の生命とを要求するものであります。

此の二人の兄弟はその後隣り合ふたる土地に住み、幾年かの後父イサクが地上を去つた時にも、共に睦じく心を合せてその遺骸を葬りました。

## 二、純潔の問題

愈々ヤコブが約束の地に入つて後、彼とその家族等は暫くシケムといふ町に天幕を張つて滞在して居りました。その地方にはハムの子孫が住んで居りました。ヤコブのたゞ一人の娘デナは、そこでその地方の女と交際を試みました。朱に交はれば赤くなるといひます。彼女は果して不良少女であつたのでせうか。元來不注意な娘でありましたのでせうか。

こゝに其の國の君主の息子がデナを辱かしたといふ大事件が突發したのであります。君主はデナを息子の嫁として迎へ、事を落着かせたいと願つたのであります。ヤコブの息子等は

これを承知しませんでした。ヤコブ一家の名譽にかけてこれを許すことは出来ぬといひ、遂に劍を取つてその町を不意撃ちし、町中の男子を一人のこらず殺して了ひました。ヤコブは歎きました。息子等の遣り方が餘り殘忍なので、心を痛めて彼等を誂めましたが、彼等は、「豈われらの妹を娼妓のごとくしてよからんや」(卅四〇卅一)と答ふるのみでありました。

併し、彼等兄弟の精神は兎も角、これは讃むべき遣り方とは言はれません。實際強姦に關する問題は解決に非常に困難を感じます。品性が向上すればする程純潔は生命よりも大切なものであり、ことに處女の純潔は尙更の事であります。然らば強姦罪を犯した人を如何に處分すべきでありませうか。これを裁判に附するとしても、被害者たる婦人を法廷に立たせ、判事、辯護士、民衆等の面前に自己の恥辱を證言させる事は、餘りに殘酷であります。紳士としてかゝる處分に同意することは出来ません。

或る地方では、その娘の親が鐵砲をさげて加害者を尋ね出し、結婚を承諾させるか、或は若し斷られるならばその場で加害者を殺すこともありませう。これは中古時代の上流家庭の遺風で

あり、日本でいへば武士堅氣な家庭の風習に似て居りますが、これも亦無法な遣り方であり、裁判沙汰にも出来ず、又家族同志の解決も困難であるとすれば、これは餘程難かしい問題であります。又一例として或る地方の如きは、一般に生命以上に純潔を重んずるために、若しその種の罪人があれば人々は一齊に起つて、狂犬でも狩るかの如くその罪人を探し出し、即座に裁判が行はれ、その人の首を取つて罪を洗ひ去るといふ習慣があります。これはリンチ法といひ、司法権の届かぬ米國新開地にて罪人に刑を課する方法であり、一名百姓裁判ともいひます。勿論この方法も讀むべきものではありません。

兎に角かくの如き罪人を、自由に社會に放任しておく事は出来ません。その罪を重大なものとして取扱ふべきは當然の事であります。

### 三、神の約束

ヤコブは既に約束の國に入りましたが、神の命に従ひ再びベテルに行きました。二十年、昔一夜の夢により、神が淋しき彼を旗の空に慰め給ひしものこのベテルでありました。二十年の星



霜を過去として省みる時、彼は實に懷舊の情に堪へなかつたであります。此の時再び神は彼に顯れ給ひました。

『我は全能の神なり生よ殖よ國民および多の國民汝よりいで又王等なんぢの腰よりいでんわがアブラハムおよびイサクに與へし地は我これを汝にあたへん我なんぢの後の子孫にその地をあたふべし』(卅五〇十一、十二)

かくてヤコブは約束の國を嗣ぎ大國民の先祖となり、萬國民の救主イエス、キリストを生み出すべき、光榮ある約束の繼承者となつたのであります。

## 第二十九章

参照||創世記第三十七章

### ヨセフの傳記

## 一、父の愛子

ヨセフは父の老年子で格別に寵愛されて居りました。彼はラケルの子でありまして、母の愛嬌ある氣質とその美容とを享け繼いでをりました。そして彼は年少にして母を失ひましたので、なほ一層父と親しむやうになつたのであります。

彼が十七歳の折、或る日、其の兄弟等と共に野にゆき羊を牧つて居りましたが、家へ歸つて後、ビルハとジルバの息子等の悪しき行爲を父に告げました。ヤコブが父として彼等に注意を與へる筈の事實が實際多くあつたのでありますから、ヨセフがそれを父の耳に入れたのはあながち悪い事ではなかつたのであります。其れが爲めに兄弟達は彼を憎みました。ヨセフは溝の中の百合の花でありました。彼は神を信じ、父に孝養をつくし、兄弟達の善良になる事を望んでゐたのであります。まことに賢い子でありましたから父は他の息子よりも深く彼を愛して、彩れる衣服を彼に着せました。彼は眞に神より選ばれたる卓越せる青年でありまして、或る夜神よりの靈感により夢を見ました。翌朝父と兄弟等にその夢の事を告げて、

『請ふわが夢たる此夢を聴け 我儕田の中に禾束をむすび居たるにわが禾束をき且立り而して

汝等の禾束環りたちてわが禾束を拜せり』(卅七〇六、七)

と言ひました。兄弟達はそれを聞いて冷笑し、

『汝眞にわれらの君となるや眞に我等をさむるにいたるや』(卅七〇八)

と云ひ、『何の馬鹿げた夢よ』と嘲つて、愈々彼を憎むばかりでありました。

其の後ヨセフは再び神の靈感を受けて、なほ一つの夢を見ました。それは日と月と十一の星とがヨセフを拜した光景が一夜の夢に現れたのでありました。それを父と兄弟達に再び語り聞かせた時、父は心の中に感ずるところあり、種々思ひめぐらしつゝも、表面では彼をいましめて言ひました。

『汝が夢しこの夢は何ぞや我と汝の母となんぢの兄弟と實にゆきて地に鞠て汝を拜するにいたらんや』(卅七〇十)

## 二、兄の嫉妬

兄弟達はます／＼ヨセフを憎みました。彼等の惡事に與しなにとて彼を憎み、彼等の惡を告げられるため彼を嫌ひ、父の愛子であるが故に彼を妬み、衣服が美しいのでその衣服を憎み、『坊主憎ければ袈裟まで憎い』といふ様に其の夢までも憎くなり、ヨセフには皆が挨拶さへもしないやうになりました。嫉妬が積れば殺人罪となります。パリサイ人の嫉妬がその頂點に達して神の聖子イエスを殺しました。彼等兄弟の嫉妬の成行は果してどうなる事でありませうか。

ヨセフの兄弟等はその後羊を牧ふためにシケムへ行きました。シケムはヘブロンより三十里程の道程であります。その後でヤコブは愛子ヨセフを呼び寄せ、

「汝の兄弟；シケムにて羊を牧るにあらすや來れ汝を彼等につかはさん 請ふ往て汝の兄弟と群の恙なきや否を見てかへりて我につげよ」(卅七〇十三、十四)

と命じましたので、ヨセフは快諾して直ちに直立致しました。シケムに着いてその邊りの野をさまようて居りますと、或る人が兄弟達はドタンへ行つたと云ひましたので、直ちに其處へ赴いて彼等に遇はうといたしました。然るに兄弟達は、遙か彼方にヨセフの姿を見た時に、彼を殺さうといふ相談をはじめました。

「視<sup>み</sup>上<sup>み</sup>作<sup>ゆめ</sup>夢<sup>みる</sup>者<sup>もの</sup>きたる 去<sup>い</sup>來<sup>ざ</sup>彼<sup>かれ</sup>をころして隣<sup>あな</sup>に投<sup>な</sup>げいれ或<sup>ある</sup>惡<sup>あし</sup>き獸<sup>けもの</sup>これ<sup>を</sup>食<sup>く</sup>ひたりと言<sup>い</sup>ん而<sup>しか</sup>して彼<sup>かれ</sup>の  
夢<sup>ゆめ</sup>の如何<sup>いか</sup>になるか<sup>を</sup>觀<sup>み</sup>るべし」(卅七〇十九、廿)

彼等<sup>かれら</sup>がかく企<sup>く</sup>てた時<sup>とき</sup>、ルベン<sup>ルベン</sup>は長男<sup>ちやうなん</sup>で責任<sup>せきにん</sup>を感じ<sup>かん</sup>じたところからでありませう、ヨセフ<sup>ヨセフ</sup>の生命<sup>いのち</sup>を救<sup>すく</sup>はんとして、

「我<sup>われ</sup>儕<sup>ら</sup>これ<sup>を</sup>殺<sup>ころ</sup>すべからず 血<sup>ち</sup>をながすなかれ之<sup>これ</sup>を曠野<sup>あれり</sup>の此隣<sup>このあな</sup>に投<sup>な</sup>げいれて手<sup>て</sup>をこれにつくるな  
かれ」(卅七〇廿一、廿二)

と言<sup>い</sup>ひました。とかくする内にヨセフ<sup>ヨセフ</sup>が其處<sup>こゝ</sup>へ來<sup>き</sup>ましたので、彼等<sup>かれら</sup>は其<sup>その</sup>彩<sup>いろ</sup>れる衣服<sup>いふく</sup>を剝<sup>は</sup>ぎ、  
彼<sup>かれ</sup>を捕<sup>とら</sup>へて穴<sup>あな</sup>に投<sup>な</sup>げ込みました。その穴<sup>あな</sup>は罅<sup>びん</sup>のやうな形<sup>かたち</sup>で、口<sup>くち</sup>は狭<sup>せま</sup>く下<sup>した</sup>が廣<sup>ひろ</sup>く、中<sup>なか</sup>には水<sup>みづ</sup>のある  
ものとな<sup>な</sup>いもの<sup>もの</sup>とがあります。ヨセフ<sup>ヨセフ</sup>は水<sup>みづ</sup>の無<sup>な</sup>い深<sup>ふか</sup>い穴<sup>あな</sup>に入<sup>い</sup>れられて、入口<sup>いりぐち</sup>は石<sup>いし</sup>で蓋<sup>ふた</sup>をされま  
した。墓<sup>はかど</sup>同<sup>どう</sup>様の所<sup>ところ</sup>へ押<sup>おし</sup>込<sup>こ</sup>められて、ヨセフ<sup>ヨセフ</sup>は兄弟<sup>きやうだい</sup>達<sup>たち</sup>に泣<sup>な</sup>いて頼<sup>たの</sup>みました、その聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>き入<sup>い</sup>れ  
ずして、彼等<sup>かれら</sup>はヨセフ<sup>ヨセフ</sup>の持<sup>も</sup>つて來<sup>き</sup>たパン<sup>パン</sup>を平氣<sup>へいき</sup>で食<sup>た</sup>べてをりました。嫉妬<sup>しつと</sup>ほどおそろしい、人<sup>ひと</sup>  
を不人<sup>ふじん</sup>情<sup>じやう</sup>ならしめるものはありません。

## 三、賣られゆくヨセフ

丁度その時、エジプトへゆくイシマエル人の商人が、貨物を積み、駱駝に乗つてそこを通りかゝりました。慾の深いユダはこの時、『ヨセフを殺しても何の益にもならないから彼を此のイシマエル人に賣つて一つ金儲けをしやうではないか』と云ひますと、皆それに賛成しました。貪慾は嫉妬程の猛獸性を有つてゐないかもしれませんが、併し嫉妬と同様に人をあくまで冷酷ならしめます。こゝに彼等はヨセフを穴より引上げて、銀二十枚で彼を賣りますと、イシマエル人はそれをエジプトへ連れてゆきました。その後でルベンが穴へ來て、ヨセフを引上げ父に連れて行かうとしました處、彼の姿が見えませんでしたので驚き、且つ歎いて言ひました。

『童子はをらす嗚呼我何處にゆくべきや』(卅七〇卅)

此等の光景を眼前に浮べる時、私共は神がイエスを墓より甦らせ、異邦人の救ひのために遣はし給ひし事、及び、その後イエスの墓前に立つて、聖體の失はれたるを見てなげく弟子達の姿を思ひ起すではありませんか。

他の兄弟等はそれより、ヨセフの着物を牲山羊の血で染めて父に送り、

『我等これを得たりなんぢの子の衣なるや否を知れ』(卅七〇卅二)

といひますと、父はそれを見て非常に歎き、慰められむすべもなく、

『我は哀きつゝ陰府にくだりて我子のもとにゆかん』(卅七〇卅五)

といつて慟哭するのみでありました。

ヨセフはエジプト王パロの臣、侍衛長のポテバルに買はれて奴隸となりましたが、エホバは常に彼と偕に在し給ひました。人生の航路は神の御手にあります。信ずる者は確かに救はれます。



第三十章

參照 創世記第三十九章

奴隸なるヨセフ

「エホバヨセフとともに在す」(卅九〇二)

一、苦の中の幸

ヨセフは豊饒なる故國から友なき、風土の變つた外國へ賣られて來まして、もちろん言葉は通ぜず、且つ父の寵愛子であつたために牧羊の外には何の勞働にも慣れて居りませんので、彼の勞苦は一通りではありませんでした。併し、かゝる困苦の中にも神は彼とともに在し、彼を慰めたまひました。奴隸であるがために生活難の無かつたことも、その恩恵の一つであります。

た。

『幸福なるかな悲しむ者その人は慰められん』(太五〇四)

主人ポテパルは、神がヨセフと偕にいまし、彼の爲すところをすべて榮えしめ給ふを見て、信用して彼を近侍とし、凡ての所有をその手に委ねました。此の時よりして神はヨセフのために、エジプト人の家や畑、凡てのものを祝福せられました。

社會はヨセフの如き眞實なる人を求めて居ります。かゝる人物は必ず成功いたします。神が偕に在す時、耐へ難き苦難も恩恵の泉となり、出世の階段となるのであります。

## 一、誘惑の中の勇氣

ヨセフは風采のよい、容貌の立派な人でありました。さういふ人々には誘惑が多いものであります。ヨセフも一度ならず、毎日のやうに烈しい誘惑を主人の妻よりうけましたが、彼の意志は強固にして動かされませんでした。

『視よわが主人家の中の物をかへりみずその有るものをことごとくわが手に委ぬ この家には

我より大なるものなし又主人何をも我に禁ぜず只汝を除くのみ汝はその妻なればなり然ば我  
いかに此おほいなる惡をなして神に罪をかすをえんや」(卅九〇八、九)

彼は斷然ことほりました。これは美談であります。彼は眞に男らしい態度をとりました。主人  
に對する忠誠、神に對する順從、婦人に對する信義、貞節を尊ぶ精神、罪に對する恐怖等は皆  
彼の行爲にあらはれたる尊き教訓であります。「我いかに此おほいなる惡をなして神に罪をか  
すをえんや」といふ言葉を軸物として、床の間、カフエ、キネマ、旅館等の裝飾として掲げ、

今日の青年男女にこの時のヨセフの精神をひろく知らせたいものであります。

「幸福なるかな心の清き者その人は神を見ん」(太五〇八)

### 三、罵詈雑言の中の沈黙

ヨセフは或る日職を司るために家に入りましたが、その時主人の妻は彼の衣服を捕へて彼  
を誘ひました。彼は衣を婦人の手によて置いたまゝ屋外へ遁れました。女の失戀は恨みと變る  
時、敵の復讐よりも恐ろしいものであります。婦人はヨセフの衣を手にして、大聲をあげて家

の人々を呼び寄せ、ヘブル人ヨセフが彼女に戯れんとして室に入つたが、自分の叫びを聞き衣をすてゝ遁れたと告げたのであります。

此の時、若くして純潔なるヨセフの心はどんなでありましたでせうか。かく罵られて一言をもしはぬ彼の顔には、言ひ知れぬ無邪氣さと高潔さとが光り輝いて、その魔女の言葉を打ち消してゐたのを、見る人は見たであります。親切であつた主人が妻の言葉により彼に怒りを發しましたが、彼は更に默然たる態度をかへませんでした。言ふべき事がありますが言ひません。言へば主人の不名譽となり、主人の妻の恥辱となります。自己を保護するために辯明せんよりも、彼はこの時機犠牲者となる覺悟をしたのであります。

ヤコブの愛子ヨセフはかくて默然として收監せられました。監獄の戸はかたく閉ざされました。彼は主イエスにも似たる模範を我々に残しました。彼は罪を犯さずその口に虚偽なく、罵られて罵らず苦しめられて脅かさず正しく審きたまふ者に己を委ねたのであります（彼前二

〇廿二、廿三）

## 四、囚人の中の主人

ヨセフの如き善良なる人が罪あるものと共に數へられ、牢獄に投ぜられる事があるならば、その時神も偕に入獄せられます。神はヨセフとともに在し、彼を憐み、典獄をして彼を恵まじめ給ひました。典獄は彼を信用して他の囚人等を皆彼の手に委ね。ヨセフの爲すところは凡て榮えを示されたのであります。神は信仰ある人々を成功せしめ、昇進せしめ給ひます。彼は獄中の主人となりました。ヨセフ、ダニエル、エレミヤ、ベテロ、パウロ、パンヤン、バクスタ、賀川氏等は皆、獄中に於ける神の御臨在と御恵とを親しく體驗した人々であります。

『幸福なるかな義のために責められたる者天國はその人のものなり』(太五〇十)

## 第三十一章

参照Ⅱ創世記第四十章、第四十一章

### 獄より位へ

朝に奴隸なりしもの夕に總理大臣となり、午前牢獄にありしもの午後高官の人となる、これはさながら小説の様に聞えますが、併し實際ヨセフの生涯にはかくの如き事實があつたのであります。實に神の御業は量り知られませぬ。私共はかゝる歴史的事實に遭遇する時、「あゝ神の智慧と知識の富は大なるかな。其の審判ははかり難くその道は尋ねがたし」と讚美せざるを得ませぬ。獄より位までヨセフを引き上げるために、神は三つの夢を用ひられ、來らんとする事々を豫め彼に示されたのであります。

其の頃エジプト王の酒人と膳夫とが王に罪を犯して獄に入れられました。同じ獄に繋がれて

居りましたので、侍衛長はヨセフをして彼等の側に侍らせました。ヨセフは朝夕二人の王の下臣に接近して宮殿内の様子を聞き知らずして、宮殿生活の準備をして居りました。日を経て後、二人の臣は一夜の中に各々夢を見ました。翌日彼等の物憂げな顔色を見てヨセフはその理由を尋ねますと、彼等は昨夜夢をみたがそれを解いてくれる者がいないからであると答へました。

『解く事は神によるにあらすや請ふ我に述べよ』(四十〇八)  
とヨセフはこの時彼等に告げたのであります。

こゝに私共は信仰の力を見ます。ヨセフは十七歳の時兄弟に賣られ、奴隸として外國で十年の長年月を忠實に仕へた揚句、罪なきに罵られ、牢獄にまで投込まれましたが、詮方盡くれども望みを失はずして、此の時宮内官等を慰め、且つその信仰を言ひ表はしました。彼は青年時代の夢を忘れはしませんでした。

## 一、酒 人 の 夢

「我夢の中に見しにわが前に一の葡萄樹あり その樹に三の枝あり芽いで花ひらきて葡萄なり



房をなして熟たるがごとくなりき 時にパロの爵わが手にあり我葡萄を摘てこれをパロの爵に搾りその爵をパロの手に奉たり』(四十〇九—十一)

右は酒人の夢であります。ヨセフはこれを解いて『三つの枝は三日で、今より三日の後にパロ王はあなたを元の位置にかへし、貴方は再び盃をパロの手に捧げるやうになるでせう』と言ひました。而してヨセフは彼が近く再び榮ある生活にかへつたならば、自分の身の上をも記憶して恵みを與へ、パロに陳述して自分も亦出獄の出来るやうに取計らつて貰ひたいと願ひました。自分はヘブル人の地より攫はれて來た者で、此の地へ來て後も獄に入れられるやうな罪を犯した覚えはないのであると訴へたのであります。

酒人はヨセフの言葉の通りに出獄しましたが、其の日はパロの誕辰に當つて居りましたから、御馳足の準備等に忙しかつたものか、或は嬉しさにまかせ自家の用事にまぎれてゐた爲めか、廣い世界へ出た彼は、はや穢苦しい獄の中のヨセフの事などは忘れて居りました。ヨセフは毎日便りを待兼ねて居ましたが、何の音沙汰もありませんでした。

併しこれもまた神の恵みでありました。ヨセフには未だ時期は到來しないのであります。出

たところで行くべき處はなし、働くべき場所もありません。これは出獄人の屢々味ふ苦い経験であります。ヨセフは今更侍衛長ポテパルに再び使つて貰へる望みはなく、故郷へ歸つても兄弟達は悦んで迎へてはくれませんでせう。今牢獄を出るならば、再び奴隸の身分となるより外はなかつたのでありますから、酒人がヨセフを忘れてゐた事も、また神の御恵に外ならないのであります。神の御手の導きに誤りのあらう筈がありません。

「神の火の柱の進むを待て」

「忍耐は練達を生じ練達に希望を生ず」

ヨセフは尚ほ二年間出獄を待ちましたが、これも無意味な月日の流れではありませんでした。其の間に彼の品性は充分鍛へられました。彼は王の位に座するにも相應しい三十歳の人となりました。

## 二、膳夫の夢

「我も夢を得て見たるに白きパン三筐わが首にありて その上の筐には膳夫がパロのために作

りたる各種の饌ありしが烏わが首の筐の中より之をくらへり』(四十)十六、十七)

膳夫は酒人の夢のよい解明を聞き、自分のためにも何か運のよい事があるかも知れぬと考へ、その夢をヨセフに解いてもらひました。ヨセフの解明によれば、三筐のパンは三日であつて、今より三日の後パロは膳夫を木に懸け、そして烏が彼の肉を食ひ取るであらうといふ事でありました。此の夢も三日のうちに現實となり、膳夫は死刑を宣告され、木に吊されて殺されました。

### 三、パロの夢

これより二年の後、パロは一夜次の様な夢を見ました。彼自身川の邊に立つて見て居ますと、そこに七疋の立派な肥えた牝牛が、川から上つて葦を食べて居りました。その後からまた七疋の醜い瘦せた牝牛が川から上つて、先の肥えた牛を皆食ひ盡して了ひました。パロは驚いて目を醒しましたが、又再び眠りにつきますと、今度は一本の莖に七つのよく實つた穂が出ました。そして其の後に又萎びた貧弱な七つの穂が出て、前の實つた穂を呑み盡してしまつた光景を夢

みたのであります。王はその夢の事が氣に懸り、エジプトのあらゆる法術士と博士とを召し寄せて其の解釋を頼みましたが、これを解き得るものがありませんでした。恰も此の時に當り、彼の酒人は俄かにヨセフの事を思ひ出し、パロに彼の事を詳しく報じましたので、パロは早速人を遣はしてヨセフを呼びよせました。ヨセフは急ぎ獄より出で、鬚を剃り、衣服を更めてパロの御前へ出ました。果してその夢を解く事が出来るかと王より尋ねられた時、ヨセフは答へて、

『我によるにあらず神パロの平安を告たまはん』(一〇十六)  
と云ひ、早速その夢を解き示しました。

『その二つの夢は一つの意味でございます。即ちエジプトの全地に七年間豊年が續き、その後七年の飢饉が來るといふ前兆でございます。王が再び夢を見られたのは、速かにかくあらしめんとその神の聖意であります。それゆゑ豊年の間にその豊作の五分の一を貯へ置き、飢饉の年のために備へを爲す事が必要でございますませう』と云ひますと、パロはこれを聞いて感動し、

『我儕神の靈のやどれる是のとき人を看いだすをえんや』(四十一〇卅八)

といひ、又ヨセフに向つて、

「神是を盡く汝にしめしたまひたれば汝のごとく慧く賢き者なかるべし 汝わが家を宰るべし

わが民みな汝の口にしたがはん唯位においてのみ我は汝より大なるべし」(四十一〇卅九、

四十)

と約束致しました。而してパロはヨセフに其の指輪をはめ、白布の衣を着せ、金の鎖を首にかけてパロの次席を與へられることとなり、車で途ゆく時は「下に居れ」と先導をして呼はらせました。かくてヨセフは囚人より一躍してエジプト全國の宰相となつたのであります。此れも亦主イエスに關はる預言であります。

## 第二十二章

參照 創世記第四十一章、第四十二章

## 家宰なるヨセフ

「パロ、ヨセフの名をザフナテパネアと名けまたオンの祭司ポテパルの女アセナテを之にあたへて妻となさしむ」(四十一〇四十五)

## 一、ヨセフの妻

ヨセフの傳記は主イエスの型であります。ヨセフの上についた事柄は、そのまま主イエスに關する預言であります。ヨセフが兄弟に賣られ、エジプトに於て宰相となり、且つ外國の女を妻として與へられたる如く、主イエスキリストは、イスラエル人に棄てられ、異邦人の君とな

り、救主すくはぬしとなり、異邦人いはうじんの中うちより信しんずる者ものを選えらんで彼等かれらを其そのの民たみとなし、彼等かれらによつて建てられたる教會けうかいを妻つまの如ごとく取扱とりあつかひ給たまふたのであります。此この事ことは使徒しんとパウロが常つねに神祕しんぴとして尊たうとびたる神かの奥儀おくぎでありまして、彼かれは絶たえず此この思おもひ設まけぬ教會けうかいなるもの、即すち異邦人いはうじんの中うちより選えらばれたる教會けうかい、所謂すゐるキリストの妻つまたる教會けうかいを驚異おどろを以もつて見守みまもり、その聖せいなる關係くわいを神かの奥義おくぎと稱なへました。奥義おくぎとは未だ現あらはされざる神祕しんぴといふ意味いみであります。以弗所書エペソ第三章しやうの始めに奥義おくぎといふ文字もんじが四度記よどされてあります。その二三をこゝに示しませう。

『この奥義おくぎは黙示もくしにて我われに示しされたり』(弗三〇三)

『この奥義おくぎは今御靈いまたまによりて聖使徒せいしとと聖預言者せいよげんしやとに顯あらはされし如ごとくに前代ぜんだいには人ひとの子こらに示しされざりき』(弗三〇五)

此この奥義おくぎは何なんであるかといひますと、

『即すち異邦人いはうじんが福音えういんによりキリスト、イエスに在ありて共ともに世嗣よつぎとなり共ともに一體たいとなり共ともに約束やくそくに與ある者ものとたる事ことなり』(弗三〇六)

とあります。異邦人いはうじんより選えらばれたる教會けうかいは即すち主しゆイエスの妻つまであります。



「キリストの教會を愛し之がために己を捨て給ひしごとく汝らも妻を愛せよ」(弗五〇廿五)

今日の傳道(傳道)の目的は即ち神が異邦人を顧み給ひ、其の中より御名を信する民を選び給はんがためであります。

ヨセフはアセナテを愛し、二人の子供を興へられ、幸福なる家庭をつくり、其息子等をマナセ(忘)及びエフライム(多く生る)と名づけて彼は自らの困苦を忘れ、惱みの地に子等を得て全く満足して生活いたしました。願くば人々主イエスの教會を愛し、其れにより多くの子等を得てすべての苦難を忘れ、教會によつて眞の満足を得られんことを。

## 二、萬國の救主

「エジプト全國饑し時民さけびてパロに食物を乞ふパロ エジプトの諸の人にひけるはヨセフに往け汝等にいふところをなせと饑饉全地の面にありヨセフすなはち諸の倉廩をひらきてエジプト人に賣わたせり饑饉ますくエジプトの國にはげしくなる 饑饉諸の國にはげしくなりしかば諸國の人エジプトにきたりヨセフにいたりて穀物を買ふ」(四十一〇五十五)

ヨセフはエジプトの家宰として非常(ひじょう)に職務(しよくむ)に忠實(ちゆうじつ)でありました。彼はエジプトの全地(ぜんち)を巡(めぐ)り、豊年(ほうねん)七年(ねん)の間に山(やま)なす食糧(しょくりやう)を町々(まちまち)に收(と)め、遂(つひ)には數(かず)へ盡(つく)されぬほどの量(かさ)に達(たつ)しました。此(こ)の勤勉(きんべん)なる家宰(いっかさ)は神(かみ)の御恩惠(おみぐみ)によつて、當時(たうじ)に於(お)ける萬國民(ばんこくみん)の救主(すくぬし)となりました。即(すなは)ち諸國(しよこく)の人々(ひと)が皆(みな)エジプト(エジプト)に來(きた)り、ひたすらヨセフに請(こ)ふて食物(しょくもつ)を買(か)ひ入れんとする有様(ありさま)であります。

これは恰(あた)かしも主イエスの恩惠(めぐみ)の豊(ゆた)かなることをよく表(あらわ)はして居(ゐ)ります。全世界(ぜんせかい)の人々(ひと)がイエスに來(きた)り、食物(しょくもつ)を受けてなほ餘(あま)りある程(ほど)の富裕(ふゆう)であります。パロの言葉(ことば)は恰(あた)かしも今日(こんにち)の福音(ふくいん)宣傳(せんぱん)のやうに聞(き)えます。若(も)しヨセフとイエスの御名(みな)とをいれ代(か)へるならば『イエスに往(か)れ彼(かれ)が汝等(なんぢら)にいふところをなせ』となります。富裕(ふゆう)なるイエスは今日(こんにち)も飢(う)ゑたる人を招(まね)き給(たま)ひます。

『凡(すべ)て勞(らう)する者(もの)重荷(おもむき)を負(お)ふ者はわれに來(きた)れわれ汝(なんぢ)らを休(やす)ません』(太十一〇廿八)

### 三、夢(ゆめ)の成(じやう)就(じゆ)

『イスラエルの子(こ)等(ら)穀物(こくもつ)を買(か)はんとて來(きた)る者(もの)とよもに來(きた)る其(これ)はカナン(カナン)の地(ち)に饑饉(ききん)ありたればなり

時にヨセフは國の總督にして國の凡の人に賣ことをなせりヨセフの兄弟等來りてその前に地に伏て拜す、ヨセフその兄弟をしりたれども、彼等はヨセフをしらざりき』(四十二〇五、六、

八)

ヨセフは其の昔の夢を憶ひ出した事でありませう。これは恰も劇か何かの様に思はれますが、事實であり、又預言であります。ヤコブはエジプトに穀物のある事を聞き、十人の息子(ヨセフを賣つた十人)を遣はしてその穀物を買はせました。彼等十人の兄弟は、ヨセフに到り、その前に平伏致しました。これも亦主イエスに就ての預言であります。主イエスを賣つたイスラエル人も主イエスと知らずしてその前に平伏す時は來ませう。此れは彼等の惱みの時代に於てであるが、來らんとするイスラエルの惱みの七年に於てでありませうか、確かに主イエスを拜し奉る時が來ます。イスラエル人のみならず主イエスを拒んだ諸國民に至るまで、皆イエスの御前に平伏す時が來るのであります。

この故に神は彼を高く上げて之に諸般の名にまさる名を賜ひたりこれ天に在るもの地に在るもの地の下にあるもの悉とくイエスの名によりて膝を屈め且もろくの舌の「イエス、キリ

ストは主なり」と言ひあらはして榮光を父なる神に歸せん爲なり』（腓二〇九―十一）  
ヨセフの夢は主イエスの上に確かに成就せられます。麥の束は皆イエスの束の前に屈み、太陽も、月も、すべての星も、等しく主イエスに最敬禮を捧げるであります。

## 第三十三章

參照 創世記第四十二章

### 良心の覺醒

ヨセフは十人の兄弟達を見て直ちにそれと知りましたが、彼等は弟を知りませんでした。ヨセフは實弟ベニヤミンにも會ひたいと思ひましたので、彼を呼びよせるために一の策略を用ひました。彼は態と荒々しい言葉で兄弟等に向ひ、  
『汝等は間者にして此國の隙を窺んとて來れるなり』（四十二〇九）

と詰りましたので、彼等は大に驚き周章をまして、自分等に偽りのない由を陳述しましたが彼は承知せず、

『パロの生命をさして誓ふ汝等はかならず間者なり』(四十二〇十六)

と言ひ張り、終に十人を幽閉致しました。而してヨセフは三日の後にその中の九人を許し、ペニヤミンを連れて来るまで一人だけを幽閉しておく事を宣告して、此の策略を斷行したのであります。

投獄された結果彼等はこれまで味ふた事のない精神上の打撃を體驗致しました。即ち空氣新鮮なる原野に成育せし彼等牧者達が、俄かに暗黒と不正の氣に満ちたる獄、而も外國の監獄にて外國人の殘酷なる手に縛せられ、何時再び自由の身となり得るやをも暈り知られぬ憂き思ひの中に、三日を過さねばなりません。而して深き反省の結果、彼等は或一つの罪の想起により良心の苛責をうけ、堪へられぬ心苦しさを感じたのであります。

『我儕は弟の事によりて信に罪あり我儕は彼が我らに只管にねがひし時にその心の苦を見ながら之を聴きざりき故にこの苦われらにのぞめるなり』(四十二〇廿)

と言ひ、彼等は互に回顧して悔むのみでありました。今私共はこの悔恨の言葉について、一層深く考へて見たいと思ひます。

## 一、良心の聲

此の悔悟の言葉をよく味はつて見るならば、人の心といふものは實に恐るべきものである事を悟るでありませう『我儕は弟の事によりて眞に罪あり』と。弟とはヨセフの事で、二十二年前に此の十人が弟ヨセフを奴隸としてエジプト行の商人に賣つた事實は、未だ私共の記憶に新たであります。爾來二十二年の星霜を経て、こゝにその十人は食物を得んがためにエジプトに行きました。而して疑はれて投獄せられ、必然的に深い反省の機會を與へられた時、『我儕眞に罪あり』と。良心の聲に、俄然その精神は覺醒したのであります。苦難に遭遇した結果長年月の間眠つて居た良心が忽焉として目醒め、他人に苦痛を與へたことをまぎ／＼と眼前に浮べさせられたのであります。

潜める罪惡は懼るべきものであります。一旦全然埋没されたかの如く見えたものが、又再び

露はれて來ます。ヨセフの彩れる衣を羊の血で染めて父を敷き、巧みに隠蔽したつもりの方が、再びこゝに露はれて彼等の良心に訴へ、「我儕は弟の事によりて眞に罪あり」と叫ばしむるに至りました。他人より責められたのでなくして、衷心より出でたる悔恨の情に堪へず。忘れ度しと思ふも今は忘れがたく、血に染めた手を洗ひ度しと願ふも潔める術もありません。世に恐るべきは罪の曝露であります。

## 二、記憶の聲

彼が我らに只管にねがひし時にその心の苦を見ながら之を聴ざりき」と彼等は言ひました。精神は苦惱に遇ふ時鋭敏に働きます。ヨセフはその折泣哭し、苦悶し、歎願したのであります。二十二年の後の今尚ほ彼等の耳には、弟ヨセフの悲しき聲が響いて來たのであります。その歎願を聞入れざりし彼等自身が、今この暗愴たる獄中に幽閉せられて、自らヨセフに與へたる苦惱を思ひかへさず居られないのは寧ろ當然であります。かの折彼の歎願を聞入ればよかりしものを、彼を穴の中に投げ入れねばよかりしものを、泣く弟を賣らねばよかりしもの



を。たゞ心は悔いに満つるばかりであります。過去の記憶が良心の敵となる時、その苦惱は毒蛇の潜む室に眠るも同然であります。

### 三、分別の聲

『故にこの苦われらにのぞめるなり』と彼等は自覺して居ります。不運不幸に陥る時、人はおのづから反省いたします。人間には理性が興へられてをりますから、他の動物の如く無思慮、無分別でなくして、精神を鋭敏に働かせ、其の苦痛の原因を探らうと致します。二十二年前の過失を指摘して『故にこの苦われらにのぞめり』と叫ばざるを得なかつたのであります。實に堪え難い思ひに胸迫られた事でありませう。

### 四、忠告の聲

こゝにルベンが他の兄弟等を咎める聲がかすかに聞えます。

『我なんちらにいひて童子に罪をかすなかれといひしにあらずや然るに汝等きかさりき是故

に視よ亦彼の血をながせし罪をたゞさる』(四十二〇廿二)

曩に私共に忠告を與へた人は、其の事のために罰を受けることゝなつた時、私共を咎めるのが當然であります。果して私の言つた通りではありませんか。私の言葉を用ひさへすればこんな事にはならなかつたでせうに』と云はれても、これに對し私共は何等辯明し得るところはないのであります。

### 五、ヨセフの心情

ヨセフは傍に立ち彼等の言葉をすべて聞いて居りましたが、わざと通辨を用ひて知らぬ振りをして居りました。然し勿論彼はそれらの光景を見るにしのびず、同情に堪へかねて、彼等をして離れて泣いたのであります。未だ自分を言ひあらはすべき時期が來ませんでした。ヨセフは彼等を憐み、第二の兄シメオンだけをのこして九人を許し、その器に穀物を充たし、ひそかに彼等の持参した金をも囊に入れて返しました。而して早く歸國して若きベニヤミンを連れて來るやうにと命じた上、彼等を故國へ向け出立させました。

## 六、預言的意義

此の歴史はすべて預言であります。イスラエル國民にはイエスを殺した罪があります。二十世紀をへるも、未だ彼等は正されず、預言によればイスラエル國民に患難の時が来るであります。その時にはヨセフの兄弟等が經驗せし如き良心の苛責、回顧による悔悟、分別による問責を痛感する事でありませう。然し彼等がその罪を悟つて眞剣に悔改めるならば、その結果は幸福であります。何となればその時主イエスは再び御自身を彼等に現はし給ふのであります。以上の事實は預言であるのみならず、私共にとつての教訓であります。私共が如何に罪を蔽ひ隠すとも、これを根柢から正さない限りは平安の與へられる事はありません。その罪を言ひあらはしてキリストの恩恵の御座に頼り來てこそ、はじめて眞の平安は恵まれるのであります。

『エホバいひたまはく率われらともに論らはんなんちの罪は緋のごとくなるも雪のごとく白くなり紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん』(賽一〇十八)

## 第三十四章

参照||創世記第四十三章、第四十四章

## 一、第一の探針

人は良心に責められる時柔弱なものとなり易いため、神は彼に探針を入れて正し給ふのであります。さもなければ、人は何時までも確乎たる精神状態を得られる見込がありません。腫物が出来た時は醫師に切開を頼みます。隠れた罪のためには神の探針が必要であります。ヨセフは無意識に神の探針の役を勤め、彼等兄弟の良心の手術者となつたのであります。

ヨセフは兄弟達より金銭を受ける事を欲しませんでしたので、穀物を渡す時私に囊の中に隠し入れておきました。彼等は何も知らずにエジプトを出て、旅屋で一人が驢馬に食物を與へやうとして囊を開いた時、その口に金が入つてゐるのを見出しました。その理を一同に告げます

と皆恐怖の念に打たれ、これは何事であらうかと互に訝りました。神は何故自分達にかくあらしめたまふのであらうかと考へざるを得ませんでした。かくて歸國の後彼等は父のヤコブに、自分等が間者であるといつて怪しまれた事、投獄せられた事、次回穀物を買ひに行くには必ずベニヤミンを伴ふべき事、囊を明けると各自金包が入れてあつて大に驚いた事などを一部始終物語りました。

ヨセフはもとより親愛の情を以てその金子を返したのでありましたが、彼等にとつてはその好意すら却て良心を責める針となり、すべての事物が敵となつて彼等に攻め寄せるかのやうに感じたのであります。

## 二、第二の探針

父ヤコブは末子ベニヤミンだけは如何してもエジプトへ送るまいとの決意を示して居りましたが、飢饉は無情にもやがて彼等の糧食を盡きさせましたので、遂にヤコブはその意志をまげ、不本意ながらもベニヤミンがエジプトへ下る事を許したのであります。

ヨセフは實弟を眼前に見た時に心中嬉しさ餘つたのでありませう。家宰に向ひ、

「この人々を家に導き畜を屠て備へよこの人々卓午に我とともに食をなすべければなり」(四十

## 三〇十六)

と命じました。彼等は總理大臣の家に招かれ、非常なる名譽を感じて喜ぶべき筈の處を却て大に懼れ、囊の中の金子の事から、自分達を捕へて奴隸とするのではあるまいかと考へました。

傷ける良心には怖れが絶えません。ヨセフは未だ自分を名乗りはしませんでしたが、兄弟達、ことにベニヤミンを愛して居りましたので、彼等を懇ろに迎へました。神は再三彼等の良心に探針を入れ、根本的切開を斷行せんとし給ふたのであります。

愈々食卓についた時非常に不思議に思はれたのは、かの大臣が誰にも問ひもせず、兄弟ベンをはじめ次のシメオンより末子ベニヤミンに至るまで、順序たがはず席を定めた事でありました。此れによつてその大臣が、自分達の賣つた兄弟のヨセフである事を悟りさうなものでありましたが、未だそこまでは氣付かなかつたものと見えます。ヨセフの食卓より食事は順次に運ばれましたが、ベニヤミンの皿は他の兄弟のよりも五倍大のものであります。

### 三、第三の探針

翌日兄弟等が穀物を持つて歸らうとした時、ヨセフは再び彼等の金子を囊に返し、その上自身の所有なる銀の盃をベニヤミンの囊に入れさせました。彼等が歸途につき、暫くその途に進んだ頃、ヨセフは使を遣はして彼等呼び止め、

『汝らなんぞ悪をもて善にむくゆるや 其はわが主がもちゐて飲み又用ゐて常に卜ふ者にあらずや 汝らかくなすは悪し』(四十四〇五)

と言はせました。ヨセフの盃を盗んだといはれた彼等は驚愕措く處をしらず、

『主にゆゑに是事をいひたまふや僕等きはめてこの事をなさず、視よ我らの囊の口にありし金はカナンの地より汝の所にもちかへれり然ば我儕いかで汝の主の家より金銀をぬすまんや』(四十四〇七、八)

と言ひ、彼等を検査した上で若しそれを持つてゐるものがあれば、ヨセフの奴隷とならうとまで約束したのであります。そこで検査が行はれましたが、兄ルベンの囊にも、シメオンのにも、



レビのにも、ユダのにも見當りません。順次に進んで終にベニヤミンの囊を開けて見ますと、驚くではありませんか、その中にヨセフの銀の盃がちゃんと入れてありました。これ一大事と一同大におどろき、ベニヤミンが若し奴隸となつて歸る事が出来ないやうになれば、父ヤコブは死んでしまふに相違ないと思ひ、全く途方にくれてしまいました。父に對してベニヤミンの保證人となつたユダは、殊に父に會はず顔がありません。又彼を連れかへらない様な事があれば自分の二人の子供をさゝげるとまで誓つた。ルベンも容易に歸る事は出来ず、どうする事もできません。紛失品はベニヤミンの囊の中に見出されたのでありますから、もはや辯解する餘地もない場合であります。萬事窮すとはこの事でありませう。此の上は一同引き返して大臣の奴隸となるより外に仕方がありません。

見事探針は刺されたのであります。此等は皆ヨセフを賣つた罪の天罰であります。一行は奴隸となる覺悟でエジプトに再び下つて行きました。ヨセフがベニヤミン一人を暫く傍に置きたいとの願ひのための策略は、兄弟一同を得てしまつたのであります。ヨセフは彼等が二十二年前自分を賣つた時の兄弟達とは餘程違つてゐる事を、この時認めたであります。

## 第三十五章

参照||創世記第四十五章

### ヨセフ傳の妙境

前にも再三述べたる如く、ヨセフ傳はキリストに關はる預言でありまして、私共は常にこれを記憶する必要があります。而してこの章に於て、そのヨセフ傳は將に妙境に入らんとして居るのであります。

ユダはベニヤミンの生命のために大臣に懇願して言ひました。

「抑父の生命と童子の生命とは相結びてあれば我なんぢの僕わが父に歸りいたらん時に童子もしわれらと共に在らずば如何ぞや、父童子の在ざるを見れば死るにいたらん、されば請ふ僕をして童子にかはりをりて主の奴隸とならしめ童子をしてその兄弟とともに歸りのぼらしめたま

へ』(四十四〇卅、卅一、卅三)

ヨセフはこれを聞いて、もはやその感情を制する事が出来ませんでした。

『人皆われを離ていでよ』(四十五〇一)

と呼はり、人々を遠ざけて後兄弟等に自分がヨセフであることを打明け、感極まつて大聲に泣きました。その聲は外に居る人々には勿論、パロの家にまでも聞えたといひます。兄弟達は餘りの意外にたゞ驚くのみ、

『我はヨセフなりわが父はなほ生ながらへをるや』(四十五〇三)  
との言葉に對し答へる事さへ出来ませんでした。

### 一、總理大臣の正體

これは總理大臣の正體であり、ヨセフの除幕であります。彼等兄弟の驚きはどんなでありますか。總理大臣は兄弟のヨセフでありました。大臣は父の愛子ヨセフであつたのであります。彼は麥東の夢を見たヨセフでありました。自分等が穴に投げ入れ、再び引上げてエジ

プト行の商人に賣つたそのヨセフでありました。彼の着物を羊の血で染めて父を欺き、父の頭がそのために白髪となつたことも、今は二十餘年の昔となりました。その後ヨセフの噂は少しも聞かれずに歲月が流れて行つたのでありましたが、今突然此のエジプトの大臣が大聲に泣き、『我はヨセフなり』と兄弟たちに告げた時、彼等が驚愕の餘り急に物も言へなかつた事は、實にさもあるべきであります。

これはキリスト再臨の預言であります。主イエス、キリストの除幕式と近づいて居ります。此の世に人性をとり、大工の業を勤み、最後の三年を神の聖國の福音宣傳に捧げて、遂に磔刑にあはれたキリスト、イエスはやがて再び來り給はんとして居ります。その時主はイスラエル國民の前に立つて、『我はイエスなり』といひ給ふであります。

『視よ彼は雲の中において來りたまふ諸衆の目殊に彼を刺したる者これを見んかつ地上の諸族みな彼の故に歎かん然りアーメン』(黙一〇七)

## 二、和平の言葉

ヨセフは驚く兄弟達を近寄らせて、

『我はなんぢらの弟ヨセフなんぢらがエジプトにうりたる者なり されど汝等我をこゝに賣しをもて變ふるなかれ身を恨るなかれ神生命をすくはしめんとて我を汝等の前につかはしたまへるなり 神汝等の後を地につたへんため又大なる救をもて汝らの生命を救はんために我を

汝等の前に遣したまへり』(四十五〇四、五、七)

と言ひ、彼等の心を和らげ、安心を與へました。又ヨセフは信仰によつて神の偉大なる攝理を理解し、信じて居りましたので、快く彼等を赦したのであります。

これらはすべて預言であります。キリストはイスラエル國民に棄てられ、磔刑にあはれましたが、神はその悲壯なる十字架をもつて萬國民の和らぎとなし、多くの民を救ひ、主イエスによつて私共に福音の宣傳をさせ給ふのであります。

『即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめその罪を之に負はせずかつ和がしむる言を我らに委ね給へり。』(哥後五〇十九、廿)

### 三、イスラエル人の救ひ

「然ば我を此につかはしたる者は汝等にあらす、神なり、神われをもてパロの父となしその全家の主となしエジプト全國の宰となしたまへり 汝等いそぎ父の許にのほりゆきて之にいへ汝の子ヨセフかく言ふ神われをエジプト全國の主となしたまへりわが所にくだれ遲疑なかれ」と(四十五〇八、九)

信仰はまことにうるはしいものであります。總理大臣たる名譽を荷ふほどの身分となつても、自ら誇らず驕らず、信仰はすべての榮えを神に歸し奉るものであります。ヨセフは父に澤山の土産を贈り、又車と驢馬二十頭を遣はし、父と兄弟等の全家族をエジプトに迎へて養ひましたので、イスラエルは皆残らず救助せられました。

パウロ達ユダヤ人はこれらの預言によつて慰められました。即ち羅馬書に次の如く記されてあります。

「兄弟よ幾許のイスラエルの鈍くなれるは異邦人の入り來りて數滿つるに及ぶ時までなり斯し

てイスラエルは悉ことごととく救すくはれん』（羅十一〇廿五、廿六）

### 第三十六章

參照—創世記第四十六章、第四十七章

#### カナン人エジプトに入る

##### 一、神の導き

遙かに姿影を没してゆく故郷の山川に別れを告げつゝヤコブの一行はエジプトへの旅路につき、先づ父イサクの居つたベエルシバに至り、イサクの神に犠牲を献げました。この時神は夜の異象の中にヤコブにあらはれ、

『我は神なり汝の父の神なりエジプトにくだることを懼るなかれわれ彼處にて汝を大なる國民となさん 我汝とともにエジプトに下るべし亦かならず汝を導のぼるべしヨセフ手をなん



ぢの目の上におかん』(四十六〇三、四)

と告げられました。かくてヤコブは神の御導のまゝに、その家畜と凡ての財貨を携へ、ヨセフより送られたる車に乗り、一行七十人、南の國エジプトをさして進みました。彼等は果して心の中いかなる期待を懐いてゐた事でありませうか。

## 二、ヨセフとその父

ヨセフは父イスラエルの近づいた事を聞きまして、早速車をととのへゴセンにのぼり、其處にて彼を迎へ、互に相抱いて久しく泣きました、やゝありて、父はヨセフに向ひ、

『汝なほ生きてをり我汝の面を見ることをえたれば今は死るも可し』(四十六〇卅)と満悦の情を言ひ表はして居ります。

ヨセフは孝行な息子でありました。十七歳に至るまで、父より彩れる衣服を着せられて育つた可愛い子でありました。一度も父に會ふ機になかつた二十二年の間も、恐らく父を忘れた事はなかつたでありませう。先に兄弟等との對面の際にも、第一に彼は父の安否を尋ねたでは

ありませんか。愈々今なつかしい父の面前に立つた瞬間、彼は唯嬉しさに、父にすがつて泣くより外はありませんでした。肥沃なるゴゼンの地に父やその家族等を滞在させ、萬事豊かに居心地よく住まはせたいと思ひまして、ヨセフは特にパロにその事を懇願致しました。愛撫十七年の恩に報ゆるために、父のエジプトに於ける餘生十七年間を、ひたすら孝養につとめたのであります。實に孝心深き息子としての模範であります。

### 三、パロ王とヤコブの會見

此の當時全世界に於て、最も榮耀榮華を極めてゐたのはエジプトの皇室でありました。せう。ヨセフは宮殿中の生活に慣れて上品な人になつて居りましたが、これまで一定した家に住まはず。天幕の野營生活のみ營んで居た牧者達にとつては、その様な紳士達と交はり、かゝる壯麗な宮殿に客として取扱はれることは、恐縮の至りでありました。然し總理大臣たるヨセフは、物慣れぬ父や兄弟達を恥づるところは少しもありません。堂々と父と兄弟五人とを王に紹介したのであります。信仰篤いヤコブは、この時パロを祝福致しました。信仰ある者

は帝王の前に立つ時と雖も、神の祝福を祈ることを忘れません。

『汝の齡の日は幾何なるか』（四十七〇八）

とパロ王はヤコブに尋ねました。彼は答へて、

『わが旅路の年月は百三十年にいたる我が齡の日は僅少にして且惡かり未だわが先祖等の齡の日と旅路の日にはおよばざるなり』（四十七〇九）

と。而して暫時の對面の後再び王を祝して御前を退きました。ヨセフはカナン人を國中の最も善き地に住まはせ、同胞七十人の數に従ひ、食物を整へて彼等を養ひました。

#### 四、ヤコブの最後の願ひ

月去り日逝いて、ヤコブのエジプトに住む事茲に十七年、百四十七歳の老年に達した彼は、死の近きを悟りまして、最後の願ひを頼み甲斐ある孝行息子のヨセフに依頼したのであります。

『我もし汝のまへに恩を得るならば請ふなんちの手をわが髀の下にいれ懇に眞實をもて我をあ

つかへ我をエジプトに葬るなかれ 我は先祖等とともに偃んことをねがふ汝われをエジプト

より昇いだして先祖等の墓場にはうむれ」(四十七〇廿九、卅)

父の希望を快く承諾してヨセフは誓ひましたので、父は安心して床の上方に座し、恭しく拜を致しました。

臨終の近づいた時、父は孝心深い息子を何よりの頼りとしたします。又孝行な息子は快く孝養の限りをつくして、よく父を安堵させ得るものであります。

### 第三十七章

参照||創世記第四十九章

#### 祖先ヤコブの臨終と預言

父の最後の言葉を聴かんとして枕邊に集つた愛する十二人の息子との會合は、今や臨終に迫

れる父ヤコブにとつての永別の時でありました。

臨終は悲しみであり、離別は痛ましいものであります。しかしその瞬間は、己を忘れた純なる愛の漲る時であります。此の時のヤコブの心は、眞に美しい詩そのものであります。この時彼の心に映じた詩は、レメクの劍の短歌を除いては最も古いものであり、かのギリシヤの古い詩人ホーマーがトロイの滅亡に關する詩、イリアドを歌つたのも、此の時よりみればなほ一千年後の事であります。ヤコブの詩はまた同時に預言であります。全能の神はこの時帳を揚げて來るべき將來を示されました。即ち今こゝに連なる十二人の息子が、各自支派となつてカナンの國を分ける事、又その各支派に與へらるべき將來の生活狀態を、豫め示されたのであります。

『我後の日に汝らが遇んところの事を汝等につげん』(四十九〇一)

と父ヤコブは徐に口を開いて、彼等兄弟等各自の性質の表徴、各支派の地理的存在、及び彼等の上に實現せらるべき事實等につき預言しはじめました。而してその預言は、彼等が後世の歴史の上によく成就せられて居ります。此の時ヤコブにかく啓示し給ふたのは、確かに『今いま

し昔いまし後きたり給ふ主なる全能の神」であります。

## 一、ルベノン

「ルベン汝はわが家子わが勢わが力の始威光の卓越たる者權威の卓越たる者なり 汝は水の沸

あがるがごとき者なれば卓越を得ざるべし汝父の床にのぼりて浼したればなり」(四十九〇

## 三、四)

長男ルベンは家督權を與へられ、勝れた人となる筈でありましたが、彼の表徴は水であります。幕屋の傍に吊されてある鐵瓶の湯が溢れて、下に焚いてある火を消すのと同様、所謂早く熱して早く冷める質であります。彼は勝れた者となる事が出来ぬと預言せられて居ります。家督權即ち諸王はユダより出で、又長男として當然うくべき宗教上の職も、レビに移されたのであります。卓越せる人物は、彼の支派の永い歴史の中に殆ど一人も見當りません。彼等はヨルダンの彼方、東方の牧場に平凡な生活を送りました。

## 二、シメオン

『シメオン、レビは兄弟なりその劍は暴逆の器なり』（四十九〇五）

シメオンとレビは共に預言せられ、彼等の表徴は劍であります。彼等は曾て妹の恥をそぐがんと、彼女を辱しめた人を殺しました。ユダヤの歴史に據ればシメオンはサムソンの様な豪傑で、父を歎かす程その怒氣が猛烈でありました爲め、この時誼はれて、

『我彼らをヤコブの中に分ちイスラエルの中に散さん』（四十九〇七）

と預言せられたのであります。劍をとる者は劍にて亡ぶるとの主イエスの聖言は、シメオンに的中して居ります。この宗族にはエジプトを出づる時五萬九千人程の軍人がありましたが、沙漠を経て約束の國に入つた時には二萬三千程より残つて居りませんでした。沙漠に於て人口の増加したのは七つの支派で、あとの五つは減じた支派でありますが、その中でも最も減少せられてゐたのはこのシメオンの支派であります。ダビデの時の人口調査に、この支派の數があまり少なかつたので役人は『シメオンは多くの子がなかつた、他の支派の様に殖えなかつた』と



いふ意味を書いて居ります。而してこの宗族は遂に殆ど全滅致しました。

## 三、レ ビ

レビの表徴は同じく剣でありますが、四百年の後シナイ山の麓で『正義のためにエホバの味方たむもの我に来るべし』とモーセの呼はつた時、この支派が全部彼のもとに集つて、正義のためにその表徴たる剣を用ひましたので、神は彼等の過去の罪を赦し、宗教家としての権利を與へ給ひました。後彼等は全イスラエルに散らされて祭司の職を司りました。

## 四、ユ ダ

『ユダは獅子の子の如し彼は牡獅子のごとく伏し牝獅子のごとく蹲まる』(四十九〇九)  
ユダの表徴は獅子であります。獅子は王國の表徴で、今日に於ても英國の表徴とするところ  
であります。

『杖ユダを離れずシロの來る時にまでおよばん彼に諸の民したがふべし』(四十九〇十)

右はユダに關する預言であります。かくてユダは王の支派となり、數にも富にも最も勝れたものとなりました。七百年の後はユダヤは王國となり、この支派よりダビデ、ソロモン等の諸王出で、全國を支配し、又シロ、即ち平和の君主イエスが來り給ふまで、ダビデの王位は代々繼承せられてゐたのであります。

實にこの支派よりは諸々の王の王、君の君なる我等の主イエス、キリストがあらはれ給ひ、父祖ダビデの位を繼がんとして居られたのであります。『彼に諸の民したがふべし』との預言は即ちこれを意味して居ります。

試験の成績が發表せられる刹那の如く、或る者は暗涙を忍び、或る者は微笑禁じがたく、或は順序の來るを避けるが如く、或は早からんことを希ふもあり、臨終を前にして緊張し切つた沈黙の中に、父の言葉は尙ほ靜かに響いて行つたことでありませう。

## 五、ゼブルン

『ゼブルンは海邊にすみ舟の泊る海邊に住はんその界はシドンにおよぶべし』(四十九〇十三)  
ゼブルンの表徴は港でありました。約束の國を分けた時、彼にはガリラヤ湖と地中海との間の土地が與へられました。ユダヤの門戸としてアツコウを西に、湖畔の都會カペナウムを東に控へ、外國へ行く道は殆ど此處に集りました。通商貿易の要地として海にも陸にも便益を與へられ、繁榮の地となりました。

## 六、イツサカル

『イツサカルは羊の牢の間に伏す健き驢馬の如し 彼みて安泰を善としその國を樂とし肩をさげて良ひ租税をいだして僕となるべし』(四十九〇十四、十五)

イツサカルの表徴は遅しき驢馬であります。彼は此の世の快樂にあこがれ、富に惑はされて靈的生活を忘れ、預言の如く終に人の奴隸として『肩をさげて負ひ』驢馬の如き生涯を送りま

した。ヨルダンの谷、そのうるはしい田園は彼の領土でありましたが、いつしかその地は奪はれて、蹄鐵の跡をとどむる戦場と化してしまつたのであります。

## 七、夕 ン

『ダンはいスラエルの他の支派の如く其民を鞫かん　　ダンは路の傍の蛇のごとく途邊にある蝮のごとし馬の踵を噛てその騎者をして後に落しむ』（四十九〇十六、十七）

ダンといふ名は裁判官といふ意味で、彼は妾腹の子でありますが他の兄弟と共に十二の先祖の一人に數へられ、その名の示す如くその民を審きました。彼の表徴は蝮であつて、路傍に身を潜め、通りかゝる馬の踵に喰ひつき、自分はどうかつても馬上の人を後に落さずば止まないといふ、危険極まる蝮でありました。彼はユダヤの西海岸なる敵ペリシテ人の隣に住み、敵を國境より追ひ遣る事は出来ませんでした。彼等の間近に潜伏する恐るべき蝮を以て任ぜられてゐたのであります。この支派よりはエルサレムの宮殿を建築した名高い建築家のヒラムや、彼の豪腕を振つてペリシテ人を辟易させた大將サムソンが輩出致しました。

## 八、ガド

『ガドは軍勢これにせまらんされど彼反てその後のちにせられん』(四十九〇十九)

ガドといふ名は軍勢の意味で彼の支派にはヨルダンの東方を國として分けられました。其の東に敵のアモリ人が居り、度々攻撃を受けましたが、然し終には預言の如く凱歌をあげる様になりました。かの士師エフタト神の人エリヤを生んだのも此の地でありました。見渡す限り廣漠たる、浪のうねりにも似たる綠氈、そのガドの牧場は、今なほ人々にありし昔を物語るかのやうに思はれます。

## 九、アセル

『アセルよりいづる食物は美るべし彼王の食ふ美味をいださん』(四十九〇廿)

アセルとは幸福といふ意で、彼の表徴は食物であります。閑静なる平原を包圍して山は南北に聳えて居ります。此の地より偉人は多く出ませんでした。この山里に實つた一本の穂は王

の口に貴ばれ、こゝに製せられた一片のパンはイスラエルを悦ばせたでありませう。

## 十、ナフタリ

『ナフタリは釋れたる塵のごとし彼美言をいだすなり』(四十九〇廿一)

ナフタリの表徴は牝塵でありました。彼はヘルモンをめぐる山々に鹿の如く渉歩して、山川自然の美を讀めつゝ詩的生涯を送りました。

## 十一、ヨセフ

『ヨセフは實を結ぶ樹の芽のごとし即ち泉の傍にある實を結ぶ樹の芽のごとしその枝つひに垣を踰ゆ』(四十九〇廿二)

早魃を知らず、あらん限りの力を他のために捧げんとするかの如くに茂り榮ゆる樹の芽、泉の傍にあつて實を結び、終には垣をも越えゆくべき樹の芽はヨセフの表徴でありました。父が祝し與へた天の福、淵の福、乳哺の福、胎の福は彼の一身にあつめられました。而して彼の子

マナセとエフライムによつて二つの支派が生れ、彼等はヤコブの息子の如く待遇せられました。實に豊艶なる房を垂れたるエシコルの葡萄も、榮えゆく彼を形容するにはなほ足らないであります。

## 十二、ベニヤミン

『ベニヤミンは物を噛む狼なり朝にその所掠物を啖ひ夕にその所獲物をわかたん』(四十九〇

廿七)

ベニヤミンとは『右の手の子』といふ意味で、その表徴は狼であり、空腹を感じた時には死を賭してなりと、如何なる事でもやり通すといふ、危険性を帯びた性質であります。或る時ベニヤミン人が身を擲つて固めた難攻不落の砲臺に向ひ、全イスラエルが雲霞の如く攻め寄せて來た時、彼等は勇ましく一騎當千の働きを致しましたが、哀れにも人數足らず、遂に殆ど全滅して了りました。この小さい支派よりは多くの英傑を出して居ります。ソウル王、忠節なるエステル、及び使徒パウロ等はこの『狼の國』より輩出した勇士でありました。



『たゞ聖靈いづれの町にても我に證して縲繼と患難と我を待てりと告げたまふ然れど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職すなはち神の恵の福音を證する事とを果さん爲には固より生命をも重んぜざるなり』(徒廿〇廿三、廿四)

これがベニヤミン魂であります、パウロ魂であります。私共も使命のためにはこの意氣に溢れたいものであります。

實にこの預言、この歴史、この表徴がかくまでよく相呼應して居りますので、私共はこの預言を聞く毎に、『我は最先なり最後なり活ける者なり』との默思録の言葉を回想せざるを得ません。あゝ實に神示し給はずば、幾千歳の昔、彼は果してよくかくの如き事々を預言し得たでありませうか。讀むべきかな我等の主は永遠より永遠に在し、昨日も今日も何時までも變り給ふ事はありません。願はくば榮光とこしへに主にあらんことを。

## 第三十八章

參照||創世記第五十章

## 一、ヤコブの葬儀

地平線の彼方まで赤熱に燃えて居るかのやうな沙漠に岬々として聳ゆる世界の偉觀ピラミツドは、エジプトの表徴であるかの如く泰然とその雄姿を示して居ります。この大自然を友として住むエジプト人は、稀に見る華美なる葬儀を以て知られた國民であります。前年この砂の海に開示されたツタンカメン王の墓、ピラミツドの地下よりは、お伽の世界の隠れた寶庫でもあるかのやうに、幾百萬圓にも餘る寶物が發見せられました。

總理大臣ヨセフの時代にも、既にかくの如き華美なる葬儀がエジプトの地に行はれてゐたのであります。靜かに祝福を終へて息絶え、刻一刻と冷えてゆく父ヤコブの面に、ヨセフは泣

き伏しました。やがて遺骸に藥塗るための四十日は過ぎ、エジプト人の歎きの七十日も終へましたので、ヨセフはパロの家に告げて、

「我もし汝等の前に恩恵を得るならば請ふパロの家にまうして言へ、わが父我死ばカナンの地にわが堀おきたる墓に我をほうむれといひて我を誓はしめたり然ば請ふわれをして上りて父を葬らしめたまへまた歸りきたらんと」(五十〇四、五)

と依頼いたしました。そこで王よりの許可が出て、ヤコブのために國葬は命ぜられ、エジプト全國は動搖しはじめました。宮内省の役人等、代議士共の他の會葬者は幾百人、遙々とアラビヤの砂漠を越え、十一日程の旅程を経て、アブラハム、サラ、イサク、リベカ、及びヤコブの妻レアの眠れるマクベラの洞穴に着き、そこにヤコブを葬りました。ヘブロン地、幾代の祖先の眠る此の墓地は、三千九百年來貴ばれて來た地であります。私共の宗教は墓を粗末にする宗教ではありません。愛する者を懇におくり、復活の場所として其の墓を淨め、これを尊重することは、私共の主義とするとあります。終りのラツパの鳴らん時、主イエスが新しきヨセフの墓に、甦り給ひしごとく、イスラエルの各先祖達もこの墓より、榮光の姿を以て新生

に甦り出づるであります。

## 二、ヨセフの赦し

葬儀はこゝに終了し、彼等は歸路につきました。緑の山野に送り迎へられつゝ旅をすゝめて、漸くエジプトの地は近づき、遙か彼方にかすんで見えたピラミッドも、次第に近く大きく聳えて來るのであります。歸り着いて疲れた足を休めつゝ、種々旅の月日の思ひ出を語り合ふうちにも、こゝにまた一つの解決を要すべき事柄がヨセフ兄弟等の間に起りました。

今や父は逝き、後にのこつたヨセフとその兄弟等とは互に直接の交際となりましたので、過去に罪ある兄弟達は、こゝにまた改めて仲直りの必要を感じる様になつたのであります。そこで彼等はヨセフに使者を送り、

『なんぢの父死るまへに命じて言けらく 汝ら斯ヨセフにいふべし 汝の兄弟 汝に惡をなしたれども 翼はくばその罪咎をゆるせと 然ば請ふ 汝の父の神の僕等の 咎をゆるせ』(五十〇十六

と懇願致しました。彼等の心の奥底に今尚ほ自分の愛が疑はれ、自分に對する不安の浪が靜まり切らぬ事を知つた時、ヨセフはまた新たな涙を誘はれたのでありました。つゞいて兄弟達自らもヨセフの許に到り、平身低頭ひたすら彼の僕とならんことを乞ひました。

『懼るなかれ我あに神にかはらんや 汝等は我を害せんとおもひたれども神はそれを善にかはらせ今日のごとく多の民の生命を救ふにいたらしめんとおもひたまへり 故になんぢらおそるゝなかれ我なんぢと汝らの子女をやしなはん』(五十〇十九—廿一)

と、ヨセフは心と言葉をつくして彼等を慰め、懇に應對致しました。あゝこの罪の赦し、恨みを忘れ、ひたすら慰めと平安とを與へんとするその愛の泉は、永遠に盡きず絶えざる美德の源であります。

『父よ彼らを赦し給へその爲す所を知らざればなり』(路廿三〇卅四)

兄弟姉妹よ、萬民の救ひのため自ら十字架にかゝり給ひし主イエスが、悔改めて信する者を無限に無條件に赦し給ふがごとく、私共もまた純なる愛と信仰の火を燃やし、寛大なる態度を以て人の惡を赦すべきではありませんまいか。

## 三、ヨセフの柩

夢の間に幾十の春秋を重ねて、ヨセフは年齢百十歳に達し、今彼は幸福な賑はしい家庭に、孫達や曾孫までもその膝に抱いて喜ぶ白髪の老人となりました。彼は世を去る日の遠からぬを思ひ、兄弟達に向つて、

「我死ん神かならず汝等を眷顧みなんぢらを此地よりいだしてそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひし地にいたらしめたまはん 神かならず汝等をかへりみたまはん汝らわが骨をこゝよりたづさへのほるべし」(五十〇廿四、廿五)

と遺言したのであります。

「信仰によりてヨセフは生命の終らんとする時イスラエルの子らの出で立つことに就きて語り又おのが骨のことを命じたり」(来十一〇廿二)

時がつて彼は遂に眠りに就き、薬塗られて後柩に納められました。その柩はイスラエル人が再び約束の地に導かれ歸るまでエジプトの地に安置せられてありました。それ故イスラエルの

子孫は以後三百年間、この柩を見る毎に彼の言葉を想ひ起した事でありませう、遂に漂浪四十年、アラビヤの砂漠を渡り、ヘブロンなる祖先の墓に愈々彼が葬られる時まで、その柩は常にイスラエル人の聖書として、希望の表徴として、又忍耐の信號として、エジプト人の残忍によりく耐え忍ぶ力を與へた貴い器でありました。彼が靈柩に入りたると、主イエスが今なほ活き給ふとの相違はありませんが、主イエスの聖餐が主の再臨の預言として人々に希望を抱かしめると同様に、ヨセフも亦安息と希望とを失望の淵に沈まんとせるイスラエルの人々に與へつゝ、いかに彼等の靈性を慰藉し激勵したことでありませう。





Printed in Japan

大正十五年十二月三日印刷  
大正十五年十二月六日發行

創世紀時代  
定價金貳圓

著者  
ロ ー ガ ン

發行者  
東京市赤坂區青山樓田三十三  
エス・エイチ・ウエンライト

印刷者  
東京市京橋區瀧山町五  
渡邊吉郎

印刷所  
東京市京橋區瀧山町五  
中心堂印刷部

發行所  
東京市京橋區銀座四丁目一番地  
教文館出版部

發賣所  
東京市京橋區銀座四丁目一番地  
京都市河原町通り丸太町上ル  
教文館

不許  
複製

田中 達著

# マタイ傳註解

東洋の學者としての同氏の聖書に對する見識は未だ西歐の人の届かない域まで福音の眞意を探つてゐる。是程くばしいマタイ傳の註解は未だ我國に見たことはなかつた。

菊判總ク  
ロス綴金  
文字箱入  
五五〇頁  
定價 三、〇〇  
郵税 二七

村田 四郎著

# ルカ傳註解

前掲のマタイ傳と同じ體裁の書で、ルカ傳の内容を詳細に釋いたものである。ルカ傳は四福音書中一番整頓した基督傳である。本書の精讀は必ず福音の理解を助けるに信る。

菊判總ク  
ロス綴箱  
入金文字  
入  
四二〇頁  
定價 二、五〇  
郵税 二四

インブリー原著 井深樅之助譯

# ピリピ書註解

パウロの友愛の書簡が我國基督教界の元勳で共に軀を負ひ、互に勵まし、慰め合つたイムブリー、井深兩博士の手によつて註解せられた。我國の使徒時代を記念すべき書である。

菊判總ク  
ロス最上  
製箱入  
定價 二、〇〇  
郵税 一二

小崎 弘道著

# マルコ傳註解

學者として牧師として我教界の元勳小崎弘道氏が親しく執筆してマルコ傳の思想内容を詳解せられたものである。井深博士のヒリピ書と好一對をなし永く我國に傳はる可ものである。

菊判總ク  
ロス最上  
製箱入  
二〇〇頁  
定價 二、〇〇  
郵税 一八





Library of The Theological Seminary

PRINCETON · NEW JERSEY



PRESENTED BY

The Author

Al Ale.

SCB  
7854

